平成２７年度指定

スーパーグローバルハイスクール

研究開発実施報告書（第２年次）

平成２９年３月

札幌日本大学高等学校

はじめに

平成２９年３月吉日

札幌日本大学高等学校長　浅利　剛之

札幌日本大学高等学校は、今回でＳＧＨ指定校として２年が経過しました。

本校は、育成人材像を「世界に貢献する人」と位置づけ、世界に調和し、協調できる人間性と、待ち受けている困難を克服することが出来る精神力と実力を兼ね備えた人材を育成することを目標に掲げております。日本は資源の少ない国ゆえに、地球全体をフィールドにしたグローバルな展開をしていくことが、これからの日本には不可欠と考えております。国際交流を長く続けている本校ですが、さらに国際教育の段階を一歩進め、新しいステージでグローバル・リーダー育成を実現することを目標にＳＧＨ指定校となり、その責任を感じながら学校一体となって懸命に実践しております。

一方で、本校の教育目標である「世界に貢献する人材育成」やＳＧＨの目標である「グローバル・リーダー育成」のための取り組みとは、具体的にはどんなことか、決まった形がないだけに、有効な手段を試行錯誤してきました。この２年間で心掛けたのは、テーマを深く研究している専門家や実際に経験をした人物など、本物、真実を知る多くの外部の方から話を聞く機会を、毎週シャワーのように浴びせ、グループワーク、ワークショップ、パネルディスカッション等を通して自分の考えを創造していくことです。またそれに付随して、プレゼン力の向上やコミュニケーション力、英語力、国際理解等の教育にも注力し、グローバルマインドの向上を目指してきました。具体的には、北海道の観光・食・北方領土・戦後７０年（申請当時）をテーマの中心に置き、上述の方法でそれらを掘り下げることで実施してきました。

２年目は、中高一貫コース１・２年生と特進コース１年生に対象を広げ、探究基礎・探求応用といった設定科目を設置し、この時間をＳＧＨ事業の中核としました。外部講師選定は昨年一年の反省を踏まえ改善して実施しております。また、国内研修として秋田の国際教養大学訪問、先進的な取り組みを実践している長崎大学への訪問、海外研修として北海道と連携を強化しているマレーシア・シンガポールへの訪問を実施して、研究テーマの知識を幅広く研究してまいりました。さらに、高校生模擬国連やトビタテ！留学ＪＡＰＡＮのような課題研究外の活動も積極的に実施、推奨し、またケンブリッジ英検などグローバル人材に不可欠な英語力向上の新しい取り組みもスタートしています。

本事業に取り組む中で、生徒のグローバルマインドが変化し、また研究の取り組み方が積極的になり、想像以上の大きな手ごたえを感じております。また、教員の指導法や指導力についても昨年よりも明らかに向上していると確信しています。指定３年目となる次年度は、中間評価の年になります。２年間の経験を踏まえ、ＳＧＨ事業をさらに広く、深く、学校全体に浸透させ、テーマを深く掘り下げることで、さらに内容を発展させていきたいと考えております。

最後になりましたが、２年目の活動をまとめた本報告書が、グローバル・リーダー育成の教育課程や学習指導に、多少なりともご参考になれば幸いです。また、本校のＳＧＨ事業にご協力いただいた関係の皆様に御礼を申し上げると共に、さらなる充実に向けて忌憚のないご意見を承りますようお願いを申し上げ、はじめの言葉といたします。

目　次

Ⅰ．研究開発の概要　・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

１．実施期間
２．学校の概要
３．研究開発名
４．研究対象生徒
５．研究開発にあたって
６．研究開発の目的・目標

Ⅱ．研究開発の内容　・・・・・・・・・・・・・・・・・・2

１．課題研究の取り組み
（１）課題研究
（２）探求基礎・探求応用単位数
（３）観点別学習到達度指標
（４）年間授業日程
（５）パフォーマンス評価
（６）論文策定評価の書式
（７）探求活動教員研究モデル
（８）異文化理解定義・指導目標
（９）教科横断型探求授業の研究モデル
(10) 探求基礎　授業実績
(11) 探求基礎　試行テスト
(12) 探求応用　授業実績
(13) 特別講演会
２．課題研究外の取り組み
（１）高校生模擬国連大会への取り組み
（２）英語力向上への取り組み
（３）海外姉妹校との交流
（４）飛びたてジャパン高校生参加
３．成果の発信・広報
（１）学校ホームページ
（２）ＳＧＨ通信
（３）シンポジウム等への参加

Ⅲ．目標の進捗状況・評価　・・・・・・・・・・・・・・・５６

１．生徒の変容

（１）意識の変容
（２）能力・技能の変容
２．教員および学校の変化
（１）グローバル人材育成に対する意識
（２）グローバル人材育成のための指導方法の改善
（３）教員間の連携・協力，指導体制
（４）大学・企業との連携・ネットワーク
（５）学校評価
３．外部評価
（１）運営指導委員会
（２）探求型学習研究会

Ⅳ．今後の課題及び改善の方向性　・・・・・・・・・・・・・・・・７４
１．課題研究の取り組み
２．パフォーマンス評価
３．海外フィールドワーク
４．校外での活動・研究会への参加

Ⅴ．課題研究外報告　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・７７
１．高校生模擬国連
２．飛びたて留学ジャパン参加
３．民間企業との連携

Ⅵ．平成２８年度教育課程表　・・・・・・・・・・・７９

Ⅶ．ＳＧＨ・ＳＳＨ研究開発組織図　・・・・・・・・・・・８０

Ⅷ．フィールドワーク研修・海外研修・留学実績　・・・・・・・・・　・・８０

Ⅸ．生徒論文集　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１００

Ｘ．社会課題研究論文英語版・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１２６

Ⅰ．研究開発の概要

１．実施期間

平成２８年４月１日～平成２９年３月３１日

２．学校の概要

（１）学校名　学校法人　札幌日本大学学園　札幌日本大学高等学校

（２）課程・学科・生徒数

課程	学科	第１学年		第２学年		第３学年		計	
		生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数
全日制	普通科	４３３	１３	３３９	１０	３５０	１０	１１２２	３３
コース	総合進学	２２９	6	１５８	4	１６０	4	５４７	１４
	特進	１２７	4	１１１	3	１０９	3	３４７	１０
	中高一貫	７７	3	７０	3	８１	3	２２８	9

（３）教職員数

校長	副校長	教頭	副教頭	教諭	専任講師	養護教諭	非常勤講師	司書	事務職員	計
1	1	3	1	４３	１８	2	１８	1	１０	９９

３．研究開発名

北海道の産業課題を世界視点で捉え，解決に導くグローバル人材育成

４．研究対象生徒

（１）探求基礎１年生（中高一貫６３名・特進１５名の７８名）探求応用２年生（中高一貫６８名）全体で１４６名が対象。探求型授業は，各教科で取り入れることで全校生徒に広げることとしている。

（２）研究対象生徒プロフィール

①中高一貫コース１年生は，ＳＧＨ及びＳＳＨを選択受講とした。

②特進コース１年生は，ＳＧＨ及びＳＳＨを選択受講とした。

③中高一貫コース２年生は，探求基礎受講者全員が探求応用に継続した。

５．研究開発にあたって

生徒・保護者に対し，スーパーグローバルハイスクール事業の指定を受けた経緯と何故このような研究が必要なのか，また，グローバル化時代に於ける主体性，課題発見力，解決への積極性などの生きる力の必要性を説明し理解を求めた。

６．研究開発の目的・目標

（１）目的

今日の世界においては，社会，経済，文化のグローバル化が急速に進展し，国際的な流動性が高まっている。また，科学技術の急速な進歩と社会の高度化，複雑化や急速な変化に伴い，過去に蓄積された知識や技術のみでは対処できない新たな諸課題が生じている。これらに対応していくため，世界と競える新たな知識や専門的能力を持った人材が求められていることから，２１世紀の社会状況を展望し，激動する国際社会で活躍するグローバル・リーダーとなるべく素養をもった人材の育成を研究開発の目的とする。

（２）目標

多文化社会において,「自我の確立・多様性の受容・普遍性への気づき」の IB 精神のもと，世界規模の視点にたって，グローバル化社会の課題を自らの問題意識から発見し，多角的に検証を行い,責任ある地球市民として多様性ある行動と発信を行える人材育成を目標とした，課題探究型（「課題の設定」・「調査（文献調査・フィールドワーク，実験，観察等の活動)」・「整理・分析」・「まとめ・表現・発信」という一連の探究活動の総称）のカリキュラム開発である。

目標とする成果物は，グローバル・リーダーの育成に関る①カリキュラムの開発，②教材の開発，③授業実践や体制の構築，④パフォーマンス評価を含めた検証評価の仕組みづくりである。

生徒が取り組むテーマは，世界的な視野，感性をもって具現化するために，身近である北海道が直面する産業・環境・社会課題（食料と生産・観光産業・領土問題を題材）や戦後７０年を通じた歴史問題を題材にし，世界との関わり方に積極的に取り組むことで，自らが社会の問題を発見し，解決へ導く手法の研究を，課題探究型の研究を通じて成熟させる。

また，国際舞台での発信力，交渉力となる英語コミュニケーション力育成と，ジェネリックスキル（世の中の情報を的確かつ多角的に捉える視点と，それを発信する力）の研究も合わせて目標とする。

本校に於いても，教育ビジョンの一つに「世界で貢献する人」を掲げ，世界規模の視点にたってグローバル化社会の課題を自らの問題意識から発見し，多角的に検証を行い，責任ある地球市民として多様性ある行動と発信をすることができる人材の育成としている。

Ⅱ．研究開発の内容

１．課題研究の取り組み

（１）課題研究

・「探求基礎」「探求応用」における指導体制の方針として，高校の教科指導のあり方を新たな創造を目標としてシラバスの策定を行った。基本方針は，教員が教えるのではなく，教員は課題を与えコーディネート，評価の立場とし，生徒自身は自ら調べ考え，教員に指導を請うということを基本として計画を進めた。指導者は，公的機関・民間企業・大学と多様化し，本校教員と一緒になって生徒と意見交換を行いながら研究課題を進行する形態をとった。

・ＩＴインフラの発達，整備と共に，比較的調べることはできる生徒達であるが，調べたことの正誤を判断し，課題を見出し議論する能力については，幼さが残る面が多く見られた。また，文書作成能力，計算ソフト，プレゼンテーションテーションなどの使用についても，生徒間での技術的な能力差が大きい状況であった。

・基礎的知識，探求型学習の基礎的技能を身につけることを目標に「探求基礎」「探求応用」を行い，グループ議論，企画書策定，ポスターセッションの取り組みを実施したが，身近な生活の話題をテーマに世界とのつながりを意識する姿勢に課題が残った。

（２）探求基礎・探求応用単位数（２８年度）

科目名	学科名	学類名	年次	単位数	種別
探求基礎	普通科	中高一貫コース 特進コース	1年	2	必履修
総合的学習				1	
探求応用	普通科	中高一貫コース	2年	2	必履修
総合的学習				1	

（３）観点別学習到達度目標

【探求基礎　高校１年】

	単元名	学習内容・学習のねらい	時間数	観点別学習到達度目標				
				関心・意欲・態度	言語力 表現力	実践力	知識力	協働性 主体性
課題研究テーマ（「知る」基礎を学ぶ・新たな知識を得る）	世界規模の経済活動を学び，日本と北海道の現状を把握し，北海道の課題を探究	北海道の経済・観光について，産業分野別に統計調査から現状を知り課題をまとめる	6	北海道の経済を理解することで，各種産業を理解し，課題模索する	自分の意見を論理的に主張できる能力，コミュニケーション能力，ディベート能力，プレゼンテーション能力などが向上する	社会生活を通じ，柔軟性に富んだ問題解決能力を発揮し，与えられた課題，新たな活動などに対し，目標設定ができ，かつ，それを実現するためのプランニング能力の向上	自国の文化・歴史に深い知識と理解を持ち，他国に伝えることができること。また，他国の文化・歴史に対する理解を積極的に実行する姿勢	多角的な視点を持ち，多面的で広い視野を学ぼうとする姿勢を持ち，主張と協調性のバランスが取れ，冷静に対応でき，強いリーダーシップを発揮しようとする姿勢
		米国・オーストラリア・マレーシア・EU・台湾と日本・北海道の文化，経済，教育の相違点を調査し現状を理解する	8	他国と北海道の関係を多様な分野から知ることで，他国文化を理解する				
	国際観光都市北海道の価値を高めるため，調査研究（対外国人）を実施し，北海道観光へのニーズ調査からその課題を取り上げた課題探究	国土交通省北海道運輸局が実施している訪日プロモーションについて，現状を理解し，課題を発見する	6	公的機関の取り組みと現状の課題に興味を示す				
		海外で働くキャリアデザインを知り，異文化意識を理解する	2	海外で働くキャリアデザインを知ることで，異文化に関する積極的理解を示す				

		発展途上国に於ける観光産業開発の実態を知り，観光産業に関する開発活動の意識を持たせる	2	観光産業を開発するにあたり，その手法や手段について関心を示す				
		国際教養大学・長崎大学・根室フィールドワークを通じて，留学生に観光ニーズの調査を行う	4	予め計画したニーズ調査を積極的に行動に移す				
	北方領土問題に関する歴史的背景，政治活動，現在の国交交渉についての課題探究	北方領土の歴史を理解する	10	北方領土の歴史の課題に関心を示す				
		北方領土返還の歴史と現状（国交交渉）を理解する	8	北方領土問題に関する国交間の交渉状況に興味を示す				
	海外フィールドワーク	シンガポールの高校生を北海道に研修旅行目的で訪問していただくための，現地学校に対する企画書の策定	2	・自ら律しつつ他人とともに協調しようとする ・履修した内容を発展的に活用する姿勢 ・プレゼンテーションにより，情報を発進する姿勢				

【探求応用　高校２年】

	単元名	学習内容・学習のねらい	時間数	観点別学習到達度目標				
				関心・意欲・態度	言語力 表現力	実践力	知識力	協働性 主体性
課題研究テーマ(「課題解決型学習」	PBL「課題解決型学習」	少人数グループによる問題発見解決型(事例解決型，事業課題解決型)の学習法を用いて，グループ討議，活動記録の作成，自己学習，成果報告までを含む統合的・創造的な学習に主眼を置く。	28	近年の高度化するグローバル社会に対応する教育の高度化のためには，今までのような一般教養・専門分野の系統的学習も大切であるが，一方で社会的にも問題解決が必要となっており，そのようにリアルな問題に対峙し，その解決過程に参画することで実践的思考を鍛えるが，その意義を鑑み積極的に取組んでいる姿勢。	自分の意見を論理的に主張できる能力，コミュニケーション能力，ディベート能力，プレゼンテーションテーション能力などが向上する	社会生活を通じ，柔軟性に富んだ問題解決能力を発揮し，与えられた課題，新たな活動などに対し，目標設定ができ，かつ，それを実現するためのプランニング能力の向上	自国の文化・歴史に深い知識と理解を持ち，他国に伝えることができること。また，他国の文化・歴史に対する理解を積極的に実行する姿勢	多角的な視点を持ち，多面的で広い視野を学ぼうとする姿勢を持ち，主張と協調性のバランスが取れ，冷静に対応でき，強いリーダーシップを発揮しようとする姿勢
	課題研究	与えられた4テーマの中から，1テーマを選択し課題論文を策定する。 ①論文(日本語) ②論文(英文) ③プレゼンテーションテーション	12					

（４）年間授業日程

【探求基礎　高校１年】

（指導目標）

「北方領土問題を通じて世界の領土問題を考察する」「異文化研究を通じて他国を理解する」「北海道の経済・観光の課題を考える」の３テーマを探求する。

		回	研究課題	指導者
４月１４日	木	１	オリエンテーション①	副校長・辻・国分・杉田・見山・渋谷
５月１２日	木		オリエンテーション②	副校長・辻・国分・杉田・見山・渋谷
５月１９日	木	２	北方領土返還（事前学習）	副校長・辻・国分・杉田・見山・渋谷
５月２６日	木	３	北方領土返還（事前学習）	副校長・辻・国分・杉田・見山・渋谷
６月２日	木	４	北方領土返還（歴史）	北方領土復帰期成同盟 （山崎　隆先生）
６月２３日	木	６	北方領土変換（歴史）	北方領土復帰期成同盟 （山崎　隆先生）
６月３０日	木	７	北方領土（元島民の方の講話）	千島歯舞諸島居住者連盟（河田　弘登志先生）
７月１４日	木	８	北方領土返還（外務省）	外務省欧州局ロシア課（城野　啓介先生）
７月２１日	木	９	北方領土返還（事後学習）	副校長・辻・国分・杉田・見山・渋谷
夏期休期間			①国内フィールドワーク　国際教養大（８/１～８/４）	国分・渋谷
			②国内フィールドワーク　長崎大学（８/６～９）	副校長・辻
			③国内フィールドワーク　根室（８/１５～１８）	杉田・見山
８月２５日	木	１０	北方領土発表グループワーク	副校長・辻・国分・杉田・見山・渋谷
９月１日	木	１１	異文化研究(長崎大学):決定	長崎大学　多文化学部 葉柳　和則教授
９月８日	木	１２	北方領土課題研究発表	副校長・辻・国分・杉田・見山・渋谷
９月１５日	木	１３	北方領土課題研究発表	副校長・辻・国分・杉田・見山・渋谷
１０月１３日	木	１４	異文化研究 （日本とベトナムの教育）	法政大学（佐藤琢磨　先生）
１０月２０日	木	１５	異文化研究 （異文化への取り組み）	北海道大学　観光学高等研究センター 花岡拓郎　先生
１０月２７日	火	１６	異文化研究 （異文化への取り組み）	マレーシア政府観光局 （徳永誠　先生）
１１月１７日	木	１８	異文化研究 （異文化への取り組み）	在オーストラリア領事館 （イアン・ブレイジア領事）
１１月２４日	木	１９	運営指導委員会	運営指導委員会
１２月１日	木	２０	北海道の産業発展と観光	北海道総合政策局　（佐々木敏先生）
１２月８日	木	２１	異文化研究	在米国領事館 （ハーバー・ビーズリー領事）
１２月１５日	木	２２	北海道の産業発展と観光	北海道総合政策局（佐々木敏先生）

１月１２日	木	２３	北海道の産業発展と観光	北海道大学　観光学高等研究センター 福山貴史博士 研究員
１月１９日	木	２４	北海道の産業発展と観光	北海道大学　観光学高等研究センター 村上佳代特任助教
１月２６日	木	２５	北海道の産業発展と観光	国土交通省　北海道運輸局観光部
２月２日	木	２６	北海道の産業発展と観光	国土交通省　北海道運輸局観光部
２月２３日	木	２７	海外フィールドワーク事前研究	辻・国分・杉田・見山・渋谷
３月９日	木	２８	海外フィールドワーク事前研究	辻・国分・杉田・見山・渋谷
３月１６日	木	２９	海外フィールドワーク事前研究	辻・国分・杉田・見山・渋谷
３月２２日	水		海外フィールドワーク マレーシア・シンガポール	副校長・辻
３月２３日	木			
３月２４日	金			
３月２５日	土			
３月２６日	日			
３月２７日	月			
３月２８日	火			

【探求応用　高校２年】

（指導目標）

後期からの個人による課題研究にあたり，企業から講師を招き「課題発見・分析・施策プログラム」を学び，グループによるプレゼンテーションを実施する。

		回	研究課題	指導者
４月１２日	火	１	シンガポール研修を振り返って	副校長・諸橋・渡辺・多津美
４月１９日	火	２	シンガポール研修を振り返って	副校長・諸橋・渡辺・多津美
４月２６日	火	３	研究発表会準備	副校長・諸橋・渡辺・多津美
５月１７日	火	４	研究発表会準備	副校長・諸橋・渡辺・多津美
５月３１日	火	６	研究発表会準備	副校長・諸橋・渡辺・多津美
６月１４日	火	８	研究発表会準備	副校長・諸橋・渡辺・多津美
６月１７日	木		平成２７年度　研究発表会	副校長・諸橋・渡辺・多津美
６月２１日	火	９	課題発見・分析・施策研究プログラム	Cybozu 社　（田村　悠揮先生他）
６月２８日	火	１０	課題発見・分析・施策研究プログラム講演	WIN　D'OL　CO. 社他　（巻　沙織・黒井　理恵先生他）
７月１９日	火	１１	課題発見・分析・施策研究プログラム決	副校長・諸橋・渡辺・多津美
夏期休期間			①国内フィールドワーク　国際教養大学（8/1～8/4）	国分・渋谷
			②国内フィールドワーク　長崎大学（8/6～9）	副校長・辻
			③国内フィールドワーク　根室（8/15～18）	杉田・見山
８月２３日	火	１２	課題発見・分析・施策研究プログラム決	ＪＴＢ・サイボウズ社（田村　悠揮先生他）
８月３０日	火	１３	課題発見・分析・施策研究プログラム	副校長・諸橋・渡辺・多津美

			決	
９月６日	火	１４	課題発見・分析・施策研究プログラム決	ＪＴＢ・サイボウズ社（田村　悠揮先生他）
９月２０日	火	１５	課題発見・分析・施策研究プログラム決	副校長・諸橋・渡辺・多津美
９月２７日	火	１６	課題発見・分析・施策研究プログラム決	ＪＴＢ・サイボウズ社（田村　悠揮先生他）
１０月１８日	火	１７	北海道大学連携事業	北海道大学　観光学高等研究センター　花 岡 拓 郎先生
１０月２５日	火		課題発見・分析・施策研究プログラム決	副校長・諸橋・渡辺・多津美
１１月１日	火	１８	課題発見・分析・施策研究プログラム決	北海道総合政策 佐々木敏　主幹
１１月８日	火	１９	観光事業を考える	北海道大学　観光学高等研究センター　石黒侑介先生
１１月１５日	火	２０	異文化研究（ＥＵ諸国と日本・北海道）	Onnor.S Vollers
１１月２２日	火	２１	個人研究	副校長・諸橋・渡辺・多津美
１１月２９日	火	２２	個人研究	副校長・諸橋・渡辺・多津美
１２月１３日	火	２３	個人研究	副校長・諸橋・渡辺・多津美
１２月２０日	火	２４	ＪＴＢプレゼンテーションテーション・個人研究	副校長・諸橋・渡辺・多津美
１月１７日	火	２５	個人研究	副校長・諸橋・渡辺・多津美
１月２４日	火	２６	観光事業を考える	北海道大学　観光学高等研究センター　花岡 拓郎先生
１月３１日	火	２７	観光事業を考える	北海道大学　観光学高等研究センター　下休場千秋先生
２月７日	火	２８	個人研究	副校長・諸橋・渡辺・多津美
２月２１日	火	２９	個人研究	副校長・諸橋・渡辺・多津美
２月２８日	火	３０	個人研究	副校長・諸橋・渡辺・多津美
３月７日	火	３１	個人研究	副校長・諸橋・渡辺・多津美
３月１４日	火	３２	個人研究	副校長・諸橋・渡辺・多津美
３月２２日	水		海外フィールドワーク マレーシア・シンガポール	副校長・辻
３月２３日	木			
３月２４日	金			
３月２５日	土			
３月２６日	日			
３月２７日	月			
３月２８日	火			

（５）パフォーマンス評価

パフォーマンス評価を実施するにあたり，グローバル・リーダー像を議論し，人材育成評価を策定した。本年度の生徒評価については，提出したレポート・活動実績・発表評価を担当教員により評価を行った。次年度に向けては，その評価をどのような手法で実施するかを研究する計画である。

【ＳＧＨパフォーマンス評価】

		本校が目標とするグローバル人の素養項目	年度末到達度			グローバル人材育成のルーブリック		
			高1年末	高2年末	高3年末	A グローバル人	B グローバル・リーダー	C スーパーグローバル・リーダー
言語力	①	意見を論理的に主張できる能力				自分の意見に適切な理由づけをすることができる	自分の意見に具体例などを適切に用いて分かりやすく説明することができる	一貫性のある自分の意見を説得力のある表現を用いて伝えることができる
	②	論理的思考力				文章中の事実を正しく理解し，それに基づいて考えることができる	文章中の事実や難解な抽象概念を理解し，それに基づいて考えることができる	文章中の事実や難解な抽象概念を種解し，自分の考えを構築することができる
	③	高いコミュニケーション能力				他の高校生と学校生活などに関する意見を交換できる程度の英語力をもつ	他の高校生と社会や国際問題などに関する意見を交換できる程度の英語力をもつ	他の高校生と社会や国際問題に関する会議等で英語で話し合いを進めることができる
	④	高いディベート能力（英語・日本語）				命題に対して英語で立論を立てることができる	他の高校生と英語でディベートを実践することができる	説得力のある適切な立論を英語で作成し，適切に論証することができる
	⑤	高いプレゼンテーションテーション能力				PPT 等を利用しながら，自分の意見を分かりやすく述べることができる	PPT 等を利用しながら自分の意見を聴衆と関わりながら述べることができる	PPT 等を利用しながら自分の意見を効果的に述べ，聴衆に影響を与えることができる
実践力	⑥	柔軟性に富んだ問題解決能力				社会問題に興味をもち，解決のために意見を出すことができる	社会問題に興味をもち，よりよい解決策を考え出すことができる	社会における問題点を自ら見つけ，あらゆる解決策を比較検討することができる
	⑦	未来を見据えた目標設定ができ,かつそれを実現するためのプランニング能力				自分の学びを客組的に援り返り，次の目標をたてることができる	自分の学びを客観的に振り返り，改善された目標をたてることができる	自分の学びを客観的に振り返り，目標を立て，必要に応じて，修正することができる

	⑧	経験と知識を高次元で融合させる能力				自分の経験を振り返り，考えたことを言語化することができる	自分の経験を客観的に捉え，そこから学び得たことを言語化することができる	自分の経験を客観的に捉え，そこから学び得たことを一般化することができる
	⑨	フィールドワークを中心とした実践力と経験				フィールドワークの計画を立て，実践し，経験したことを活かすことができる	全体を見据えたフィールドワークの計画を立て，柔軟に実践することができる	—
知識力	⑩	デジタルツールを多面的に使いこなす能力				インターネットや Word，PPT などの基本的な使い方がわかる	インターネットや Word，PPT などのそれぞれの特徴を活かし，使用することができる	インターネットや Word，PPT などを目的に応じて効果的に使用することができる
	⑪	自国の文化･歴史に対する深い知識と理解				自国の文化・歴史について興味があり，積極的に知識を得ようとしている	自国の文化・歴史について積極的に知識を得て，理解を深めようとしている	自国の文化・歴史について十分な知識があり，自分なりの解釈をすることができる
	⑫	他国の文化･歴史に対する理解と広い知識				他国の文化・歴史について興味があり，積極的に知識を得ようとしている	他国の文化・歴史について積極的に知識を得て，理解を深めようとしている	他国の文化・歴史について十分な知識があり，自分なりの解釈をすることができる
人間力	⑬	多角的な視点を持つ他面的で広い視野				他者の意見を聞き，自分の考えを深めることができる	事象を複数の情報源から判断し，自分の考えに反映させることができる	事象を吟味された複数の情報源から理解し自分の考えに反映させることができる
	⑭	主張と協調性のバランスが取れる能力				自分の意見と他者の意見の相違が分かり，良さに気がつくことができる	自分の意見と他者の意見の相違が分かり，交渉することができる	自分の意見と他者の意見を客観的に捉え，折衷案を提案することができる
	⑮	強いリーダーシップ				話し合いで決まったことに協力することができる	話し合いで決まったことに自ら率先して取り組むことができる	話し合いで決まったことに率先して取り組み，また他者に働きかけることができる

	⑯	他者の痛みを理解し,サポートできる心				立場の弱い者を理解しようとしている	立場の弱い者を理解し，何が必要か考えることができる	立場の弱い者を理解し，何が必要か考え，実践に移すことができる

（6）論文評価の書式を策定した

生徒の論文を評価するため，次の評価シートを用いることとしている。

3学年SGHスタディ最終報告評価シート

氏　名			提出日		発表日				
研究課題									
評価項目		評価内容	4段階評価			A	B	C	D
論文・企画書に関して	形式的要件	規定のページ，文字数を守っているか							
		表紙，目次，出典，参考文献の表記はなされているか							
		書式を整え，読みやすく工夫されているか							
	内容的要件	課題の設定に対して，問題点を明確にしているか							
		問題点を明確にする客観的データを示しているか							
		多角的な検討･分析を行なっているか							
		課題の設定に対して，問題点を解決する仮説をたてているか							
		仮説を解決する手法を記載しているか							
		課題を解決する提案がされているか							
		新しい提案（作成者の言葉として）がなされているか							
		英文の論文を併設しているか							
発表に関して		発表スライドは，指定された分量に収まっているか							
		発表スライドは，論文の内容を適切に反映しているか							
		口頭発表では，読み上げになっていなかったか							
		口頭発表の声の大きさ，スピードは適切であったか							
		聴衆からの質問，意見に対して適切に回答したか							

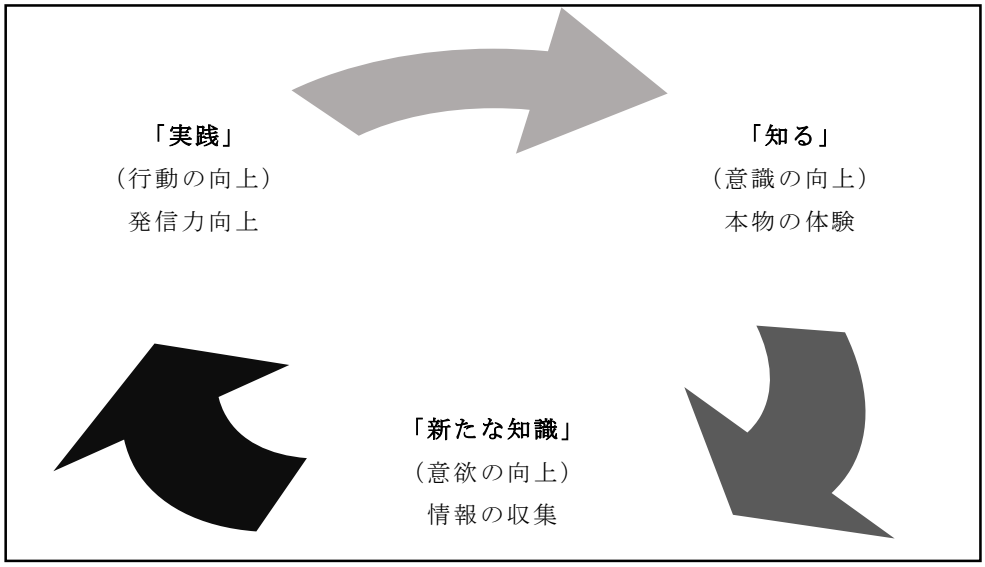
項目別評価　A:十分満足な内容　B:満足できる内容　C:不十分な箇所があった　D:不十分であった

総合評価	A	B	C
	高校生のレベルを超えている	高校生相応の内容	高校生として劣る

（７）探求活動教育研究モデル

「知る」基礎を学ぶ・新たな知識を得る・探究を実践する

「知りたい」に始まり「知りたい」を見つける。そして，容易に答えの見えない問題に気づいて立ち向かおうとする力の育成する指導モデルの構築。



（８）異文化理解の定義・指導目標

異文化理解の具体的指導目標を定義し，各教科で共有する。

１.実務力	経験と実績に基づく実務能力を育成する
２.英語力	諸外国の方々ときちんとコミュニケーションを取る能力を育成する。基本言語は，世界共通言語といえる英語とする。
３.異文化適応能力	社会では，国や地域によって商習慣やビジネスマナー，契約の考え方などが大きく異なる。海外留学を経験し，その生活経験から異文化適応能力育成指導を行なう。
４.論理的思考力	阿吽の呼吸，暗黙の了解はあくまでもローカルルールであるため，不言実行ではなく有言実行がグローバル基準であることを育成する。客観的な指標を示す。
５.環境適応力	異文化の方々を統率していくためには，考え方の違いを受け入れる受容性と，的確に考えを伝える論理性が高いことが求められることを意識させる。
６.首尾一貫性	社会でのビジネスの多くは，損得勘定がベースにあるが，ただの金儲けではなく，品格や人格が必要なことを理解させる。 よく外資系企業社員の方は，この Integrity という言葉を使われていることを理解させる。

（９）教科横断型「探求授業」の研究モデル

教科横断型の探求授業を模索する。探求テーマは次の通りとして，各教科が協力体制をとり実施する。

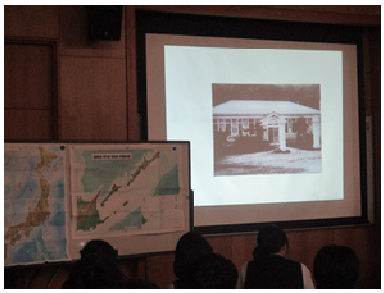
探求テーマは確定しているが，時間数・構想は調整中である。

探求テーマ	担当教科	時間数・構想
世界に広がる食糧危機	地歴公民・英語	・導入　１時間（地歴公民指導） ・グループワーク　３時間 ・発表，評価　１時間（英語科指導）
科学技術はどこに向かう	理科・国語	調整中
変わりゆく公共交通	地歴公民・英語	調整中
環境破壊を食い止めろ	地歴公民・理科	調整中
戦争のない世界を目指して	地歴公民・英語	調整中
医療と健康最前線	理科・保健体育	・導入　１時間（保健体育指導） ・グループワーク　３時間 ・発表，評価　１時間（理科指導）
どうなる日本経済	地歴公民・国語	調整中
エネルギー新時代	理科・国語	調整中
だれもが生きやすい社会へ	地歴公民・国語	調整中
都市と地方　広がる格差	地歴公民・国語	調整中
再発見！　日本の歴史	地歴公民	調整中
みんなで選ぶ国のかたち	地歴公民・英語	調整中
科学の世界へようこそ	理科・英語	調整中
現代社会に生きる私たち	地歴公民・国語	・導入　１時間（地歴公民指導） ・グループワーク　３時間 ・発表，評価　１時間（国語科指導）
文化と歴史を見直す	地歴公民・国語	調整中
平和な世界を目指して	地歴公民・国語	調整中
地震・風水害・噴火に備える	理科・数学	調整中
限りある資源とエネルギー	理科・数学	調整中
誰もが暮らしやすい世の中へ	地歴公民・国語	・導入　１時間（地歴公民指導） ・グループワーク　３時間 ・発表，評価　１時間（国語科指導）
情報社会とのつきあい方	地歴公民・情報	調整中
医療の現場で起きていること	理科・保健体育	・導入　１時間（保健体育指導） ・グループワーク　３時間 ・発表，評価　１時間（理科指導）

（１０）探求基礎　授業実績

□ 授業実績

授業日	授業担当	授業内容
平成２８年 ５月１９日	國分　裕 辻　維之 渋谷　俊之 見山　智宣 杉田　啓輔	本校ＳＧＨ課題探求型学習における研究テーマの一つである「北方領土問題」を取り上げ，北方領土問題の歴史的背景など知識を深め，資料を用いて課題発見能力を養う。 １．実施内容 ①北方領土問題の歴史的背景 ４月のＳＧＨに関するオリエンテーションを終え，いよいよＳＧＨ活動がスタートした。今日は世界で起こっている領土問題について地域・国名とその問題点を考えさせ，各自でワークシートを策定した。次に領土問題となっている北方領土の場所と知っていることを書かせ，北方領土に関する知識を確認。北海道に住んでいながら４島を漢字で書けない，４島の地理が不明瞭な生徒が多く，基本的な知識が身についていない状況であった。 北方領土問題を理解する糸口として，北方領土をとりまく歴史について概観しました。アイヌが住んでいた時代からはじめ，ロシアと日本の国境の変遷について，日露間に結ばれた条約の条文の内容を実際に読み取らせ，理解を深めさせた。 ②グループ活動 ７人１組のグループで北方領土問題と領土問題をかかえている地域（国名）について議論させ，各１枚のレジュメにまとめました。まとめた内容については，次回の授業でグループごとに発表。 ③グループ内意見交換 前回の授業を踏まえ，生徒が事前に調べ用意した資料をもとに領土問題についてグループ内意見交換を行いました。それぞれが用意した資料から積極的な意見交換をしていましたが，問題点も見えてきました。提示する資料について出典までは意識していないこと。中にはWikipediaをそのままコピーしたものもあり，客観的な信用性という点までは意識できていないため今後指導が必要であると感じた。 ④グループ発表 グループ内意見交換によってまとめた領土問題に対する意見をグループとして発表を行なう。その後質疑･応答を行い，知識者の方への質問したい内容をとりまとめる。 他のグループの意見を積極的に受け入れようという姿勢がみられ，質疑・応答も時間いっぱい行われました。また領土問題に対する意欲も高まったようである。 課題としては質疑･応答の部分で，発表する生徒が限られていたという点。受身である生徒もまだ多いので，自身の考えを発表することや相手の意見に対し批判することを意識づけしていく必要がある。 次回からは，有識者の先生を交え，本格的な調査活動を開始する。また，元島民を招き当時の実態を調査する。また，外務省から調査官を招き，国交問題の解決糸口を議論する。

平成２８年 ５月２６日 ６月２日	有識者 山崎隆先生	１．北方領土の歴史 北方領土問題の平和的解決に向けた妥協点模索の可能性について，歴史的背景を踏まえ指導を受ける。日本の立場，ロシアの立場，そしてアイヌ民族の立場に立つことの必要性や戦争という結果にどのように折り合いをつけるかについて提言があった。相手の立場を理解した上で，交渉に臨むことや，事前調査などによる交渉がグローバル化時代では必要であることを理解。 詳細は下記の通り。 ･ロシアの南下政策 ･樺太について（日露戦争以前の日露の通行状況等の説明） ･北方領土に居住していたアイヌ民族について ･樺太･千島交換条約について ･日ソ中立条約について ･日本とロシア，両方の国から翻弄されたアイヌ民族の苦難の歴史について ･サンフランシスコ平和条約の意義について（片面講和の問題の指摘）
平成２８年 ６月２３日	有識者 山崎隆先生	２．北方領土の自然と風土 北方領土の人口や面積，領土返還を求める団体や北方領土へ渡る方法など，北方領土に関する現状を聞く。 詳細は下記の通りです。 ･北方領土の面積（国後島・択捉島等と他自治体，他都道府県との比較） ･納沙布岬からの光景 ･択捉島，色丹島，歯舞諸島の行政区分 ･関連歌「ポンポン船で帰りたい」の紹介 ･各県における元島民一覧人数の紹介（富山県人口が多い理由） ･北方領土返還を求める団体の紹介 ･北方領土へ渡る方法（ビザなし交流，北方墓参，自由訪問） ･日ソ共同宣言について  当時の写真から説明を受ける グループワークする生徒 有識者山崎先生から，当時の様子を伺い，歴史認識の違いや実行支配下になっている北方領土の返還の難しさを知る。世界の領土問題には，それぞれの理由があり，また，国交交渉の難しさを学習した。 グループ活動の中では，生徒の認識の相違もあり，活発な議論を展開した。

平成２８年 ６月３０日	北方領土 元島民 河田　弘登志 さん	３．北方領土の暮らし 　北方領土にある歯舞群島･多楽島の元住民である河田弘登志先生から当時の生活の様子を中心に以下の講演いただいた。 ･歯舞群島･多楽島の紹介 ･主産業（昆布漁），面積（１２平方キロメートル），人口１４５０（２３１世帯）， ･開拓の歴史（明治以降，先代の苦労があって開拓された島）， ･娯楽（運動会，お祭り）について ･終戦後の様子 ･昭和２０年８月２８日～９月５日にかけて，ソ連軍上陸当時のエピソード ･土足で自宅に侵入される，時計・酒類の略奪行為 ･ソ連管理下での生活 ･学校がソ連軍の兵舎となり，学校での教育活動停止。 ･イカ釣り漁船（ぽんぽん船）を利用して，島を離れる家族が増加 　過酷な避難の様子について（途中で命を落とす家族も） ･北方領土について ･今から３０００年前から日本が開拓（一度もソ連の領土になったことはない） ･歴史的にロシア政府も公式に２度北方領土を日本の領土と認めている。 ･元島民約１８０００人中現在６０００人程度しか生存していない。一世の平均寿命は８０歳を越える。 ･返還運動を２世・３世・４世に引継ぐ試みがみられる。また，共存・共生の道をさぐる気運も高まりつつある。（平和的解決として） （質疑応答） Ｑ：「北方領土が日本に返還されたら戻りたいですか？」 Ａ：「平和的に問題が解決されれば，是非戻りたい。」 Ｑ：「ロシア軍が島に上陸したときに心配したことは？」 Ａ：「女性の心配があったので，どの家でも女性を匿った」 Ｑ：「以前と現在の島の違いは何か？」 Ａ：「海岸侵食により島の面積が小さくなった。開発により森林が減少した」 　実行支配をしているのはロシアであり，その事実と国交交渉の難しさは，他の領土問題と比較することはできない。まさしく，答えのない交渉であることを生徒は理解した。 北方領土にある歯舞群島・多楽島の元住民，河田弘登志先生から当時の生活の様子を中心に現在の心境を伺うことで，課題を模索した。
平成２８年 ７月１４日	外務省欧州局 ロシア課 城野啓介　氏	４．北方領土問題と日露関係 　北方領土問題に関する日露外交の実態を外務省欧州局ロシア課の城野啓介氏に指導いただく。世界の場で交渉により進展する議案もあれば，難航する議案も発生する。お互いの立場を捉え，解決する手腕を講話者の実績から学ぶ。

		詳細は下記の通り。 ･講演者の外務省での経験を通した日露外交の実態 ･２０１４年１０月ミラノでの日露首脳会談における事務方の役割 日露首脳会談を実現させるまでの実務 ･外交官通訳に要求されること ･東日本大震災における駐ロシア外交官の体験 東日本大震災をロシアで聞いて ロシア救援部隊の受け入れ，救援部隊の東北地方での活躍 ･外務省におけるロシア外交の位置づけ（各国大使館の人数ほか） ･メドベージェフ大統領の国後島訪問による日露関係の悪化，東日本大震災による日露関係の好転 今後は，これらの講演で学んだことをグループごとに歴史認識・実態認識･現在の国レベルの交渉を踏まえ，高校生として取り組める活動をまとめ，発表する。 外務省欧州局事務官より，２０１４年１０月ミラノでの日露首脳会談における事務方の役割と国交交渉の難しさを学ぶ。
平成２８年 ７月２１日 ８月２１日	本校教員 國分　裕 辻　維之 渋谷　俊之 見山　智宣 杉田　啓輔	５．北方領土問題グループ発表準備 ６．グループ発表 ６月から取り組んできた北方領土に関する講演や座学のまとめをグループごとに発表。多くのグループから出てきた意見は，北方領土の問題により多くの国民が関心をもつために何かすべきであるということでした。どのような手段を使って伝えるべきかということで，SNS を使った宣伝や従来のテレビ・新聞を使った宣伝など様々な意見がでる。まずは，ＳＧＨに参加した自分たちが北方領土のことを広める必要があるという意見が多く，主張する姿勢が芽生えた。 全体的には，内容を上手にまとめた発表が多かった反面，「問題解決」のために高校生の視点から意見を述べているものや，日本・ロシア双方の主張を聞き入れようとするものが見られなかった点は残念であった。もっとも，この点に関しては来年度以降の年間計画にも見直しが必要かもしれないと考えている。例えば，ロシア領事館の方に話を聞いたり，北海道大学スラブ・ユーラシア研究センターの先生に講義していただいたりするなどロシア側の視点や双方向的なアプローチが必要ではないかと感じてる。 各グループの発表に対する質問・意見は良く出ていましたが，発表での基本的な内容の質問が多く出てきたため，質疑応答の時間内で議論を深めきれないまま終わってしまったグループも多かったように思われる。基本的な事実の誤りには気をつけ，典拠となる資料や数値的根拠を挙げつつ，発表するように指導が今後も必要であると痛感した。

		  グループワークで取りまとめた北方領土問題を発表する生徒。全13グループが発表を行なった。 グループ発表風景
平成２８年 ９月１日	長崎大学 多文化学部 社会学部教授 葉柳　和則 教授	「『アルプスの少女ハイジ』のメッセージ」としてハイジの物語を通じてスイスの国家形成や国家統合のしくみ，スイスに関する基礎知識についてお話頂きました。スイスは他文化・多言語国家であり，国家として統合を保ち続けるために初等教育の段階で国内の別の言語を学んでいること，スイスがドイツ・フランスなど周りの大国に囲まれながら国家を維持できた経緯を指導。 （質疑応答） Q．スイスの教育事情を教えてください。 A．スイスでは英語教育の開始時期が問題になっており，初等教育の早期に学習させるべきだという意見と，国内の多言語（フランス語またはドイツ語など）をおろそかにすべきでないという意見が対立しています。 Q．スイスフランについて教えてください A．スイスフランは強い通貨であり，賃金が高く経済が安定していることから他国からの移民が増加していることが問題となっています。 Q．スイスの主要産業は何ですか A．スイスは農業国というイメージがあるかもしれないが，実際には国から補助金が多く出されており，実際には金融業や科学技術による産業が盛んだったり，ノーベル賞受賞者を数多く輩出している。
平成２８年 １０月１３日	法政大学 佐藤琢磨先生	ＳＧＵの法政大学が実践している様々なプログラムの紹介を通して，佐藤氏の担当エリアであるベトナムを中心にベトナム国内で行われている交流事業（日本語スピーチコンテスト等）の紹介とベトナムの教育事情について講義を頂く。ＳＧＵとの連携の中で，今後の大学教育への動機付けを行なった。
平成２８年 １０月２０日	北海道大学観光学高等研究センター 特任准教授 花岡拓郎先生	・講話内容 台湾出身の大学院留学生ジェンさんを招き，台湾から見た日本の教育を議論。その後花岡氏から台湾の習慣や文化などについて講演を頂き，観光客と接するときの知識として，北海道や札幌の地理や産業，言葉などに関わる問題をクイズ形式で回答行いました。 ・グループディスカッション・発表 台湾人観光客が喜ぶような観光提案（食べ物）を５～６人でグループディスカッションを行いました。その際に１人「預言者（予言者）」を決め，この人が「奇想天外な提案」をし，残りの人たちは普通の提案をするように話し合わせるという工夫がありました。これには少数派の意見や批判的な意見を大事にするというトレーニング効果があります。グループで話し合わせた後，生徒がジェンさんに質問をしてヒントを得た上で再度話し合いを深める

		時間をとりました。その後，グループごとに発表を行いました。食の観光提案として鮭とば，たこ焼き，すし，いかめし，牛乳など一般的な提案もありましたが，ジンギスカンキャラメル，北海道素材のしゅうまい，カルボナーラ，白米など奇想天外な提案もありました。 グローバル化の時代では，「一つの考え方」に固執しない多様な考えを持つ思考が大切です。日頃から，多様な考えを持てるようにトレーニングを積むことが重要です。今回は，そのトレーニングをグループ学習の中に取り入れ実施することができました。また，台湾出身の留学生を招き，台湾文化と日本文化の相違点などのインタビューを通じて，両国の文化を研究することもできました。 グループディスカッション
平成２８年 １０月２７ 日	マレーシア政 府観光局 徳永誠　氏	講演内容 はじめに連想ゲームでオーストラリア，シンガポール，マレーシアの３国からそれぞれイメージできるものを生徒に問いかけました。生徒の答えは，オーストラリアはコアラ，カンガルー。シンガポールはマーライオン，高層ビルなどとイメージできるものは多かったですが，マレーシアから何かをイメージできる人はほとんどいませんでした。以前は錫，マハティールなどがイメージできる人もいましたが，最近ではイメージできる人が減っているとのことでした。 日本は少子化，高齢化，市場縮小などの問題に直面しており，人口は２０４８年には１億を切ると推定されています。現在の平均年齢は４７歳です。それに対して，ＡＳＥＡＮは６億３千万の人口を擁し，平均年齢は２０代です。そのなかで，マレーシアは人口３千万，平均年齢２７歳，アメリカ，ヨーロッパが停滞する中で，成長の見込みがある国の一つです。 マレーシアは植民地時代から錫・ゴムなどの１次産業に依存していましたが，豊富な資源を生かして経済を豊かにし，資源価格が暴落した１９７０，８０年代には観光・製造業への転換をすすめ，その後日本など外国企業の受け入れを進め，工業化を進めている。 ・講演者から生徒へメッセージ 多様な世界と向き合う時代から逃げることはできない。積極的に海外に出向いて経験を積んで欲しいということ，マレーシアの文化（信仰する宗教による文化の違い）を食文化，生活習慣などの事例を出し，生徒に提言していただきました。「アジア大交流時代」が到来している今，日本は観光立国を目指しています。日本は２０２０年４０００万人に到達するために皆さんも頑張ってほしいというメッセージを頂きました。

		 マレーシア文化を生徒に話す，マレーシア政府観光局徳永さん。マレーシアの観光の取り組みを説明。
平成２８年 １１月１５日	デンマーク 大使館 OnnoR.S Vollers 氏	日本と欧州諸国との間には歴史的に深い交流があり，我が国が先進国の仲間入りを達成することができた背景には，欧州諸国からの多大なる影響と支援がありました。歴史を考えるとともに，北海道と欧州諸国は気候風土や産業面で多くの共通点があり，農業や酪農等，欧州諸国から学ぶ点が多々あることから探求課題として実施。 また，講師で招いた Onno　R. S　Vollers 氏はコペンハーゲン大学で，日本の政治・経済学を学んでおり，日本の大学と欧州の大学の違いも生徒に知らせることで，海外大学への視野を広げることを目的とした指導を行いました。 ＥＵの概要説明として，独特な経済的および政治的協力的関係を持ち，欧州の２８の民主主義国家の集まりであり，日本の人口の４倍にあたります。ＥＵの目的とは，ヨーロッパ市民により公正で安全な正解の中で，平和と繁栄と自由を保障するものです。 デンマークでは，ドイツにつながる海底トンネル建設に関して，ＥＵからの資金援助ありました。ＥＵ加盟国にはシリア等からの難民が入り，受け入れに関して国境付近には課題が累積しています。フランスで起こった１年前のパリテロ事件の事例があげられました。単一通貨のユーロについて，加盟国２８カ国中１９カ国で利用されており，紙幣のデザインはいずれも同じですが，硬貨は片面だけが共通であることなどが説明されました。 （質疑応答） Q.「アメリカでトランプ氏が大統領に当選したが，ＥＵにとってはどう影響するか？」 A.大統領就任は１月なので，今の段階では何とも言えない。大統領になる前に刺激的な発言があっても，今後の「大統領としての発言」にヨーロッパは注目している。あえて言うならば，ヨーロッパが一丸となっていく場面が増えるのではないか。 Q.スライドにあった「ヨーロッパの地図」における赤色のメンバーズの意味について教えて欲しい。 A.ＥＵ間では他国に移動可能だが，パスポートの提示を求める国と，そうでない国との区別，そして加盟国と加盟候補国の違いである。 Q.「イギリスのＥＵ離脱についてどう思うか，そして，今後ＥＵはどうなるのか。」 A.ＥＵを代表してここに来ているので言い難いが，個人的には思っていることがあるが，ここではＥＵの立場として述べる。率直に残念だと思う。今後のことについては，交渉の結果をみないと分からない。 Q.「デンマークにはどのくらい難民が来ているのか」 A.何万人という規模の難民が来ている。難民として誰を保障するか，という問題に今後なっていくと思う。

		Q.「日本の英語教育についてどう思うか」 A.文章の内容を理解する能力が高いが，単語を単語として覚えている印象が強い。暗記は実践より劣ると思われるので，使う機会を増やすことが大切だと思う。語彙も大事だが，デンマークでは英語で日常会話が９５％話せる。それは，英語の映画に吹き替えがないこともあるし，英語に触れる機会が多いからだ。学校では，文法もやるが，映画をもとにして行うことが多い。実際，学校以外で英語に触れる機会が多い。ちなみにドイツ人とフランス人の英語の下手さは有名。なぜなら，フランスとドイツでは吹き替えがあるのも一因だと思う。 その他，共通通貨のこと，デンマークの留学制度，デンマークを観光する際魅力的な場所，トルコがＥＵ加盟を認められない理由などについて多くの質問が出たが，一つ一つ丁寧に答えていただきました。 前半はオールイングリッシュの講義形式で進み，内容を聞き取ることに苦戦している生徒もいたようですが，後半は質疑応答の時間に，日本語で答えて頂いたためか，積極的に発言する様子が見られた。メディアで話題となるＥＵのことについて，知らないこと，新たに学ぶことが多くあったようでした。
平成２８年 １１月１７日	在札幌 オーストラリア領事館 イアン・プレイシア氏	本講演を受講する中高一貫コース高校１年生は，２０１７年２月７日～２月１６日の１０日間，オーストラリア海外研修旅行を実施します。研修旅行ではホームステイ・ファームステイや本校と姉妹校であるヘイルベリーカレッジの訪問・シドニーでの自主研修などを予定しています。 今回はオーストラリア海外研修旅行の事前学習として，在オーストラリア領事館領事イアン・ブレイジア氏に講演をいただき，気候風土や歴史，産業・日豪関係を学び，オーストラリアに関する知識を深めました。 （１）オーストラリアの気候風土について （２）オーストラリアの歴史について （３）オーストラリアの観光事業と北海道の観光事業について （４）オーストラリアの経済活動と日本の関係 （５）オーストラリアの教育制度と日本の教育制度について 在オーストラリア領事館イアン・プレイシア領事より，オーストラリアと北海道の結びつき・類似点について講話。
平成２８年 １２月８日	在米国大使館 ハーバー・ビーズリー領事	日本と米国の文化の相違点を中心に，日本の産業，経済と米国の関係，米国人の日本観光に関するニーズなどを説明。 米国大学進学について，入試制度やリベラルアーツ教育について，説明を受けた。生徒からは，米国大学進学に関する，授業料や寮生活などの質問が多く出された。 また，国土の大きさの違い（国の中の時差・文化の違い）も話された。生徒は領事の仕事に興味を持ち，質問も多くあった。

		全て，英語で授業を進めることができた。半数の生徒は，英語を理解していた。 米国について英語で説明をされるハーバー・ビーズリー領事
平成２８年１２月１５日	北海道総合政策部政策局計画推進課 主幹佐々木敏氏 主事長門　愛美氏	道庁の総合計画の具体的内容とその計画について，中心的なテーマは「時代の潮流を捉えた北海道の将来展望」。１０年先の２０２５年に向けて，いくつかの具体像に向けて取り組まれています。現在，北海道の強みを活かし，災害等に備えながら，「強靭な」「輝き続ける」北海道を目指し，７つの将来像を掲げ，力を入れていそうです。 講演内容をふまえて，各班で「８つ目の将来像」について話し合いました。その際にタイトル，「生活・安心」「経済・産業」の視点から将来像の具体的な姿，将来像を実現するために活用する北海道の強み，将来像を実現するための取り組みを議論しました。 （発表） グループ内でリーダー・発表者・書記等を決定し，１グループ５分程度で，「新たな北海道の将来像」についてプレゼンテーションテーションを行いました。発表内容については，観光・新交通システム（ロープウェイの利用），民間企業（イオングループ等）と道の駅の融合による地域活性化・歴史・文化（アイヌ文化の継承・振興）など様々な案が提案され，創意工夫が見られる発表が増えてきたように感じました。各グループの発表に対しては，他のグループからその提案に対する積極的な意見，質問が飛び交うようになりました。 （ワークショップ） 【北海道が目指す，７つの将来像】 １．子育て環境・最適地 ２．安心・安全社会 ３．環境先進モデル ４．「憧れのくに」北海道ブランド ５．地域経済の循環 ６．豊富な人材 ７．北海道ならではの個性あふれる地域 それぞれの問題点を挙げつつ，北海道の持つ課題を指摘されました。 ワークショップ後に講師より助言を受ける発表グループ。

		北海道が目指す，７つの将来像についてワークショップを実施。グループ毎にグループ検討結果をプレゼンテーションした。
平成２９年 １月１２日	北海道大学観光学高等研究センター 博士研究員 福山貴史先生	（１）テーマ 地域問題でマイナスとされている存在に着目し，食や観光資源といったプラスの存在として転換・活用できないかという発想の転換を提案いただいた。具体的には，北海道でかつて厄介者としか見なされなかった流氷やエゾシカが観光資源として転換したことを挙げ，そういったものが他にあるのかについてグループディスカッションを行いました。 （２）グループワーク グループは５～６人１グループに分け，①リーダー，②ファシリテーター（進行役），③発表者，④タイムキーパー，⑤書記と役割分担をしました。初級～超上級と難易度を設定し，観光創造力について考えました。上級ダンジョンでは観光資源化された場所について考え，屋根の重たい雪おろし，チェルノブイリ原発観光ツアーを事例として挙げ，ボラツー（ボランティアツーリズム）やダークツーリズムなどについて紹介いただきました。その上で，東日本大震災で大事故を起こした福島第一原発を観光地化することに賛成か反対か，その理由はということを考えました。かつて流氷は地域で厄介者でしたが，観光資源になったことによって「流氷早期到来祈願祭」を行うまでになったという事例を紹介されました。エゾシカが爆発的に増加したため，鹿肉をジビエ料理として食べる習慣を広めようという動きとそのときに起こった反対の動きを紹介し，賛成か反対か理由を考えました。 講師はグループ活動を回り，助言程度とし，生徒が主体となったワークショップを実施。
平成２９年 １月１９日	北海道大学観光学高等研究センター 特任助教　村上佳代　先生	国際協力に関する組織として，ＯＤＡ（政府開発援助），ＮＧＯ（非政府組織），ＮＰＯ（非営利組織）の概要の説明を頂き，世界から見た日本について講演頂きました。 日本は世界からの認知度が高く，日本製品（自動車・家電の普及），日本からの支援（人的支援），援助（ODA等）アニメ等のコンテンツ産業が浸透しています。観光開発という視点から開発協力については見ると，地域の隠れたお宝を探し，地元（地域）の人々が気づいていない貴重な財産・街並み

		を調査，観光に活用することが地域復興を考える上で重要であることが指摘されました。また，国際協力における観光業振興のアプローチについて，ヨルダン・ジンバブエを事例に上げ説明頂きました。ヨルダンは西アジアに位置する王国，国民の大部分はイスラム教徒ですが，一部キリスト教徒も生活しています。隣国はシリア，イラク，イスラエル等政情不安の国に隣接するため，難民も多い国です。村上氏の活動拠点のサルトは観光地化されていませんが，街全体が伝統的街並みを呈しており，街全体が博物館というコンセプトの「エコミュージアム」を実践し，観光業振興のアプローチをしているという貴重なお話を伺いました。 北海道大学観光学高等研究センター特任助教村上佳代先生から，国際協力における観光業振興のアプローチについて学ぶ。また，中東ヨルダンで協働する経験を学んだ
平成２９年 １月２６日	・野口知希氏 （国土交通省北海道運輸局観光部観光企画課課長） ・津田昭宏氏 （同　観光企画課地域第二課長）	テーマ：観光立国推進による北海道の活性化 ～国の観光政策と北海道運輸局の取組～ 我が国の観光の現状，観光政策の背景について ・野口氏の経歴 ・北海道運輸局または，観光部の概要を説明 運輸局業務：観光振興，自動車の登録検査，陸上輸送・海上輸送ほか 観光部は観光企画課，観光地域振興課，国際観光課に分かれる。 ・運輸局で観光を推進する理由，近年の政府の観光事業推進 戦前（昭和５年）に鉄道省の機関として観光局設置（外貨獲得のため） 現在は人口減少・少子高齢化の進行にともない，政府としても成長戦略の一環として観光を推進している。平成１５年にビジット・ジャパンを掲げ，平成２０年には観光庁が発足。観光人口は世界で２０１５年に１１．８億だったのが，３０年には１８億になると予測される。 ・宿泊産業の現状と実態 宿泊施設数　約７万９千施設，従業員数５７万人（正規雇用者は半数未満） 市場規模２．８４兆円（外国人宿泊者が大幅増 H２７対前年比４８．１％） 宿泊ニーズの偏在，経営意識等の問題（旅行会社任せの集客），労働生産性の低さ（いわゆる３K，稼ぎが悪いため人手不足） ・北海道観光の実態 道内におけるインバウンド（内需）は道央圏が７２．６％と集中している。 道内各地にこうした恩恵をどのようにもたらすかが課題 ・北海道観光の充実に向けて（講師の私見） 観光客　①日本人から外国人まで幅広い，②都市圏だけでなく国内外あらゆるところから来訪，③団体から個人へ，④モノの消費からコトの消費へ →このような変化に対応するために地域全体で魅力を高める魅力をたかめるために誰が何をするのか，高校生の斬新な発想と行動力に期待

		生徒質問 ・道内の道東,道北は衰退が著しいため,人口を移動することはできないか？ →コンパクトシティ化をはかることは必要だと思うが,道内の各地域にも魅力ある観光資源がある（例，道東の流氷は中国人に好評)。そうした資源を上手く活用することも重要。 ・インバウンドへの対応は十分か？ →多言語への対応は２種類考えられる。１つは語学に長けた人を育成すること，もう１つは翻訳ツールを活用すること。両方とも取り組んでいきたい。 ６時間目　インバウンドの受け入れ環境整備について ６時間目 ・津田氏の経歴 小樽で生まれ育ち，小樽市に勤務。観光関係の部署で働き，１５年度から運輸局に出向 ・「受入環境整備」 かつてないペースで訪日外国人旅行者が急増,ことば,宿泊,病院などの様々な問題が表面化している。なかでも外国人旅行者が最も不便に感じることは無料公衆無線ＬＡＮ環境が整備されていない場所が多いことだという。そうした環境の整備が重要である。 ・「北海道ブロック連絡会」 急増する来道外国人の受け入れ態勢を整備するべく，北海道の課題を把握，手だてを迅速に講じるために組織された機関 → 道内各地の観光関係者へのヒアリング，課題や対応方針のとりまとめ，観光庁への報告，予算や制度への反映などを取り組んでいる ・道内観光の具体的課題 Wi-Fi 環境の整備が不十分，多言語での情報提供・発信，災害緊急時の他対応，レンタカーの安全確保 →誰が（実施主体)，何を（対応方針)，いつまでに（時間軸）取り組むか。 ・最後に～２０２０年４０００万人に向けて～ 公だからできることもあれば，民でなければできないこともある。若い人だからできることもある。日本を支える人になってほしい。 （生徒質問） ・外国人観光客の緊急時の誘導，避難の実態は？ →観光客は情報不足になりやすい。各施設でのガイドラインの作成や，地域で避難誘導ができるよう促していきたい。 ・レンタカーを外国人が利用することの問題は？ →国同士のとりきめが異なっており,例えば中国人が中国の免許を持っていても日本では運転ができない。 （生徒アンケート） 疑問に思ったこと ・日本人が外国人観光客の受け入れについてどう思っているのか ・地域や民間と国がどう協力して観光業を盛り上げていくのか。 ・法や慣習の異なる外国人にどう対応するのか。 ・日本以外の「観光先進国」の戦略

・まだ見つかっていない北海道の魅力
・毎回思っていることだが，「人口が減少していく」っていう予想は何でであるんだろう。
・地方創成とは何か。
・どのような訪日観光プロモーションによって観光客が急増したのか。
・地方に観光客を呼ぶにはどうしたらいいのか。

（あなたが問題としてとりあげたいこと）
・日本人が外国人を受け入れるという意識を皆が持つことが大切
・観光産業を，外国人訪問者を増やしていくことによって盛り上げることで，色々なものを維持する。これを目指すために様々な方法を国はとっているが，地方自治体やその住民と国がどう一緒に観光について対応しているのか調べていきたい。
・観光産業をテーマとした留学を計画するなど観光産業に強い関心があり，将来は旅行会社で働き訪日観光客を増やすために力を入れたいと考えているため今回の講演はとても参考になった。
・観光業に経済を頼りすぎなのは危険である。特に国際情勢に左右されやすいやすいので，最悪なケースは外国人を重視するあまり，日本人から見放され，外国人はおろか日本人が来なくなることだ。
・日本のホテルは利益率が低いのはなぜか。
・オーストラリアの事前学習で観光について調べる機会があったので日本や北海道の観光と比べられるところがあったのでとても興味深かった。
・お金がかかるけど標識やトイレを外国人にわかるように変えなければならないと思った。
・北海道を盛り上げるために観光客数の少ない４～６月，９～１１月に何かイベントを設けたり，その時期の季節を活かしていくことで活性化するのではないかと思う。

北海道の現状（産業・人口・自然）などについて説明した後，都市部の人口集中や人口減少・高齢化など今後の課題を指摘する，野口知希氏。

タイトル，「生活・安心」「経済・産業」の視点から将来像の具体的な姿，将来像を実現するために活用する北海道の強み，将来像を実現するための取り組みを議論。

平成２９年 ２月２日	・新吾元規氏 （国土交通省北海道運輸局観光部観光地域振興課地域第一係長） ・酒井啓友氏 （同　国際観光課　課長補佐）	講演：観光立国推進による北海道の活性化 ～国の観光政策と北海道運輸局の取組～ 　観光地域つくりについて ・新吾氏の経歴 ・先週の質問に対する回答 　観光消費の経済波及効果の比較（北海道・東京都・大阪府・沖縄県） 　→北海道の観光消費の波及効果は全国平均値や大都市圏と比べるとやや高いが，観光業が盛んな沖縄県と比べると低くなる。 ・観光地域づくりについて 　①訪日外国人旅行者数の推移 　→２０１２年から２０１６年の４年間で約３倍に増加。特に東アジア・東南アジア圏からの旅行者が目立つ。 ②人口減少に伴い観光を核とした地域の再生・活性化は必要 　→旧来型の観光（発地型）ではなく，地域から主体的にサービス・情報を提供する観光（着時型）にシフトした地域ブランド作りが必要。 　着地型商品の事例：エコツーリズム・体験旅行・学習旅行等 ③何のための観光振興なのかを考える重要性 　→地域を豊かにするため，地域住民が幸せに暮らすため，外国との交流の推進等魅力ある地域作りを再考する必要性がある。 　　「住んでよし！訪れてよし！」の観光地域まちづくりが理想。 ●６時間目　訪日プロモーションについて ６時間目 ・酒井氏の経歴 ・訪日プロモーションについて ① 北海道観光入込客数（実人数）の推移 →２０１１年の東日本大震災後は低迷したが，現在外国人観光客は上昇の一途をたどっている。 ② 圏域別訪日外国人の宿泊状況について →依然道央圏の一極集中する傾向にある。道東・道北エリアシェアは極めて低い。 ③ 月別（季節別）の訪日数の状況 →春（３月-５月）と秋（９月-１１月）の閑散期に来道してもらう工夫が必要である。 例：受け入れに余裕があるこの時期にＭＩＣＥの誘致強化 ④ アジアＮＯ１リゾートを目指した取り組み →北海道の３大ブランドを核とした誘客促進 　・広大な大地（ドライブ観光）・自然／魅力ある食・食材／パウダースノーに代表されるウインタースポーツの一大拠点。 ⑤ 世界で行っているプロモーションをスライドで紹介 →台湾では北海道は大人気の観光地 →ＵＡＥではアジアのスイスと称されるなど新たな需要の掘り起こしにめる。 《質疑応答》 ① 国会で最近可決されたＩＲ法について北海道運輸局は何か関わっていますか？

		→酒井氏：北海道運輸局は特に関与していません。北海道には沢山の観光資源（素材）があるので，その魅力をアピールしていきたいと個人的には考えています。 ② 日本人観光客へのアピールについてはどう考えていますか？ →新吾氏：国は海外観光客の増加に力をいれています。北海道は国内観光客に向けての観光客増加に向けて取り組みを中心に行っており，国：海外観光客，北海道：国内観光客というように役割を分担しています。 生徒アンケートより ・普段私たちが考えていないものが観光資源になっていることがわかった。 ・旅行会社のみならず，地域自ら観光客に来てもらう活動をすることで地域振興・地域再生につながることは貴重な取り組みだと痛感した。 ・ジュエリーアイス（道東・十勝管内豊頃海岸）という見聞きしたことのない観光資源があることを初めて知った。 ・観光客誘致には北海道と世界を結ぶ航空機（直行便）が必要不可欠なことをしった。台湾の航空会社の経営破綻による影響もあったのがわかった。 ・現状多く来道していく国・地域以外からも積極的に誘客促進すべきだと感じた。 ・日本の少子高齢化対策として移民の受け入れ案もあるが，海外からの観光客を積極的に迎えることで，その対策の代替案になるのではと思った。 ・北海道の観光について，あまり知らなかったので，今回の講演で様々な情報を頂きとても参考になった。 ・北海道は冬季シーズンの方が人気かと思っていたら，意外にも夏季にも多くの海外観光客が来道していることに驚いた。 ・北海道には観光地が沢山あるが，面積な広大なためその移動手段（レンタカーや広域交通手段）の整備が必要ということがわかった。

（１１）探求基礎「試行テスト」

４月からスタートした「探求基礎」における，生徒の認識を調査する目的で，試行テストを実施した。

(a)　調査内容

・リーダーとしての素養をどのように生徒が認識してきたかを調査

・協働しようとする素養がどの程度育ってきたかを確認する

・言語意識について

の３点について，生徒はどのように論じるかを調査する。

(b) 調査方法

・資料を与え，設問について論じる。

(c) 設問

■課題

企業は，海外で売る・つくるという「国際企業」から，海外への権限移譲を進める「多国籍企業」へと変身し，そして，地球で一つの会社となる，つまり世界中で一番ふさわしい場所に事業機能を分散させ，適正な場所で，適正な時期に，適正な価格で経営資源を最適化するグローバル企業へと進化を遂げるモデルを理想と考える傾向にあります。

あなたは，ユニクロの社員として採用され，10 年が過ぎました。ある日，会社からインドの地方都市に海外赴任を命じられました。そこは，ユニクロが新しく店舗を出店するもので，そこの店

長を務めることになりました。そこで働く社員，アルバイトは既に採用済みです。採用者の国籍は，社員（インド１名・中国１名・スリランカ１名・米国１名），アルバイト（インド 15 名・中国５名・パキスタン５名）です。店舗のオープンまでは１ヶ月の準備期間があります。あなたは，店長として１ヶ月間にどのような準備を行ないますか。別紙に簡潔に記載しなさい。

■資料

●ユニクロの会社紹介

（１）ミッション＆ ビジョン

ユニクロは，あらゆる人が良いカジュアルを着られるようにする新しい日本の企業です。

（２）ユニクロについて

いつでも，どこでも，誰でも着られる，ファッション性のある高品質なベーシックカジュアルを誰もが手の届く価格で継続的に提供する。

そのためにローコスト経営に徹して，最短，最安で生産と販売を直結させる。

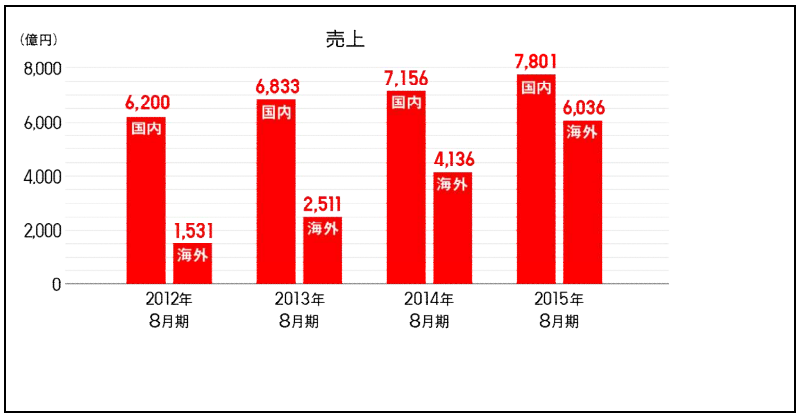
自社に要望される顧客サービスを考えぬき，最高の顧客サービスを実現させる。

世界中の人が喜んで働ける環境を提供し，チームとして革新的な仕事をする。

私たちの目標は世界 No.１のカジュアルアパレルブランドになることです。

（３）事業紹介

世界の「ユニクロ人」が生み出す，無限のビジネスフィールド。ユニクロはグループ全体として「売上高３兆円」を目標に掲げ，ビジネスフィールドを世界中に拡大させています。



（４）仕事

・レジ

お買い物頂いたお客様を最後におもてなしする仕事。お選び頂いた商品を丁寧にたたみ，ショッピングバックに収め，正確・丁寧にお会計を済ませ，また来て頂きたい気持ちをお伝えする，とても大切な仕事です。

・フィッティングルーム応対

お客様にぴったりの商品をご提供する為の試着のお手伝いをする仕事です。サイズの確認だけでなく，コーディネイトや着こなしの提案までお客様に合わせて接客します。

・補正

お買い上げ頂いたパンツのすそ上げをする仕事。パンツの種類に合わせて，すそ上げの方法も異なります。お客様のご希望にぴったりの丈できれいに仕上げる，大切な仕事です。

・商品整理

いつでもお客様が商品を選びやすいよう，きれいに商品をたたみ，整理する仕事です。商品の良さが最大限伝わるよう，たたみ方も工夫します。

・商品陳列

新商品や売れた商品の補充など，お客様がお求めの色・サイズが選びやすいように陳列し

ます。商品がより魅力的にお客様に伝わるよう，陳列の方法も工夫します。

・清掃

いつでもお客様にきれいな売場でお買い物を楽しんで頂く為に，毎日しっかり清掃します。売場はもちろん，商品棚やトイレの清掃もお客様をおもてなしするための最も重要なお仕事です。

・陣頭指揮

お客様が快適にお買い物頂ける状態になっているか，随時確認し，改善する仕事です。他の役割分担されたスタッフへのフォローはもちろん，お客様の動向に合わせて臨機応変な対応を行います。

・レイアウト計画

月間，週間の売場のレイアウトを計画する仕事です。会社の打ち出し商品や新商品の入荷に合わせて，店長と一緒に店舗ごとに商品の魅力を引き出すための売場の計画を立てます。

・在庫計画

月間，週間の店舗の品揃えを計画する仕事です。商品の打ち出しに合わせて，店長と一緒に店舗ごとにお客様のニーズを予測し，売上を最大化する為の在庫発注の計画を立てます。

・シフト作成

月間，週間の店舗スタッフのシフトを計画する仕事です。商品の打ち出しや作業に合わせて，店長と一緒に店舗ごとにお客様に最高のサービスを提供できるよう計画を立てます。

・棚卸し

店舗の実際の在庫点数が帳票と合っているかを確認し，差異を修正する仕事です。1 点 1 点商品を確認し，店舗の財産である商品がきちんと管理されていることを確認する大切な仕事です。

（d）解答用紙のモデル

１．考えたポイント

２．具体的な取り組み

（e）生徒論文の一部

クラス	出席番号	氏名
10 組	39	山﨑 伊麻里

実施日 平成29年2月23日

1．考えたポイント

- インドの文化・習慣を調べる。（どんなものが売れるか、年齢層など）商品の配置
- インドの店舗周辺の地域を調べる
- 国籍がばらばらな社員、アルバイトとコミュニケーションをとる。（どんな人物、人柄なのか）←仕事の分担、シフトを決める。社員、アルバイトの育成 現地の言葉を話す

どんな人にでも来店してもらえるようなお店の雰囲気づくり（きがるで新しみやすい。）

2．具体的な取り組み

インドの文化、習慣を調べる。インドの気候や流行によって取り入れる商品の種類や数、何を売り込むのかなど考える。また、その店舗周辺には、どんなお店があるのか、世帯はどのくらいあるのか、人通りが多いのかなどを事前に調べ、それによっても変わってくると思う。国籍がばらばらな社員とアルバイトで、うまくコミュニケーションがとれるか不安なので、事前に1人1人、どんな人物なのかり歴書のようなものを見て、シフトや、その人にあった仕事をふり分けておく。職場の良い雰囲気づくりにもつながり、それぞれ交流もできるので、店舗のオープンまでに、みんなで集まる機会を設けたい。社員、アルバイト全員が現地の言葉を話せるのかを確認する。不十分な者がいれば仕事の役割を考える。

現地の言葉の勉強をしてもらう。

社員、アルバイト全員で、お店におく商品の配置や、その商品の長所など、お客様に紹介できるようにする。

日本のユニクロの良さを海外でも、そのまま提供できるように、社員の育成に力を入れる。

どんな人にでも来店してもらえるように、気軽で新しみやすい店にするため、働く人がいい雰囲気で働けるようなお店づくりをする。

自分が現地の言葉を勉強し、話せるようにする。

クラス	出席番号	氏名
12 組	22	鈴木 和佳葉

実施日 平成29年2月23日

1．考えたポイント

英語の習得、社員、アルバイトの人がどのような人なのかの確認、インドに人気の服装を確認。

社員、アルバイトの人の教育

地方から世界に

2．具体的な取り組み

1つ目の英語の習得は、国際語であるということとインドの第2言語であるため、社員やアルバイトの人たちとのコミュニケーションを取るため、お店に来た人の接客に必要になるから。

2つ目の社員、アルバイトの人達がどのような人なのかを確認するというのは、その人、個人の性格などをあらかじめ大まかにでも理解していると、その人がどの業務に向いているのかを開店よりも前に決めておくことができるため、仕事がスムーズに進む。

3つめはインドの人達にどのような服装が人気なのかを確認しておくこと。日本の企業といっても国にはそれぞれの国民性があるため、日本で受け入れられていなものがインドに行くと受け入れられない場合があるかもしれないので、インドではどのような服装が人気なのか、インドの人達はどのようなものを求めているのかを確認し、改善すべきものがあれば改善する。

4つめは社員、アルバイトの人たちの教育。

社員でもアルバイトでも「服を売る」という立場なので、服のことを知る必要がある。例えば、フィッティングルーム応対では、顧客にあうサイズを探すことはもちろんだが「この服にはこれがあう」というコーディネイトや着こなしの提案をすることや、相手がどんなものを求めているのかを考えるのも大事な仕事の一つなので、その部分をしっかりと身につけることや、補正などの裁縫技術、日本の企業なので日本の国民性である「細かい」というのを外国人スタッフに教え、商品の整理、陳列、店内清掃でワンでも顧客が気持ちよく買い物ができるようにするための教育をする。

5つめはインドの地方都市から、インドのまわりの国そのまわりの国とどんどん幅を広げて「ユニクロ」を世界的な企業にし、年間売上高を目標の3兆円にするにはどうしたらいいのかを考える。（例えば、インドや東南アジアを中心にSNSを使ってのPRなど。）

（１２）探求応用授業実績

①　「課題解決型学習（ＰＢＬ)」の実施

「課題解決型学習（ＰＢＬ)」は，座学（講義形式教育）と一線を画するもで，少人数グループによる問題発見解決型（事例解決型，事業課題解決型）の学習方法である。グループ討議，活動記録の作成，自己学習，成果報告までを含む統合的・創造的な学習に主眼を置いている実践形式の学習方法で行なった。授業は，生徒が学習の主体であり，教員は学習を支援する立場とした。

近年の高度化するグローバル社会に対応する教育の高度化のためには，今までのような一般教養・専門分野の系統的学習も大切であるが，一方で社会的にも問題解決が必要となっており，そのようにリアルな問題に対峙し，その解決過程に参画することで実践的思考を鍛える意義は，ますます高くなっていると言えます。

身近な問題や事例を素材としながら，具体的な問題解決に向けてチーム学習を行っていく学習メソッドで，その求められるテーマに対して，知識，汎用的スキル，態度を統合的に展開していくことに主眼を置く学習メソッドでもある。

「課題解決型学習」の考えは，仮に本や講義で学んだ知識を持っていても，いざ問題を解決しようとしても，自分の知識・情報を問題解決に向けてすぐに統合・応用することは難しく，その有している知識や，不足している知識を補いながら，現実的な問題解決過程に参加し応用していくための，一定の実践的なトレーニングが必要と考えている。

「課題解決型学習」に期待されているのは，問題解決に向けた知識を統合的に展開していくことをはじめ，チーム内の相互作用の中で，相対的に学習していくことで他者から学ぶ思考を身につけ，学習プロセスへ主体的・能動的に関わろうとする態度を涵養することにあると考えている。

□ グループ課題の進め方

・探求応用は，グループワークが主体のため，研究として次の条件を課し進めた。

・身近な問題や事例を素材としながら，具体的な問題解決に向けてチーム学習を行っていく学習メソッドで，その求められるテーマに対して，知識，汎用的スキル，態度を統合的に展開していくことに主眼を置く学習メソッドとして実施した。

・本校の考えは，仮に本や講義で学んだ知識を持っていても，いざ問題を解決しようとしても，自分の知識・情報を問題解決に向けてすぐに統合・応用することは難しく，その有している知識や，不足している知識を補いながら，現実的な問題解決過程に参加し応用していくための，一定の実践的なトレーニングとして実施した。

・学習に期待されているのは，問題解決に向けた知識を統合的に展開していくことをはじめ，チーム内の相互作用の中で，相対的に学習していくことで他者から学ぶ思考を身につけ，学習プロセスへ主体的・能動的に関わろうとする態度であること考えさせた。

③グループワークの構成】

グループの構成は，次の条件で構成した。

◆ グループ構成

・１グループ６名で構成し，１１グループを編成

◆ グループ構成

・学力レベル別構成

・男女比　考慮せず

・リーダー制など考慮せず

◆ 議題

「２０３０年を予測して，北海道ならではの新しい商品・サービス・ビジネスを提案せよ！」

④グループ別に策定したミッションテーマと結果

チーム	ミッションテーマ	学力レベル	結果
Ｊチーム	農業社会の企業化	下位生	
Ｄチーム	株式運営による第一次産業の活性化計画案	中位生	
Ｃチーム	将来必ず必要とされる北海道	下位生	
Ｂチーム	セカンド・SAPPORO・プロジェクト	中位生	
Ｈチーム	「先鋭福祉区」を財政破綻した夕張市に建設	中位生	優秀賞
Ｆチーム	宇宙開発プログラム	中位生	
Ｇチーム	北海道にテーマパークを…	中位生	優秀賞
Ａチーム	地域と連携する新しい食堂	下位生	
Ｅチーム	２０３０年の北海道のビジネス～雪力発電～	下位生	
Ｉチーム	２０３０年の北海道のサービス業について	上位生	優秀賞
Ｋチーム	北海道観光鉄道計画	上位生	最優秀賞

⑤評価

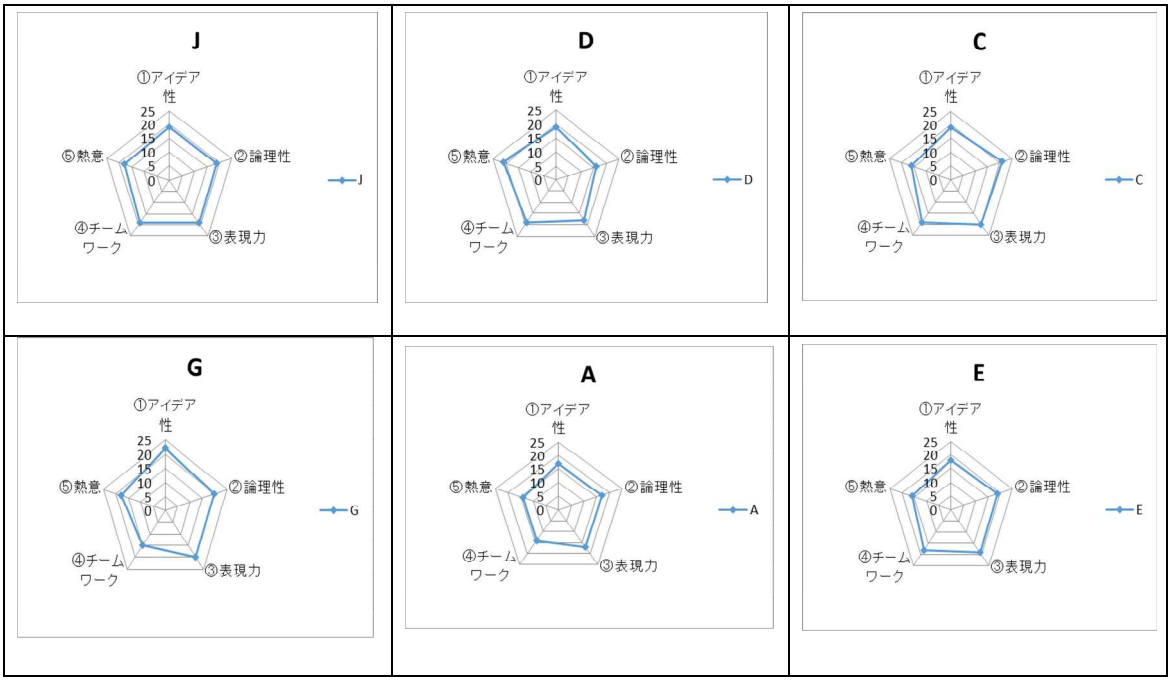
（基準・評価のポイント）

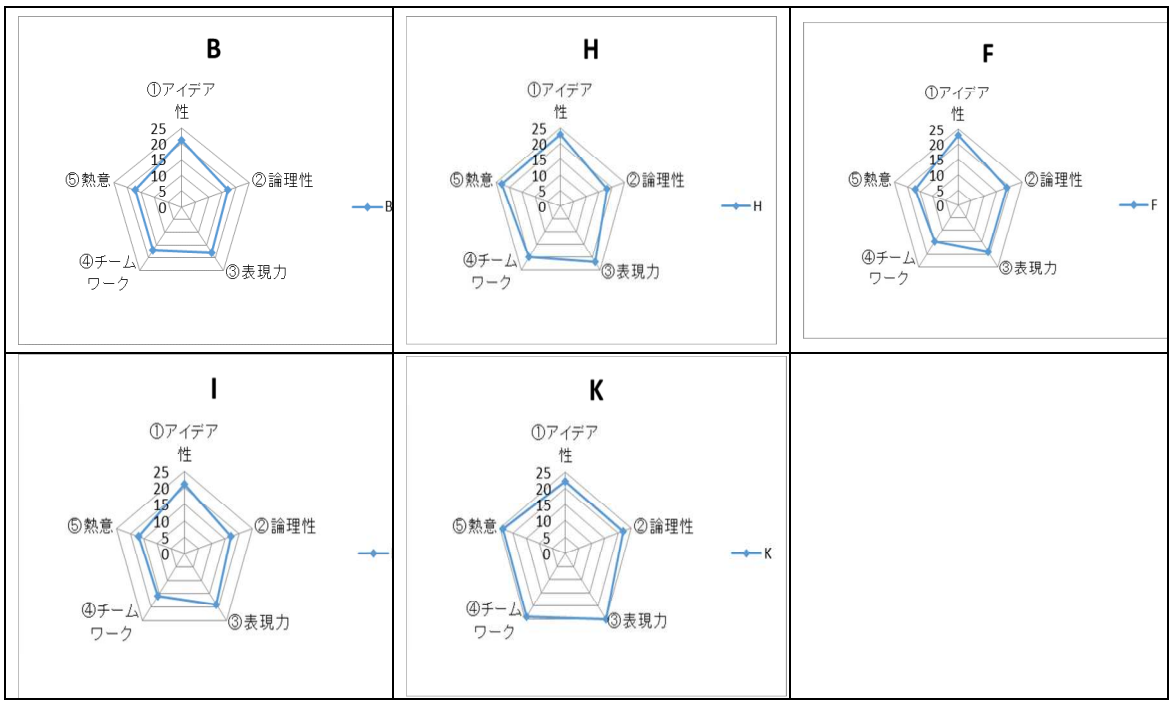
・アイディア
・論理性（フレームワーク）
・表現力（プレゼンテーション・資料）
・チームワーク（役割分担，プロセス）
・熱意（メンバー全員）

の項目について評価した。

（グループ別評価）

・担当教員，指導者６名による評価を実施した。グループ別評価は次の通り。





（総評）

全体的な講評としては，非常に良かったという評価を頂いた。「理想」と「現実」のギャップを埋める問題解決についてよく検証できていたとのこと。事前に学んだフレームワークをきちんと使って展開出来ていたという点で，これまでの成果が出た。また，プレゼンテーションテーション自体も「素晴らしい」という評価をもらったチームが多かった。スライドについてもよくポイントがまとまっており，随所に工夫が見られた

社会人のビジネススキルという印象の強いプログラムであったが，問題解決を一つ一つ行なっていくことの大切さが実感出来たようであった。ＪＴＢの担当の方からは，「今回の取り組みでは企画自体を提案したが，実際にはこの後の実現に向けての取り組みを行なっていくのが一番難しい」との指摘を受けた。生徒一人一人の取り組み量は決して同じではないが，これまでにない姿，発表力や企画力を発揮してくれた生徒も多く，互いに刺激を受け合う様子をみることが出来た。

以下，優秀な評価を得た，４グループのプレゼンテーションテーション資料，と生徒の発表要旨を掲載。

⑦研究時間の構成・実績

講義	時間	指導者	指導・活動内容
１講	１００分	ＪＴＢ社 社員 （小林）	・ＰＢＬ学習の狙い，手法について説明 ・“現代の生徒たちが社会に出て確実に必要となる能力である３つの要素である，「チームワーク」「問題解決力」「コミュニケーション」を，TPC プログラムを通して身に付ける” ・今回を含め，全１０回のプログラムの中で，チームワークのメソッドを用いて，企画書を作成し，中間チェックを経て，最終発表会を行う。
２講	１００分	ＪＴＢ社 社員 （小林）	１．アイスブレイク “「タイヤのない車」を１ケ月で１０００台売らないといけない。さて，その車をどうやって売りますか？”

			上記の題で，各チーム３分間でディスカッションし，アイデアを出し合う。 一番多いチームで２１個アイデアが出てきた。一般的な大学生よりも多く，多様なアイデアが出たと評価された。この取り組みを通して，多様なアイデアを出し合うために，メンバーの意見を「非現実的だから」と言って否定しないことが大切だと認識した様子。 ２．ＪＴＢとはどのような会社か～ツーリズム産業の仕事について～ 旅行会社は旅のすべてに関わる仕事である。旅の手配のみならず，食やレジャー，保険など，多様な仕事がある。 ３．ＪＴＢの実績について どうやって利益を上げているか。旅行業は「薄利多売」と言われるように，それぞれは３～５％の利益にすぎない。部門別売上高を見ると，９０％が旅行部門の利益となっている。しかし，今後，生き残りをかけて，「その他の事業部門」（保険，お土産，両替，旅館への予約システムなど）にあたる１０％を増やすことをやっていかなければならない。 ４．ＪＴＢ小林等さんの自己紹介 株式会社ＪＴＢキャリア教育事業部で働く傍ら，フットサルクラブで少年の指導をしながら運営，マネジメントをする。２０１５年の秋からは多摩大学大学院経営情報学研究科に入学。現在，「ＪＴＢでの教育事業」「フットサル」「地域活性（二宮市)」という三本柱で活動している。 ５．フレームワーク① 共通ミッション 「２０３０年を予測して，北海道ならではの新しい商品・サービス・ビジネスを提案せよ」 各チーム，このテーマについて話し合ってきた。設定した小テーマにおける「理想」と「現実」のギャップを話し合う。 ６．チーム発表 Ｇチーム「問題は北海道の観光客が少ないこと，理想はテーマパークを増やして観光を上向きにしていくこと。そのための課題は，地域活性化である」 →アドバイス「具体的な数字，データを使って紹介するとよい。」 ７．フレームワーク②「５Ｗ２Ｈを使ってみよう」 ・Ｗｈｏ（誰が） ・Ｗｈａｔ（何を） ・Ｗｈｅｎ（いつ） ・Ｗｈｅｒｅ（どこで） ・Ｗｈｙ（なぜ・どんな目的で） ・Ｈｏｗ（どうやって） ・Ｈｏｗ　ｍｕｃｈ（いくらで）

			会社の企画の作り方として，上記の５Ｗ２Ｈを使うことが求められる。 また，携帯無料アプリで有名な「ライン」の会社を例にとって，「ＢＭＣ（ビジネスモデルキャンパス)」を見ながら，そのフレームを理解する。 ８．プレゼンテーションのポイント Iphone（アイフォン）を開発したスティーブ・ジョブズのプレゼンテーションテーションを見ながら，どの点が上手なのかを見てみる。各チーム３分間のディスカッション。 〔７つのポイント〕 （１）　短い文章（ポイントのみ） （２）　視覚（写真を活用）に訴える （３）　落ち着き （４）　価値を伝える （５）　効果 （６）　サプライズ（驚き，ユーモア） （７）　熱意 スティーブ･ジョブズはプレゼンテーションを苦手としていたようだが，何度もリハーサルをして，効果的なプレゼンテーションの能力を身に付けたといわれる。この動画では，アイフォンの発表だが，その製品の中身の説明ではなく，「それを持つことで，どんな効果があるか」を非常にわかりやすく，聴衆が惹きつけられていることがわかる。 ９．プレゼンテーション資料を作り方～５つの箱～ テキスト（１９ページ）にあるように，解決案だけでなく，地域への効果まで落とし込んでいく。
３講	１００分	サイボウズ社社員（田村）	●サイボウズ社田村さんより，本日の流れについての説明 ①「グループ」と「チームの」違いについて ②「チームワークを発揮するために必要なこと」 ③ 問題を「現実」と「理想」,「事実」と「解釈」に分解して考える。 →原因，課題の追求。 ●グループワーク「チームの○○さんのテストの点数を良くするにはどうしたら良いかを具体的に考える」 ①ワークシートを使い，「事実」と「解釈」に分けることで問題を整理する。 ②チームのメンバーが様々な意見を出し合いテストの結果を出すための方法を考える。 ●発表（３チーム） 各チームで見出した解決策を発表し合う。
４講	１００分	企業家講演①	巻沙織氏…（WIND‘OL 代表）による講演 北海道で起業を起こした方をお呼びした，事業家講演。特に，顧客が外国人であるベビーシッター事業の代表取締役。 出版社で働いた経験からビジネスの基本を学ぶ。ニセコに

			来る人たちの中で「お金」だけを考えて来る人がいるが，自分は「仕事」として考え「損して得とれ」がビジネスにおいて大切だと思っている。自分の思いを仕事に乗せ，お金につなげていくことを目指している。 設立した会社 WIND‘OL についての紹介とニセコの変貌などを取り入れた話から，今後の北海道，ニセコにおけるビジネスの展望を説明。 ニセコを訪れる外国人向けのビジネスを立ち上げた経験から，「外国人相手に完璧な英語を使わない方がよい」ことや「質のいいサービスを提供すれば外国の富裕層のニーズが得られ，次の仕事につながる」こと等，実体験に即した話が聞けた。大テーマ「２０３０年を予測して北海道ならではの新しい商品，サービスビジネスを提案する」に絡む，北海道，ニセコの課題点についても，有益な情報を頂いた。具体的には「２０２６年，もし，冬季オリンピックが決まったとしたら」という切り口でニセコの展望など。 〈質疑応答〉 ・女性ばかりの職場なのか。（永井） ・遭遇した仕事上のトラブルとは。（木村） ・異文化に対する捉え方とは（佐々木）
５講	１００分	企業家講演②	・黒井理恵氏…名寄市在住。 「naniro カフェ」開催 まちづくり，ワークショップ，地域活性 社会系プロジェクトスタートアップ支援の活動を行っている。地域の子育て中の母親の会や，「パン祭り」など，地域で何かを立ち上げようとする人たちの手助けをする。 黒井氏の仕事内容を言葉で表現すると，「人や組織，チームが自分たちで考えて動きやすくする仕事」，または「人と人とがざっくばらんに話をしながら仕事をする場を作る。」 生徒にとっては，「薬剤師」「看護師」など具体的な職業以外の仕事が存在すること，これからの時代，「今までは無かった仕事」がどんどん出てくるであろうことが新鮮だった様子である。 『社会や誰かのために何かしたい』という人や，自分のやりたいことにチャレンジできる人を増やしたいという思いから「naniro カフェ」を立ち上げ，「人と人とのつながりが寿命につながる」「幸福とは何か」についても考察。 今後に向けてのアドバイス ・何か物事を起こす折に批判してくる人は必ずいる。しかし，ビジョンをしっかり持って，ひるまないこと。 ・一人でやらない，色々な人を巻き込むこと。 ・もっともらしい答えに飛びつかず，自分の頭で考えたことを信じて突き進むべし。 ・失敗は当たり前と思ってやる。 〈質疑応答〉

			・何かイベントを起こすときに賛同者がいない時，人が集まらない時はどうするか。（江端） →皆で始める。よく話し合って意見を出し合ってスタートするので，賛同者がいないということはあまりない。人が集まらない時は，中止することも。反省点をしっかり挙げる。
６講	１００分	グループワーク	１．前回までの活動の振り返り ２．チームリーダー決め ３．チーム毎のテーマを何にするか話し合う。 大テーマ「２０３０年を予測して，北海道ならではの新しい商品，サービス，ビジネスを提案する」をもとに，小テーマとなる企画をいくつか話し合いの中で出し合う。リーダーが話し合いを取りまとめ，報告できるような形で進める。 ４．情報収集，グループ討議
７講	１００分	グループワーク	
８講	１００分	グループワーク	
９講	１００分	グループワーク	●中間発表（各チーム２５分） 各チームに，発表会のスライドとデータをあらかじめ準備させ，最終発表会に向けてＪＴＢ社の小林さん，サイボウズ社の田村さん，椋田さんに個別にアドバイスを受けた上で，企画を練った。どのチームも準備は行っていたが，完成度にはばらつきがある。具体的な企画まで詰めてきたチームもあれば，おおまかな概要で留まっているチームもあった。ただ，各チームのリーダーを中心に，考えてきたところまでの企画を紹介し，アドバイスを受ける過程で，テーマを深めたり，実際の数値を使用することの重要性に気づいたりなど，それぞれの学びが見受けられた。
１０講	１００分	発表・評価	１．発表 ①Ｊチーム〈農業社会の企業化〉 北海道の農業の問題点を挙げ，JAH と手を組むという解決策を提案。 ・インタビューを取り入れた。 ・具体的な野菜を示している点が良い。 ・ハイスペックな農業を目指して，というコンセプトを伝えた。 ②Ｄチーム〈株式運営による第一次産業の活性化計画案〉 「DIVINE」という株式会社を設立し，農業の革新を目指す。北海道ブランドの活性化をはかる。 ・発表者の明るさ，勢いが群を抜いている。 ・アニメーションを使い，図でわかりやすいスライドを作った。 ・SNS を利用する方法を提案。 ③Ｃチーム〈将来必ず必要とされる北海道〉 北海道における観光の現状や少子高齢化などを取り上げ，北海道の価値を高めたい。季節による変動を減らし，道内における観光格差を埋めるための方策を提案。 ・スライドの文字ポイントをもっと大きくすべき。

			・チームで考えた未来の観光都市図が面白い。 ④Ｂチーム〈セカンド・SAPPORO・プロジェクト〉 北海道外へ人口が減少していく現状を改善する提案。北海道（釧路）に新たな球団を作ることで活性化を図る。 ・具体的な球団を想定して,設立のメリットを挙げていた。 ・アイデアとして面白く，親会社や地元住民の立場に言及していた。 ・釧路を札幌並みの都市に成長させるのが狙い。 ⑤Ｈチーム〈「先鋭福祉区」の建設〉 高齢者の孤独死に着目し,福祉に特化した取り組みを提案。高齢者の貧困や孤独を助ける取り組みを提案。 ・原稿の内容が非常に整理されており，説得力がある。 ・図式化したスライドがわかりやすい。 ・財政難に苦しむ夕張を「先鋭福祉区」とし，余生を送る地域としながら,若人も呼び込む取り組みを行うという視点が面白い。 ・最後のまとめが秀逸（グローバルな視点だけでなく，ローカルな視点の重要性を指摘） ⑥Ｆチーム〈宇宙開発プログラム〉 ２０３０年の世界情勢を想定し,人々の生活が厳しくなっていることを指摘し，地球を脱出する宇宙ビジネスを提案。北海道にその宇宙開発の拠点を作るという宇宙産業を企画。 ・北海道の広大な土地，食糧を活かす視点。 ・「宇宙エレベーター計画」の夢のあるアイデアを紹介している点。 ・プレゼンテーションテーションとしてのわくわく感はあった。 ⑦Ｇチーム〈北海道にテーマパークを…〉 地域による観光客数の偏りを改善する提案。特に道東の環境客数を２５６８万人から６０００万人に増やすために観光スポットとしてテーマパーク「SGH」を建設する提案。 ・TDL や USJ に負けない「自然世界と近未来の調和」をコンセプトにしたテーマパーク「SGH(満足を保障する北海道)」を建設。 ・ネーミングで成功した感が強いが，具体性もあり，良かった。 ⑧Ａチーム〈地域と連携する新しい食堂〉 独身の高齢者人口の増加という現状を踏まえ，２０３０年の経済効果を見込んだ提案。「地域と連携した新しい食堂」の魅力を伝える。 ・長居できる雰囲気を作り，付加価値をつける。回転率の悪さは学生のボランティアを募り，人件費の削減で補う。 ・世代間の交流など，効果のアピール点が多かった。 ⑨Ｅチーム〈２０３０年の北海道のビジネス～雪力発電～〉

			冬期，北海道の苦労の元となっている雪を電力として利用する提案。 ・雪冷房，富山大学理学部での研究方法の紹介。 ・太陽光発電と併用することで，問題点をクリアできる。 ・除雪ポイントカード，発電場所など，アイデアが豊富。 ⑩Ｉチーム〈２０３０年の北海道のサービス業について〉 北海道の観光地域の限定を指摘し，結婚式ツアー地域として活性化する「ウェディングブランド」を目指す。結婚を機に北海道リピーターを増やすことも狙い。 ・斬新なアイデアだと思うが，未婚率の低下をどうクリアするかが不明確。 ・和風の結婚式に憧れる海外の顧客も取り込みたい。 ⑪Ｋチーム〈北海道観光鉄道計画〉 北海道観光における問題点（広大すぎる土地，タイムロス，移動の難しさ等）を踏まえ，バスではなく，「北海道鉄道」を提案。 ・観光列車の利点を生かした旅のコーディネートを紹介。 ・北海道 Zootopia（ズートピア）計画を利用する ・列車を「動くホテル」と位置付ける。移動のみならず，北海道ならではのイベント，食を楽しめるようにしたい。 ・旅行プラン，乗車券の資料に力が入っている。 ・発表技術が高い。

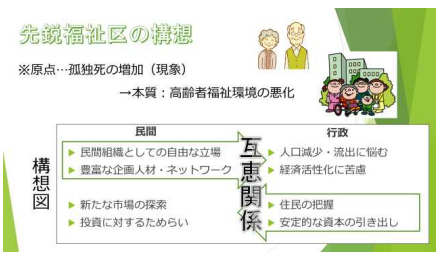
（探求応用　授業風景）

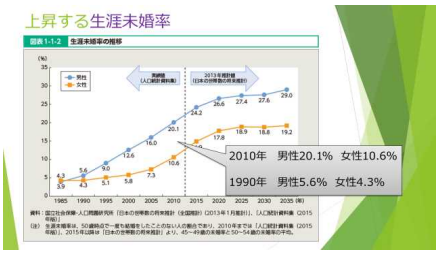
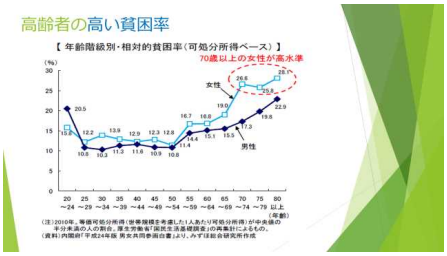
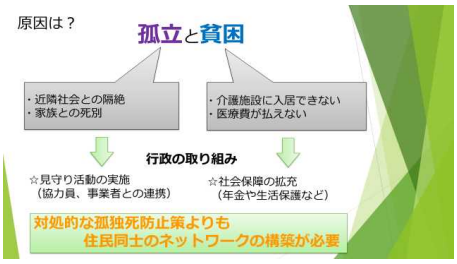
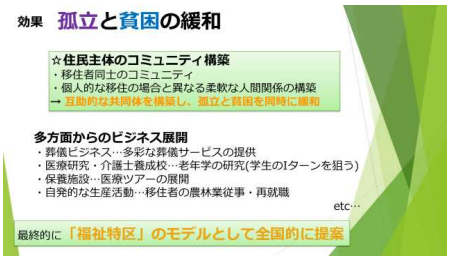
<table>
<tr>
<td>
会社の企画の作り方として，上記の５Ｗ２Ｈを使うことが求められる。また，携帯無料アプリで有名な「ライン」の会社を例にとって，「ＢＭＣ（ビジネスモデルキャンパス）」を見ながら，そのフレームを理解する。</td>
<td>
「２０３０年を予測して，北海道ならではの新しい商品・サービス・ビジネスを提案せよ！」講師のＪＴＢ社員小林さんを囲んで，最終プレゼンテーションの討議を行なっている様子。</td>
</tr>
<tr>
<td> </td>
<td>
</td>
</tr>
</table>

北海道大学観光高等研究センター特任教授石黒侑介先生による，マーケティングについて。グループワークの形式で意見を交わしやすい内容だったためか，生徒は活発に参加していた。「マーケティング」という切り口で北海道観光を考える良い機会になったと思われる。	台湾から西螺高級農工職業学校の生徒来校。本校生徒がホストとなり，北海道観光や日本文化を説明。英語での発表の合間に，先方の方の通訳が度々入り，フォローしていただいた場面もあった。生徒による発表の意味が薄れたが，やむを得ないと思われる。
 優秀作品は，ＪＴＢ社員，起業家，夕張市職員などの観光開発プロジェクトにて発表を行なった。ＪＴＢの旅行開発部門の長，企画部長などから，大人の意見をいただいた。	 優秀作品「夕張市をテーマ」とした福祉特区の開発について発表。起業家の社長より，利益管理について指摘を受ける。アイデアだけにとどまらず考えるよう指導を受ける。夕張市からは，発表のデータを持ち帰る旨要求があった。高校生の提案に興味を持たれた様子であった。

⑧生徒成果物（プレゼンテーション資料）４グループ抜粋

●優秀賞　「先鋭福祉区」を財政破綻した夕張市に建設

パワーポイント資料	生徒の発表要旨
	【仮説】 メリット→北海道・・・自然環境，食糧供給 デメリット→人口減少，難題に直面 【プラン】 ・北海道の強みを生かす「先鋭福祉区」の建設　→　自然と共生・質の高い福祉 ・候補地は夕張→地域活性化へのモデル
	○提案の背景について 統計データ・・・孤独死の増加（←福祉環境の悪化） ⇒新しい福祉を実現するモデル区域を夕張に 理想・・・行政と民間の互恵関係にもとづく高齢者移住の誘致 財政悪化・人口減少からの再建 ⇒最終的に全国的にモデルとして提示する計画

	○ベースにした統計データ ・生涯未婚率 ２０１０年　男性２０．１％　１０．６％ １９９０年　男性５．６％　女性４．３％ ⇒今後も独身の高齢者が増える（死別なども考えると・・・）
	○性別・年齢別の貧困率 年齢が高くなるほど貧困率が高い ・低所得，社会保障の不備や親族からの支援の不足→経済状況が苦しく
	高齢者・・・孤立と貧困の２つのリスク →孤独死の増加が予想される ※孤独死・・・一般的に一人暮らしの人が助かる可能性があったのに亡くなってしばらく経ってから発見されること ・一説には年間３万人 ・２０３０年までに人口の３分の１が高齢者→より多くが孤独死の危険にさらされる
	孤立と貧困の２つ 貧困でも親族と関わりあれば大丈夫。孤立していても経済力があれば大丈夫 →２つそろって孤独死 孤立→行政から見守り活動（福祉スタッフを組織） 事業者と連携（新聞・電気・ガス）→異変があったら行政へ ※異変を察知するのが限界　貧困→社会保障の拡充 ※社会保障の増大が問題　住民同士によるネットワークの構築による共同体
	○先鋭福祉区の提案 ・全国から高齢者を誘致して高いレベルの福祉 ※広範囲に分散するのでなく一つの区域に生活してもらう ⇒サービス業進出，価格競争→福祉が容易に ・北海道の物価も安い ⇔石勝線の話は不安材料 ・札幌圏とのアクセス，保養地としての可能性 →財政再建を進められる
	○孤立と貧困の緩和 ☆移住者同士のコミュニティ ・単身では苦労（よそ者扱い） ⇔移住者が多ければおこりにくい ・夕張の人への配慮も必要だ ⇔北海道の長所・・・因習に縛られない イメージ・・・各地から集まる大学寮 ・世代が同じ→共通の話題

	→シェアハウス・ルームシェアでリスク軽減できるかも ○高齢者相手のビジネス 葬儀ビジネス，医療研究，介護士養成学校，移住者の再就職 ⇒自治体の活性化に
	○今後の課題 ・移住のデメリット （夕張）冬の暖房，雪，移動手段など ・初期の支援 不確定 ・人口のバランス どれだけの若者が呼び込めるのかも重要 ⇒課題が多いがモデルという意味で可能性はある！
	○活動で学んだこと・感じたこと ・うちはスーパーグローバルハイスクール →国際交流などまさに「グローバル」 ⇔今回は身近な問題→ローカルな視点も重要 ・こういう問題はグローバル化の陰に隠れてしまうことが多い ・Think globally, act locally →グローバル化が叫ばれているからこそローカルな問題に目を向けなければいけない

【課題意識】

高齢者の孤独死に着目し，福祉に特化した取り組みを提案。高齢者の貧困や孤独を助ける取り組みを提案。

【評価】

・原稿の内容が非常に整理されており，説得力がある。

・図式化したスライドがわかりやすい。

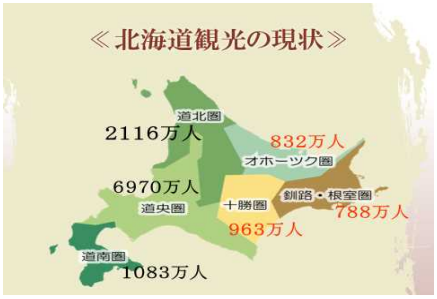
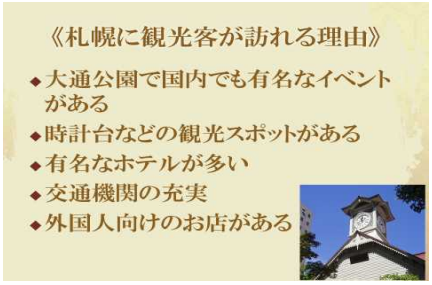
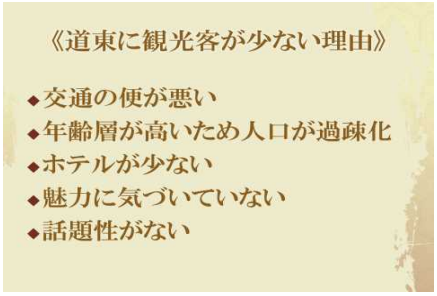
・財政難に苦しむ夕張を「先鋭福祉区」とし，余生を送る地域としながら，若人も呼び込む取り組みを行うという視点が面白い。

・最後のまとめが秀逸（グローバルな視点だけでなく，ローカルな視点の重要性を指摘）

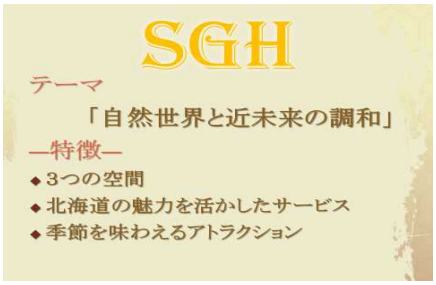
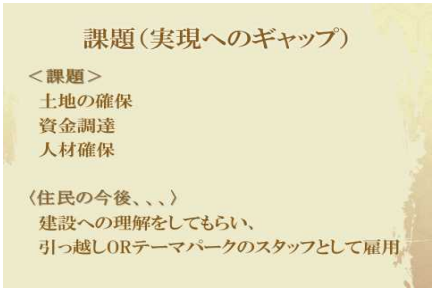
（プレゼンテーションテーション風景）

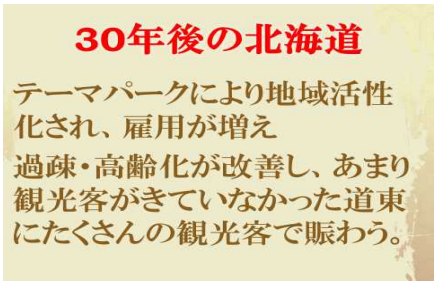
・ＪＴＢ北海道本部開発部長，夕張市市役所チーフ，北海道業経営の代表計６名の審査員を前にして，グループ研究のプンテーションテーションを実施。

●優秀賞　北海道にテーマパークを…

パワーポイント資料	生徒の発表要旨
 札幌日本大学高等学校	●現状分析 ＊道東の観光客数が少ない ＊観光の可能性が眠っている ＊（例）　広大な土地・食産業・珍しい動物 ＊魅力を全面に打ち出した道東及び北海道の観光拠点となるリゾート施設 ＊IR 推進法（カジノ法案）が可決 ＊これにより現実味 UP
	●課題 ・地域の観光客数の偏り ・ニセコ・富良野　膨大な自然活かしきれていない ・過疎化進む・さびれる町　差が大きい ・３つの地域を合わせても道央６９７０万人の半分に満たない 課題のまとめ　道東に少なく，札幌に多い　その理由を課題とする。
	●現状の観光客　札幌の魅力 ・大通公園で国内でも有名なイベントがある ・時計台などの観光スポットがある ・有名なホテルが多い ・交通機関の充実 ・外国人向けのお店がある
	●道東の課題 《知床》 ・魅力がないだけじゃなくて知られていないだけ ・２００５年世界遺産指定 ・３年間しか観光客数が伸びなかった ・メジャーな観光地だったから ・ある一定の場所しか入れない ・何度も訪れたいと思うようなスポットがあまりない
	●仮説（提案の主旨） ２０３０年までに　道内・道外・海外から観光客を集めリピーターになってもらう 道東繁栄が北海道全体の活性化になる ●どのようにすればいいか 子供に人気動物園・水族館・遊園地？ 何度も訪れたくなるもの→リピートが重要

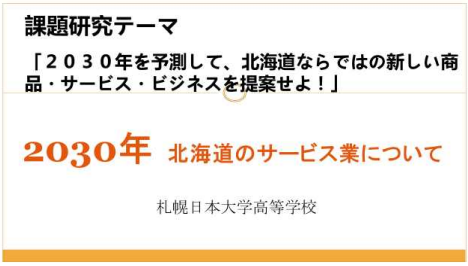
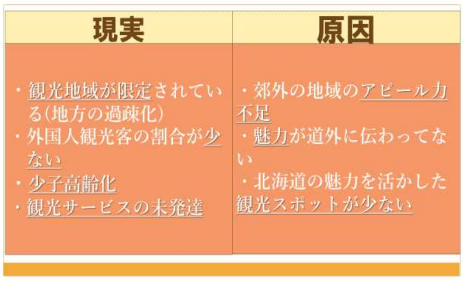
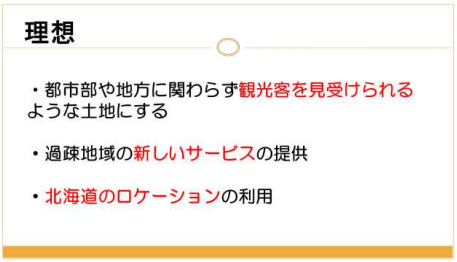
	●リピート→ディズニーランドの魅力→北海道版の策定 その全てを一度に楽しめるテーマパーク
	●ネーミング効果をめざす ＳＧＨと生徒の考えたコンセプトをかけたネーミング。
	●必ず満足してもらおうという願いを込めたもの
	●他企業分析（キーワード） ・日本で有名なテーマパークといえば，TDL と USJ ・年々増えている ・ミッキーミニーなどのキャラクター ・キャスト・ゲスト　おもてなし ・どの年代でも楽しめるアトラクション
	映画世界の気分 ハロウィン・クリスマス
	両方に負けを取らない SGH プランの策定

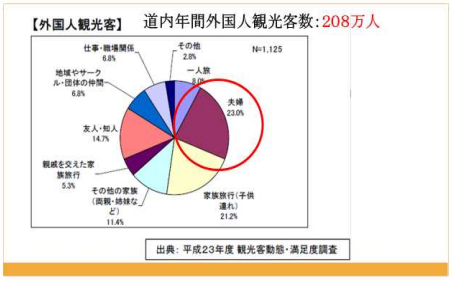
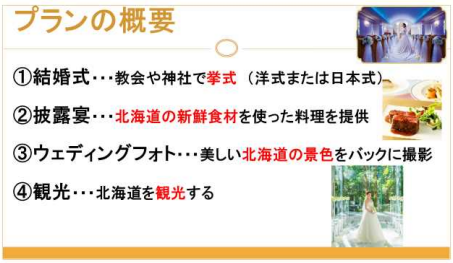
	●キーワード 北海道ならではの自然を生かし，近未来体験ができるテーマパーク。 今までにない３つの空間（水中・陸上・空中）
	●水中アトラクション。北海道の自然気候を利用したコンセプト。
	自分でカスタマイズ　人類の夢 有名お菓子会社　六花亭・石屋と協力 ふゆ　雪だるま AI 会話＆一緒に遊ぶ
	●SGH 単体だけでなく，周りにも経済効果をもたらす ・食 ・買 ・体験 ・宿 地域活性化に繋がる
	●避けることのできない課題 住民の理解 スタッフとして雇用して雇用の増加につなげる
	●見込み SGH の建設によって 道内・道外・海外から観光客を呼び込む

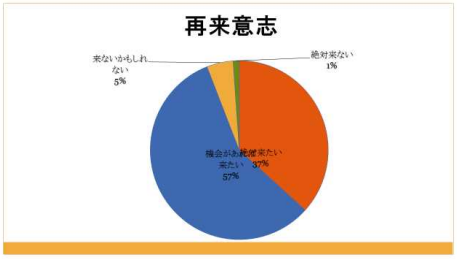
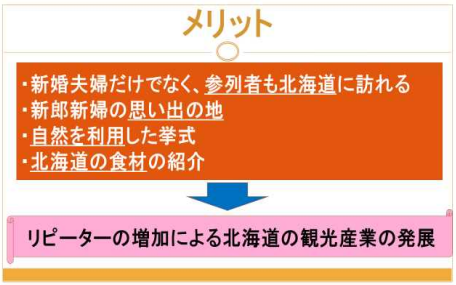
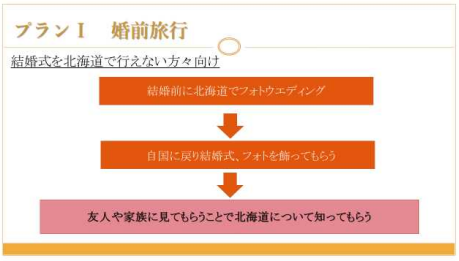
<table>
<tr><td>
</td><td>●施策
直行便　交通の便をよくする
プレオープン　旅行費無料
対象者に口コミを流してもらう</td></tr>
<tr><td>
</td><td>●広報
本州の人々から海外の人々に口コミ</td></tr>
<tr><td>
</td><td>●広報
本州の人々から海外の人々に口コミ</td></tr>
<tr><td> 
</td><td>●計画
２０６０年の未来が待ち構えているはず</td></tr>
<tr><td colspan="2">【課題意識】
・地域による観光客数の偏りを改善する提案。特に道東の環境客数を２５６８万人から６０００万人に増やすために観光スポットとしてテーマパーク「ＳＧＨ」を建設する提案。
・ＴＤＬやＵＳＪに負けない「自然世界と近未来の調和」をコンセプトにしたテーマパーク「ＳＧＨ（満足を保障する北海道）」を建設。
【評価】
・ネーミングで成功した感が強いが，具体性もあり，良かった。

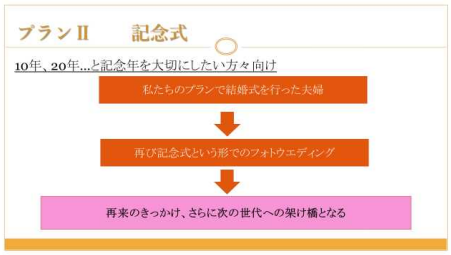
・ＪＴＢ北海道本部開発部長，夕張市市役所チーフ，北海道で企業経営の代表計６名の審査員を前にして，グループ研究のプレゼンテーションテーションを実施。</td></tr>
</table>

●優秀賞　北海道のサービス業について

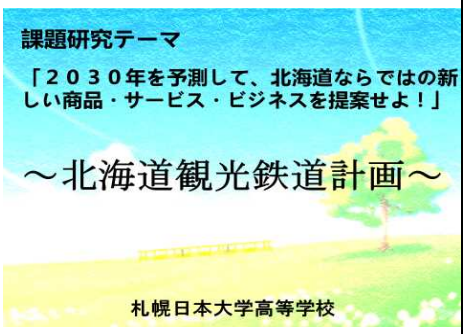
パワーポイント資料	生徒の発表要旨
	私たちは２０３０年の北海道のサービス業について取り上げることにしました。 １現実と理想について， ２原因， ３解決策， ４目標の流れでプレゼンテーションテーションを進めたいと思います。
	・現実 現在の北海道の観光における現実の問題を提議 観光産業に望む理想の観光地象に必要な要素
	・理想とするビジネスモデルを提案
	・新しい観光サービスとして提案 北海道各地のスポットで行うウェディングツアー
	・具体的手段の提示 ウェディングブランドの確立を仮説とする

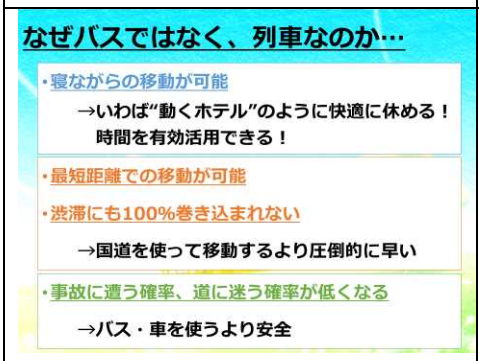
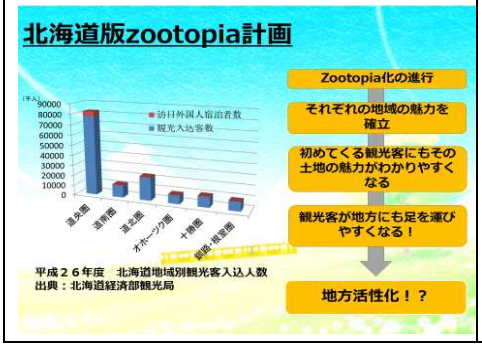
	・現状分析 一日あたり全国で１００人中１人あたりが北海道での結婚式を行っている
	・提案根拠を示す資料分析を説明 そのうち２３％が夫婦
	・北海道らしさをアピール その周りの人にも伝える ＳＮＳなどであげる写真が有効
	・プランの大まかな内容 北海道の自然を背景に写真撮影 翌日は親族と一緒に北海道内を観光 結婚式は和式か洋式を選択 披露宴では道産の食材を使用し，食のアピール 自然をバックにウェディングフォト
	・自然の美しさを PR 星 美しい景色
	・自然の美しさを PR 次に滝上町にある芝桜滝上公園では，地面一面に広がる芝桜を背景とともに写真を撮ることができます。

	・自然の美しさを PR ライトブルーのカーテン
	・自然の美しさを PR 他にも多くの知られていない絶景が北海道には多くあります。
	・プランの提示 このプランのメリットを説明します。まずこちらのグラフをご覧ください。 このグラフは１度北海道にきた外国人観光客に調査したもので，もう一度北海道に訪れたいかを問ものです。このグラフから分かるように，５３％の人が機会があればもう一度北海道に訪れたいと答えています。
	・メリット 結婚は人生でもかなり大きな行事の一つで，そのお祝いを北海道で行うことで，北海道が思い出の地になるので，もう一度北海道に来る機会を提供できるのではないかと考えます。 またほかのメリットとして，新郎新婦だけでなく参列者も北海道に訪れる事や，北海道の自然や食の面でのアピールもできることです。 そして，北海道旅行の情報源が，インターネットという外国人観光客が多いことからも，新郎新婦や参列者の方の SNS での写真を友人だけに限らず，不特定多数の人たちに見てもらうことによって，北海道の魅力を知り，北海道に観光に行こうとなったりして結果的に観光客の増加が得られると思います
	・婚前旅行

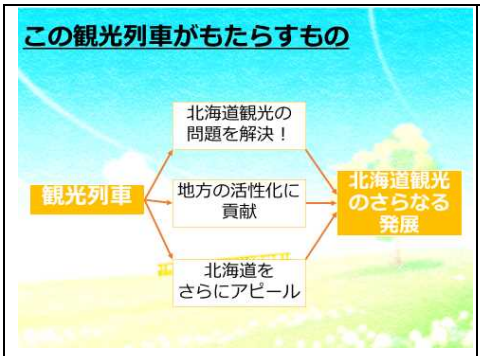
	・記念式
	以上，私たちが考える，「２０３０年の北海道のサービス業」です。これで発表を終わります，ご清聴ありがとうございました。
【課題意識】 北海道の観光地域の限定を指摘し，結婚式ツアー地域として活性化する「ウェディングブランド」を目指す。結婚を機に北海道リピーターを増やすことも狙い。 【評価】 ・斬新なアイデアだと思うが，未婚率の低下をどうクリアするかが不明確。 ・和風の結婚式に憧れる海外の顧客も取り込みたい。	

●最優秀賞　北海道観光鉄道計画

パワーポイント資料	生徒の発表要旨
	
	・現状分析 客観的数値で示す 北海道の観光客数：１億３３４３万人（上昇傾向） →Ｈ２７都道府県別入込客数２位
	・現状の北海道観光の課題を示す

	・観光の問題を分析 問題として出てきた言葉 「移動手段，行けることが限られる，発達しきっていない，バス車，レンタカー，国際免許，観光バス，地域限定，つらい，旅行計画，瞬間移動，初，距離感，渋滞，時間がかかる，賑わう裏，十分に楽しめない，悲しい」
	・私達が考えた新ビジネス“北海道観光列車” 「ただ観光客を乗せるなら，バスでも列車でも変わらないじゃないかぁ？」 <なぜ観光バスではなく，鉄道を使うのか> ①寝ながらの移動が可能になること ＊観光バスでも寝る～可能だけど窮屈！ex)気を遣う,いびき→がっかり ＊北海道観光列車～快適に休める　いわば動くホテル 移動時間＝睡眠　時間を有効的に使える ②最短距離＆渋滞に巻き込まれない ＊バス・車よりも圧倒的に早い ③安全 ＊交通事故に遭う確率は低く
	・＜この観光列車を使った場合どのような観光ができるのか大まかな概容＞　プラン もともと設置されている駅を巡る→バスを利用して各観光地まで御案内（バスの有効活用）→自由時間で観光→再び観光列車に戻る→次の駅へ
	・北海道を分解 北海道全体を知ってもらう！ ↓ 某ディズニー映画 zootopia を参考にした｀北海道版 zootopia｀ 熱帯雨林　砂漠　区分け　わくわく なぜ導入したか？？
	・なぜ導入したか？？ 　北海道に多くの観光客が訪れている ↓しかし.. 　・人気なのはある特定の地域 ・地方にあまり観光客が訪れていない →はじめて来る観光客に，ある特定の場所ではなく， 北海道全体を知ってもらうためには… ↓

	それぞれの地域の特徴をわかりやすくする Zootopia 計画がいいのでは？？ ○列車での移動はどれだけ時間がかかる？ 　どんなルートが展開されるのか？ メリットをいっても納得できない！！
	→ここでプランを紹介！！ 　・行程は４泊５日　・時期は今頃 →今後はニーズに合わせて展開！！
	・旅行プランの説明
	・旅行プランの説明
	・商品提案 「移動」「宿泊先」「北海道ならではのサービス」←　一番力入れる せっかく旅行来たからには時間のある限りその土地を満喫 移動時間も北海道を満喫　→比較的自由に車内を移動できる列車の特性 踊り，楽器，体験，食材 目的地までの時間が「ただ場所を移動するための時間」ではなく「その時間そのものも北海道観光の一部になるように」



・何変わる？

冒頭インタビュー「北海道観光で困ったこと」３つ　万事解決！

列車→行動範囲広がる，　zootopia 化→今まであまり訪れられていなかった地方にも呼び込む

観光客→街も少しずつ潤っていく

今世間で話題の地域格差の是正，地方活性化に一役買う，この列車自体新たな目玉，北海道をアピールする存在

今ある観光の問題を解決，地方活性化に貢献，北海道観光のアピール，ひいては，より良い場所にする先駆け

【課題意識】

北海道観光における問題点（広大すぎる土地，タイムロス，移動の難しさ等）を踏まえ，バスではなく，「北海道鉄道」を提案。

【評価】

・観光列車の利点を生かした旅のコーディネートを紹介。

・北海道Ｚｏｏｔｏｐｉａ（ズートピア）計画を利用する列車を「動くホテル」と位置付ける。移動のみならず，北海道ならではのイベント，食を楽しめるようにしたい。

・旅行プラン，乗車券の資料に力が入っている。

・発表技術が高い。

・客観的データを用いた説明

・九州などで先行してこのようなプランがあることから，その成功事例も加えるとより効果が検討できたのではないか。

・プランによる経済効果のシミュレーションを含めると更にレベルアップできた。

（プレゼンテーションテーション風景）

・ＪＴＢ北海道本部開発部長，夕張市市役所チーフ北海道で企業経営の代表計６名の審査員を前にしてグループ研究のプレゼンテーションテーションを施。

（北海道新聞掲載）

（１３）特別講演会

①平成２８年１２月１２日（月）１３時４５分～１５時１５分

②テーマ　「グローバル視点から考える，これからの国際協力：私たちの役割は？」

③講演者　大崎　麻子先生（元国連職員，関西学院大学教授）

④テーマ

ミレニアム開発目標（MDGs）の次の枠組みとして，昨年の国連総会で全会一致で採択された持続可能な開発目標(Sustainable Development Goals）について説明を受け，それを地球規模で実施していくにあたっての日本の役割，また，特に若者に求められている役割が何かを提案される。また，講演者がどういう経緯で国連に就職したか，国連とはどういう場だったか，そのようなグローバルな場で働くにあたり，今から身につけておきたいことは何かなどを助言。

発展途上国における女子教育の問題点を生徒に提言される大崎先生。

ご自信の米国大学進学に関する秘話を生徒に発信される大崎先生。

２．教育課程外の取り組み

（１）高校生模擬国連

教育外活動として，ユネスコの主催する高校生模擬国連大会に参加を即した。８名４チームから参加申し込みがあり，学内選考の結果２チームをエントリーした。内，１チームが全国大会へ出場した。

（２）英語力向上の取り組み

①オーストラリア領事館領事，米国領事館領事，ＥＵ連合を招いた研究授業では，オール英語による授業を実施し，聞くことによる理解の促進を行った。

②国内フィールドワーク

・国際教養大学では，３泊４日を留学生と過ごし，また，プログラムは英語で実施した。また，最後の生徒によるプレゼンテーションテーションも英語で実施。

・長崎大学では，留学生にインタビューを実施。

③北海道庁と連携し北海道を訪問（台湾・メキシコなど）する外国の高校生，大学生などの教育研究を積極的に受け入れた。

（３）海外校との連携

①姉妹校との連携

・オーストラリア姉妹校へイリベリー高校から１９名の生徒を２週間受け入れ，日本文化とオーストラリア文化の交流を行った。

・中国文来高校から，３名の転校生を受け入れた。

②語学・異文化留学

・千歳市主催の留学制度に１名参加した。

・ケンブリッジ大学イースタープログラムに４名の生徒が３週間に渡り参加した。

・公益財団法人イオンクラブ主催（政府間レベル）の高校生交流事業に応募し採用され，中国とのティーンエイジ・アンバサダー事業に参加（２０名）した。（実施は平成２８年７月～１０月で招聘と派遣）
・台湾　臺北市立大安高級工業職業學校２６名の訪問を受け，日本文化（教育・北海道の観光）について交流を行う。
・中国　上海文來高校５１名の訪問を受け，日本文化について交流を行う。
・メキシコのベラクルス州立大学言語センターハラパ校から１４名の生徒が来校し交流活動を行なう。

（４）飛びたて留学ジャパン高校生（第３期）

□　第２期募集において，４名が採択された。
□　第３期募集では，学内説明会に４２名が参加し，２５名が応募した。学内選考で１５名に絞り１１名が申請を行った。内７名が一次選考を通過。内，ＳＧＨ生が６名であった。

３．成果の発信・広報

（１）学校ホームページ

昨年度より本校ホームページに「スーパーグローバルハイスクール」を追加し，日本語版・英語版を運用している。主な内容は研究内容を紹介しながら，研究実績を公開している。

（２）ＳＧＨ通信

ＳＧＨ通信の形式を改め，グローバルタイムズとして英字新聞を発行予定である。

（３）シンポジウム等への大会等出場

□　北海道教育委員会主催の成果発表会に生徒４名が参加。
□　ＳＧＨ甲子園生徒５名が出場
③　北方領土返還運動に於ける研究発表生徒１名が参加。
④　ユネスコ主催の高校生模擬国連大会に２名出場。

Ⅲ．目標の進捗状況，評価

１．生徒の変容

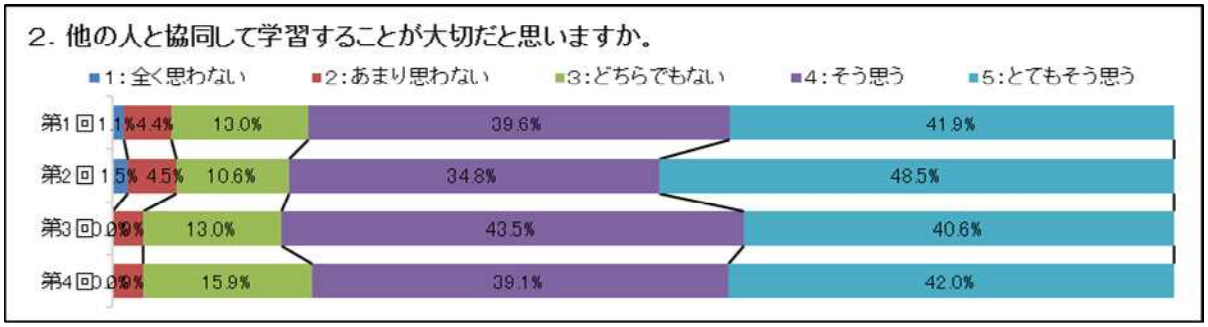
（１）意識の変容

①グローバルな課題への理解，興味・関心②学習意欲③将来の進学・就職等に対する意欲意識④海外での学習，海外旅行に対する意識について生徒にアンケートを実施した。

【高校２年生】

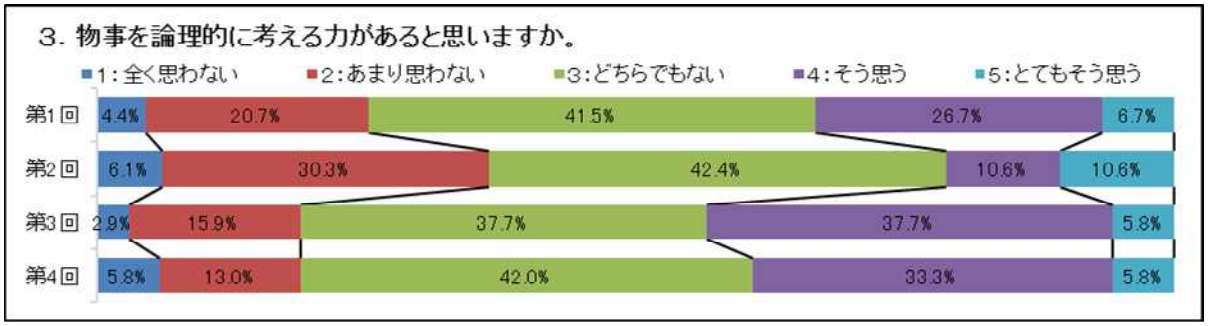
アンケート実施日

（第１回高１年６月・第２回高１年１月・第３回高２年６月・第４回高２年１月）

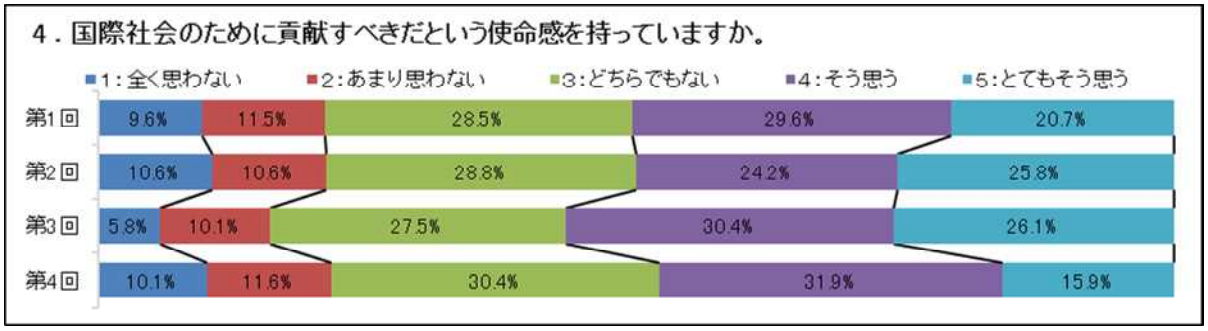


論理的に考えようとする姿勢に変化があった。探求型の取り組みによって，考えることに自信をもつ

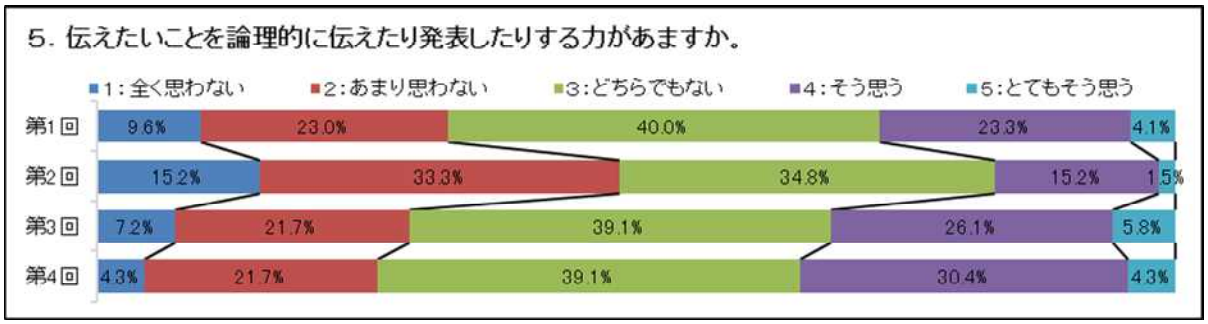
ようになった結果と考えられる。



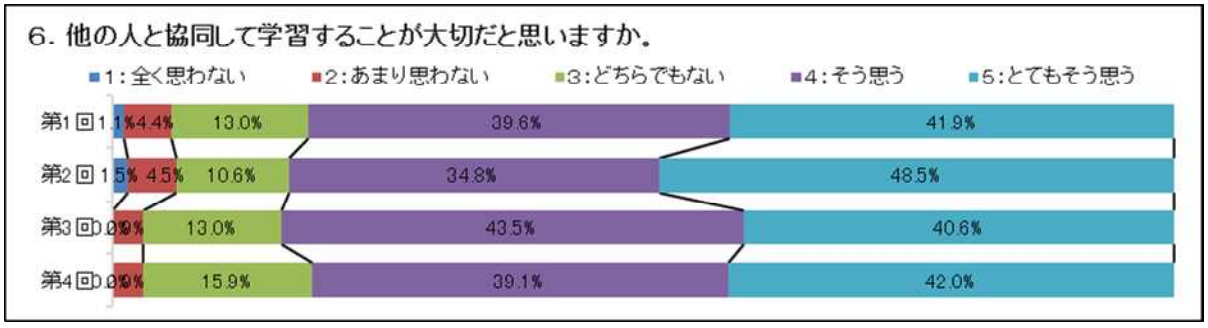
北海道の経済，観光の課題研究を通じて，多様な情報を得ることができたことにより，興味関心を持つ生徒が増えたと考えられる。



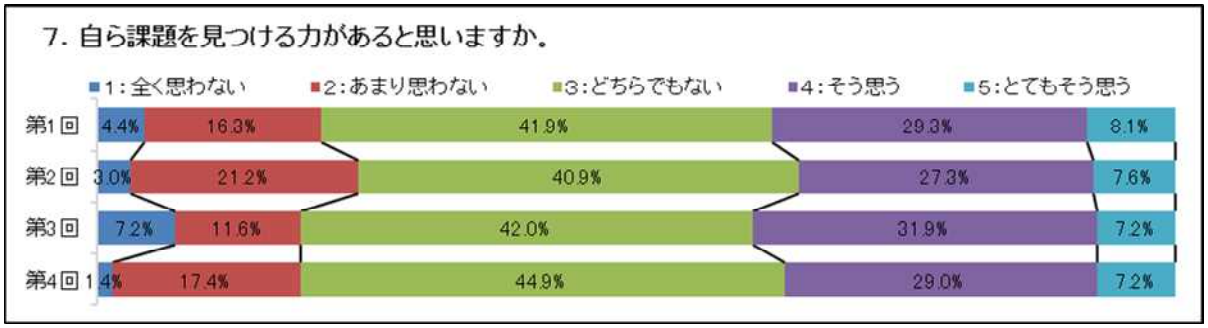
課題研究を通じて，多彩な外部講師によるワークショップなどにより，現代社会の問題点を考える機会が増えたことは，生徒の意識アップにつながった。
生徒は想像以上に新聞などによる情報を入手しておらず，一般常識の量が不足しており，専門知識の習得が課題となっている。



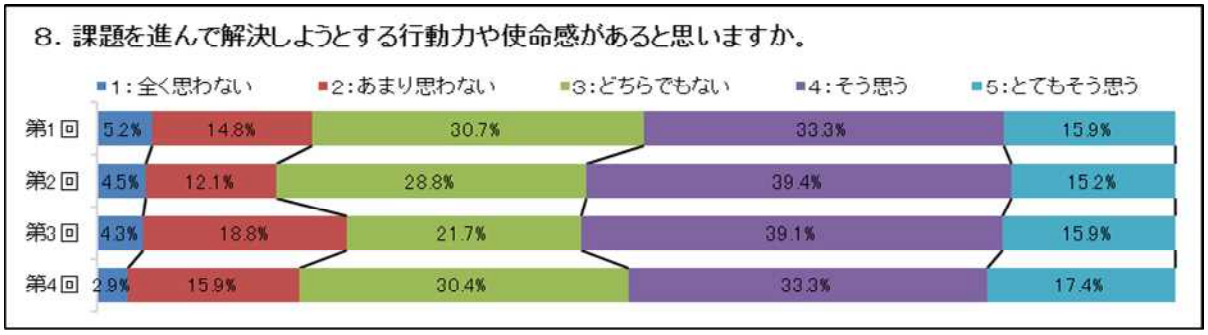
グループ研究を通じて，生徒間での議論や発表の機会により，自信をつけたことによる影響が大きいと考えられる。
論理的に説明する主旨としては，客観的な数値を用いたり，統計的な資料を使う等が必要であるが，その点について十分な理解はなされていない。



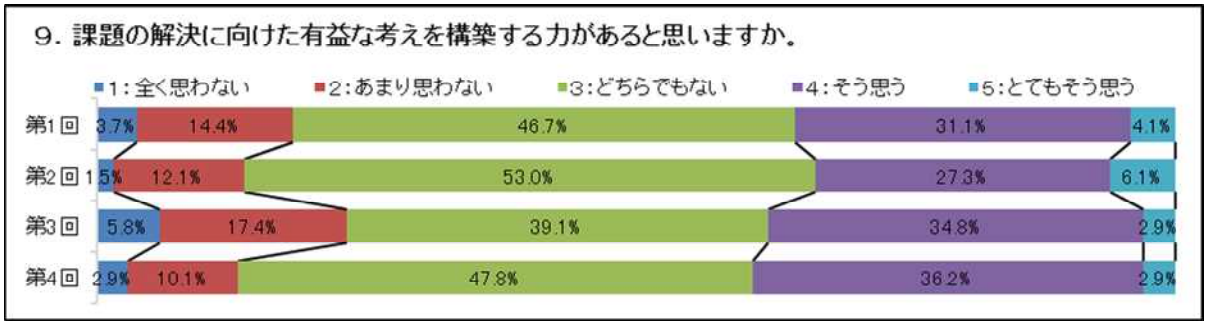
グループ研究を通じて，他人の意見を尊重したり，自分の意見を主張しあうことが，グループでの学習に好影響を与えていると考えられる。



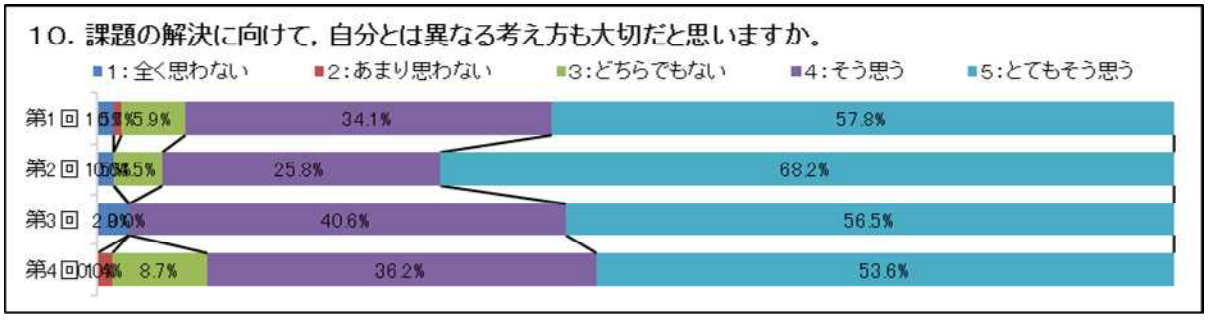
課題研究では，専門分野の社会人，大学の先生などによるハイレベルな投げかけを受けたことで，生徒の力量だけでは難解であったことが影響し，やや低調な結果となった。



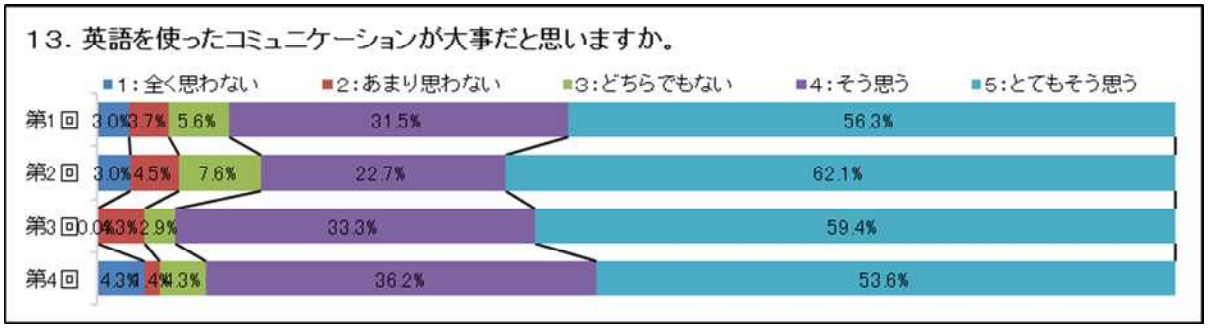
課題研究に進んで取り組む姿勢は伺えた。
課題を見出すプロセスに苦慮しており，中々実行するレベルに到達していない生徒が多い。積極的に取組む生徒と取組まない生徒が生まれている。



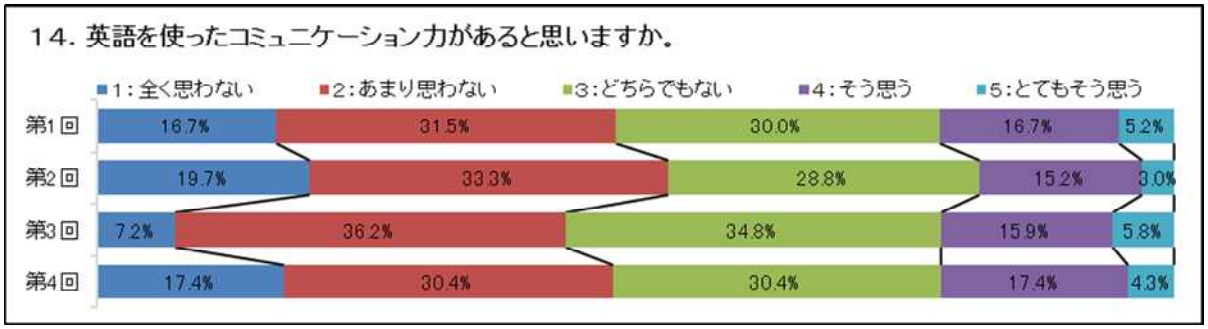
第３回アンケートからが事業２年目となる。１年目は基礎活動としてグローバル教育の教養部分であったが，２年目は課題をグループワークしながら専門の有識者から助言を受けることなどから，経験を積んだ結果として生徒の自信が反映されつつあると考える。



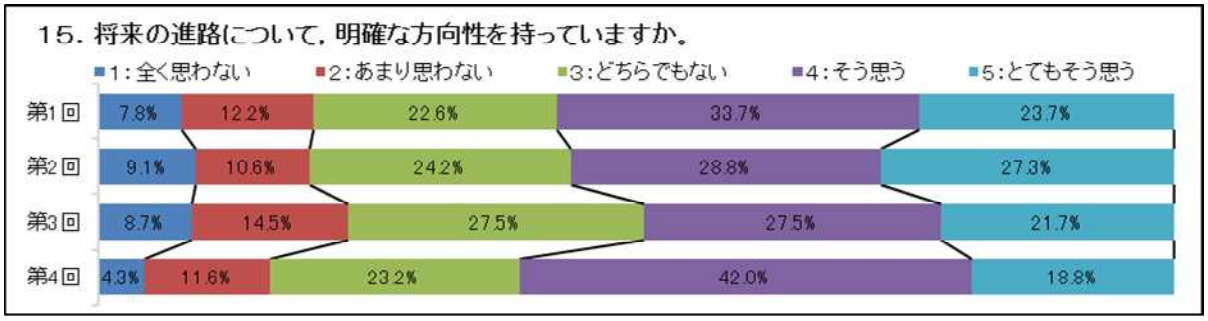
グループワークを中心とした課題研究の成果と考えている。他人の意見を受け止める姿勢が成熟してきている。



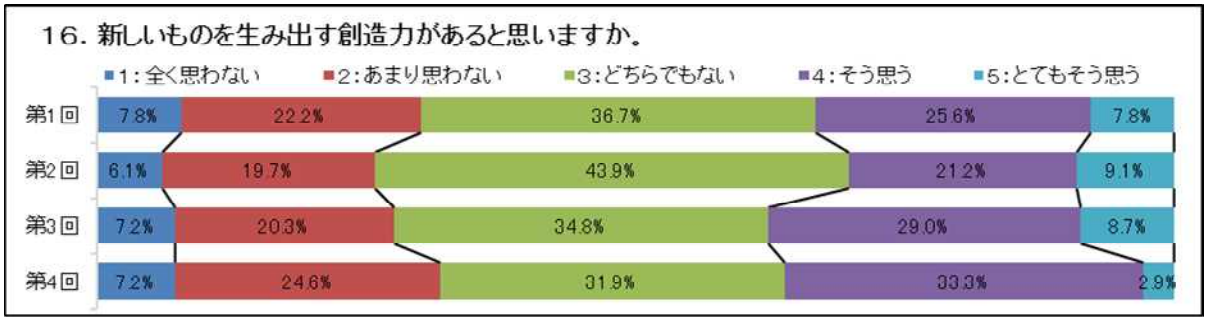
当初より意識は高い状態が続いている。



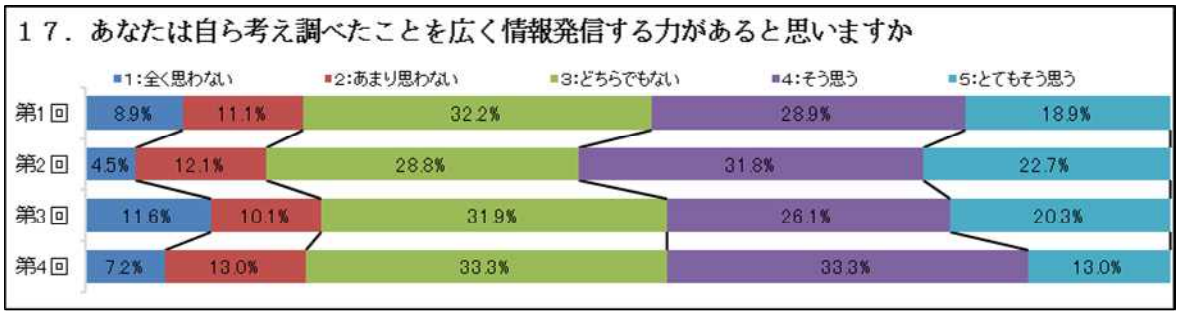
課題研究を通じて，特に外部講師による英語での指導や英語での発表の機会を得ることで自信に繋がった結果と考えられる。



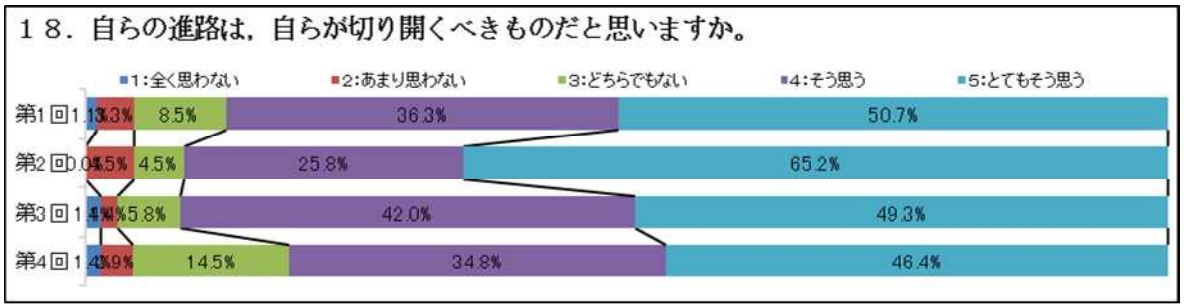
将来の進路についてはかなり明確な方向性を持つようになった。その理由の一つとして，本研究を通じた社会人からの助言が寄与していると考えられる。



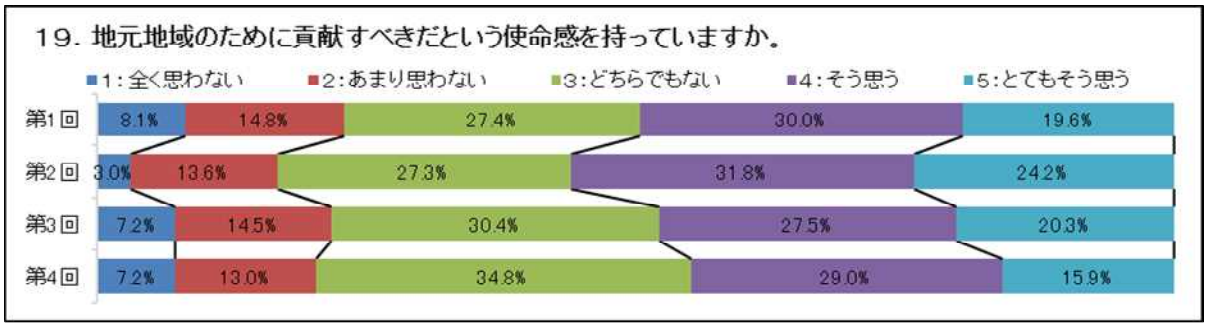
本研究を通じて，新しいものを生み出すことを意識し始めたと考えている。これまでにない取り組みにより，生徒の考え方に変化が出始めている。



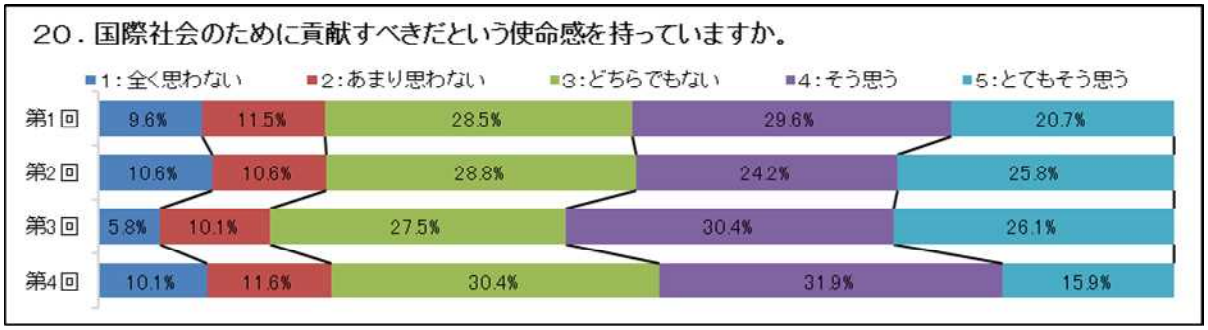
情報発信については，グループ学習を通じて発表する機会を多く持つことができた。その結果，発表することへの自信が芽生え，人前で発表することを敬遠することが無くなった。



当初より，意識高く行動している。



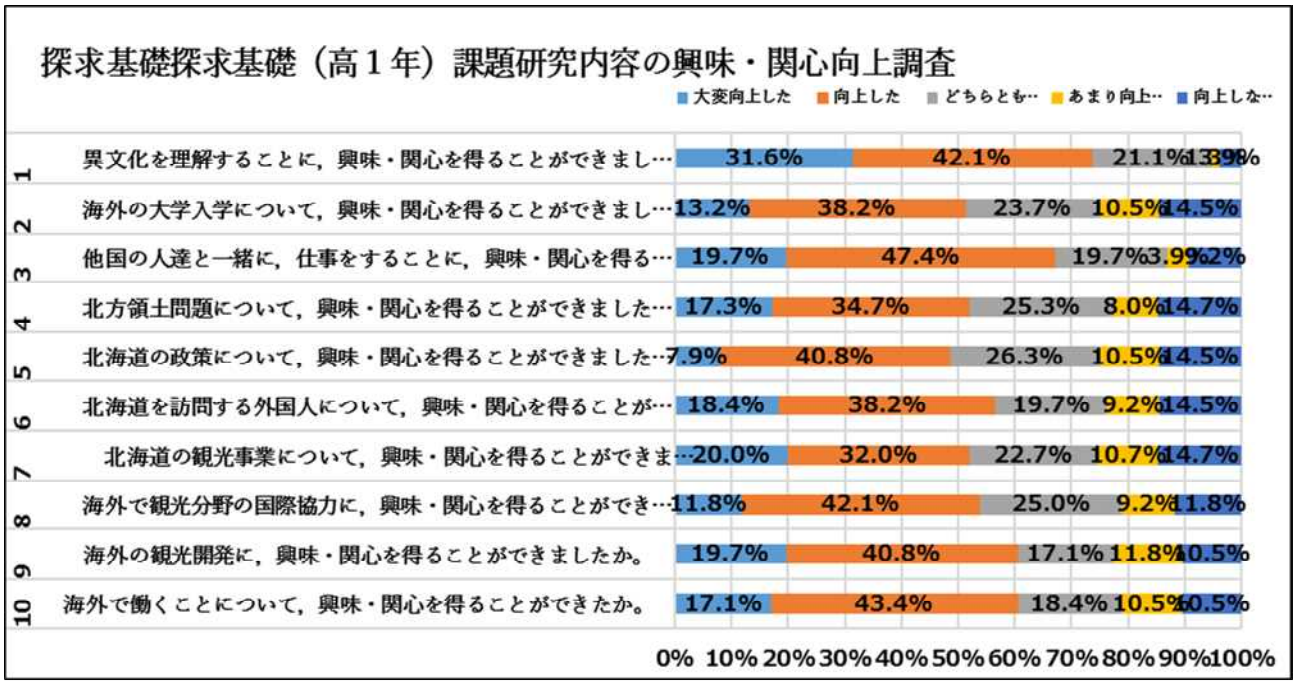
地域貢献を考えることは，漠然とした考えでは通用しないことを学んだ。安易な気持ちから，本格的な気持ちへの変化から使命感が減少してきたと考えている。



国際社会での貢献は，気持ち的には前向きであるが，具体的な取り組みとして施策を考えられないジレンマがあるように思える。

【探求基礎　高校１年生】

●研究活動後の生徒の興味・関心アンケート変化　（第１回高１年６月・第２回高１年１月）

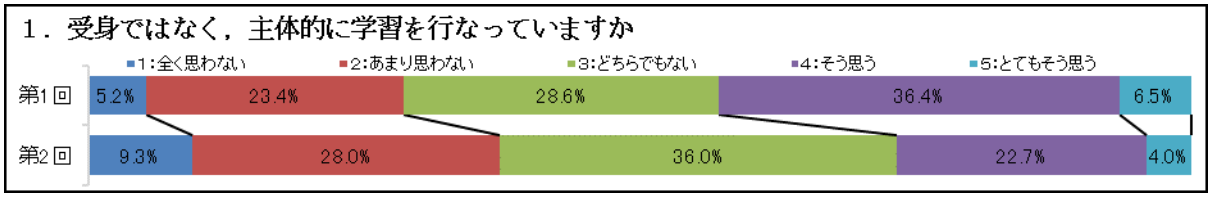


・異文化を理解することへの興味・関心が７０％を超える生徒が向上したと回答した。研究成果の現れであると考えられる。
・他国の人達と一緒に仕事をすることへの興味・関心度合いは，７０％弱を超える結果となった。
・観光に関わる内容も，興味・関心を抱く結果となった。これは，専門知識を持たれた法人から外部講師としてお招きした結果であると考えられる。生徒が興味を持ち活動した。

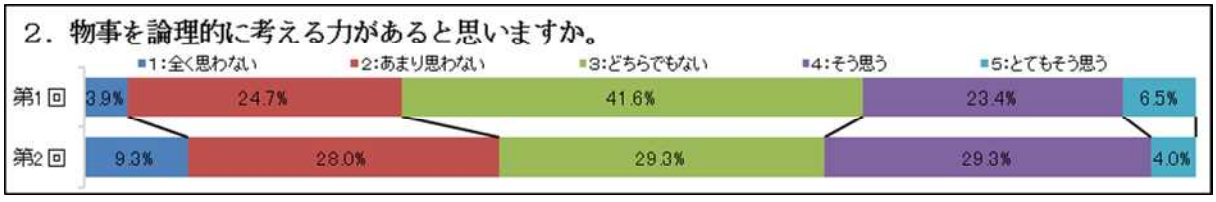
●意識の変容

アンケート実施日

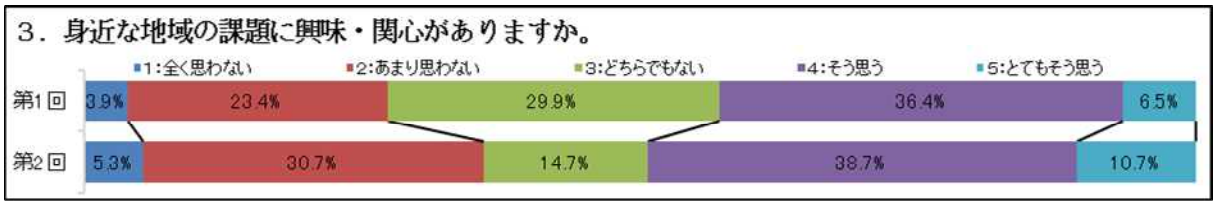
（第１回高１年６月・第２回高１年１月・第３回高２年６月・第４回高２年１月）



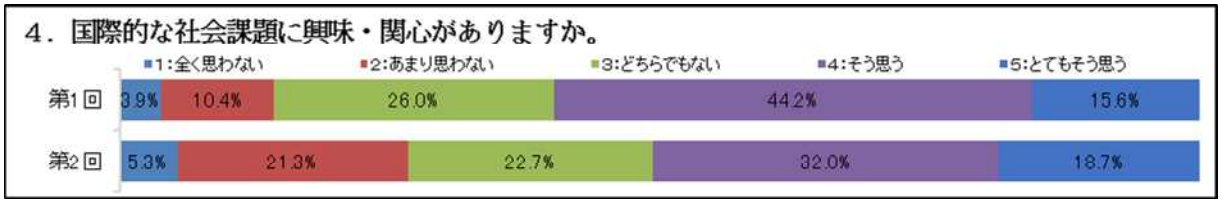
６月実施においては，主体的に学習を行なっていると判断していた生徒であるが，高校生活で要求される内容に乖離があった結果と考えられる。今後の取り組みを観察すべき評価であった。



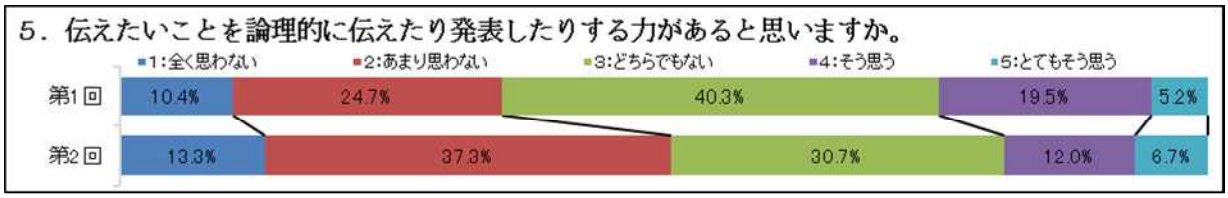
「論理的」の意味が理解できていなかったが，研究活動を通じて，数値や統計を使いながら，活動することで論理的な活動と認識し始めている。



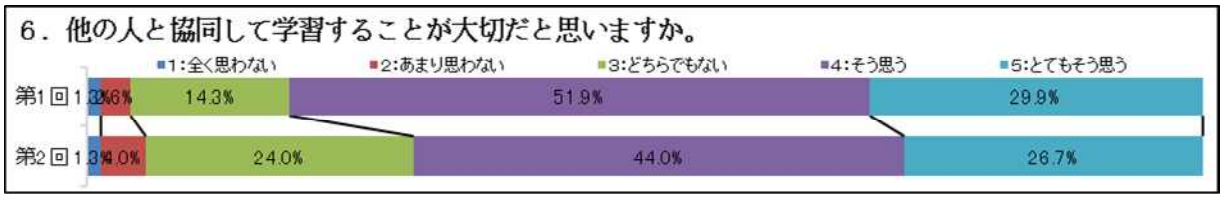
課題研究で「北方領土問題」「北海道の経済・観光問題」を扱ったことで，関心・興味を示すようになったと考えている。ＳＧＨ対象外生徒にヒアリングしたが，興味・関心の差は感じられる。



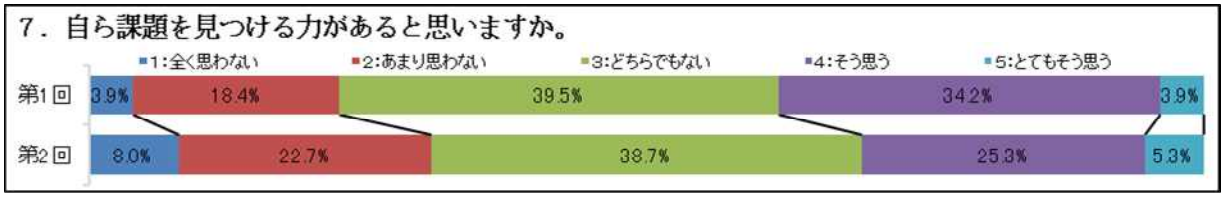
課題研究を通じて，社会課題を掘り下げて研究したことや，専門家の先生からの指導・助言を受けたことで，「社会課題の深さ」を感じ取った結果と考えられる。興味・関心の深さの差が第１回と２回の差であると想定できる。



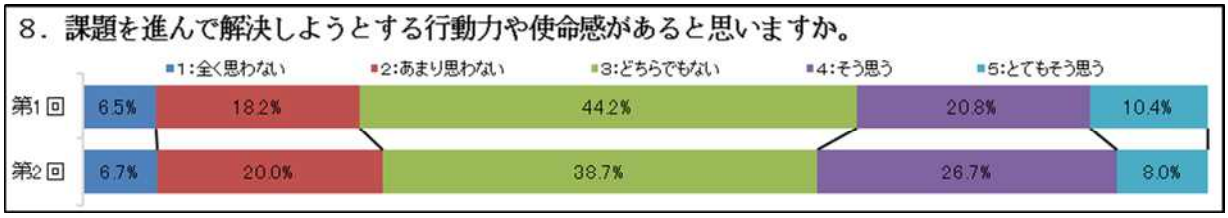
入学当初の生徒基準と履修時に求められるレベルの差異が原因で，「そう思う」「とてもそう思う」が減少した。



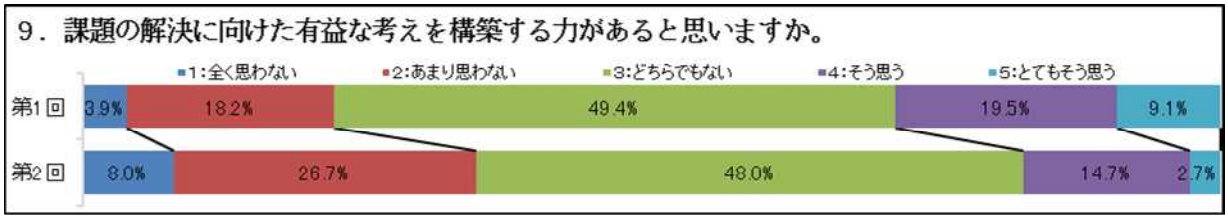
入学当初の生徒基準と履修時に求められるレベルの差異が原因で，「そう思う」「とてもそう思う」が減少した。グループ活動の苦手な生徒が，この活動でマイナスとなっていると想定している。



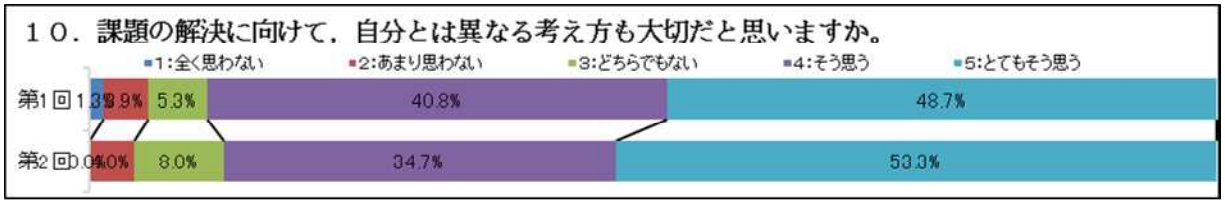
課題研究を通じて，課題を発見する深さを体験したことで，当初の気持ちと乖離した結果と考えられる。



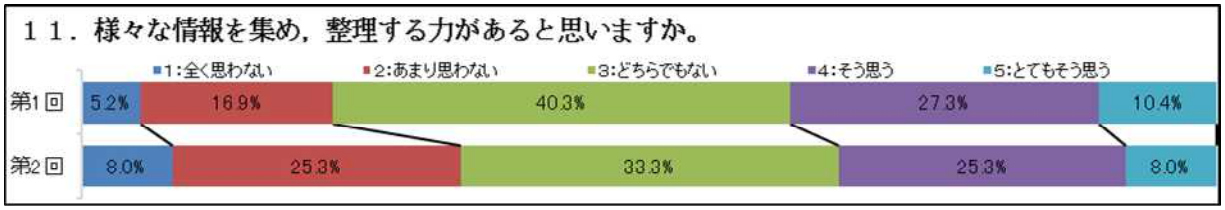
外部講師による生徒への課題の投げかけを通じて，生徒が成長した結果と考えられる。



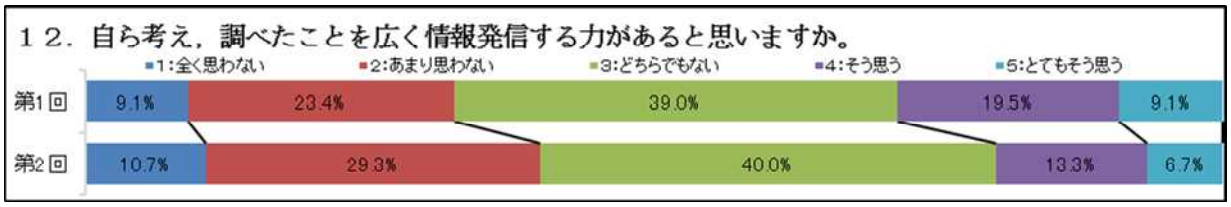
当初の生徒が考えていた構築する力と今年一年間指導を受けた内容の乖離があり，消極的な回答となっている。特に，統計的な資料を利用するなどの手法に未成熟な面がある。



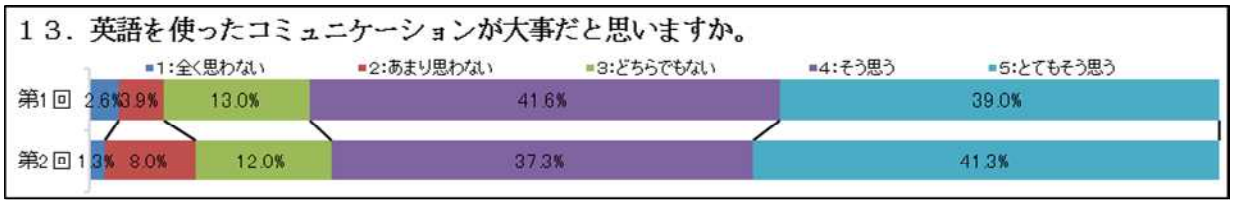
グループワークを通じた授業形式を多く行なったことで，他人の話を聞き，一緒に考えることの経験値が良い方向に繋がっている。



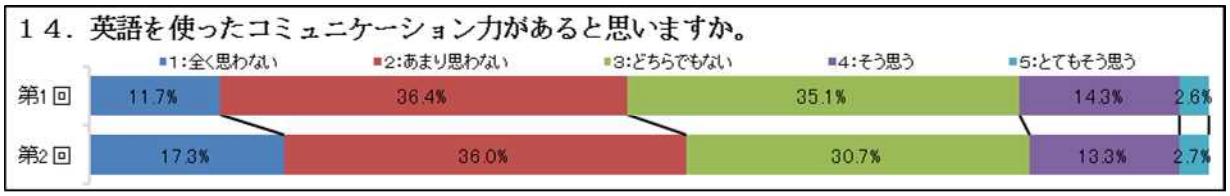
情報を集めることは問題ないと考えられるが，集めた情報を分析し，まとめる力が不足している状況である。



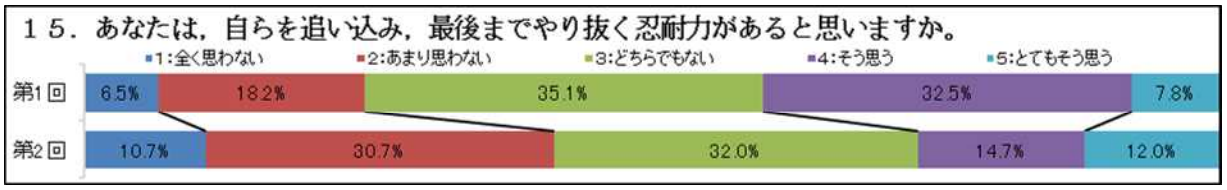
入学当初の生徒基準と履修時に求められるレベルの差異が原因で，「そう思う」「とてもそう思う」が減少した。



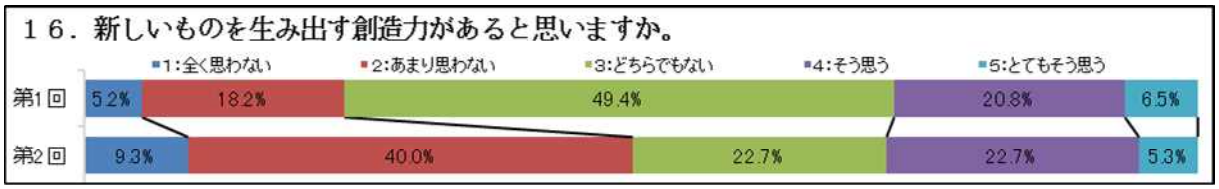
英語コミュニケーションの大切さについては，充分に理解している。



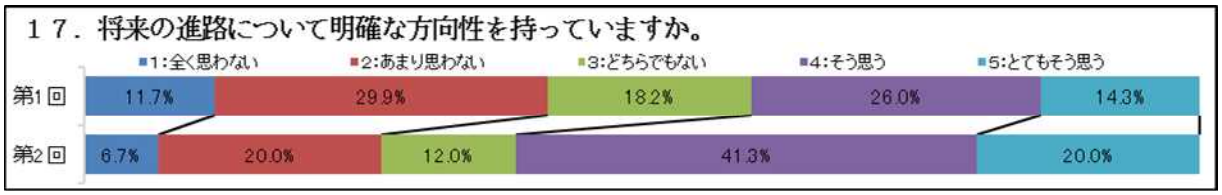
入学当初の生徒基準と履修時に求められるレベルの差異が原因で，「そう思う」「とてもそう思う」が減少した。



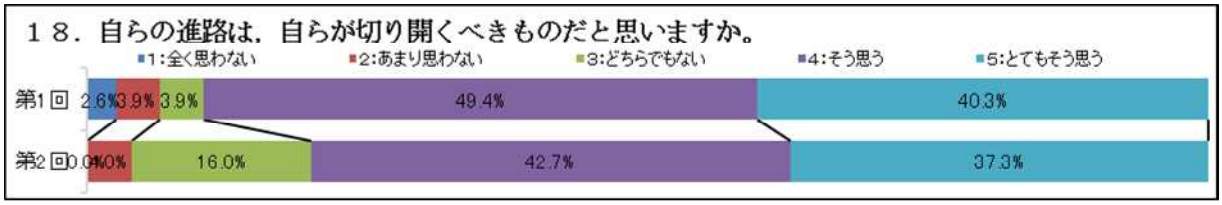
入学当初の生徒基準と履修時に求められるレベルの差異が原因で，「そう思う」「とてもそう思う」が減少



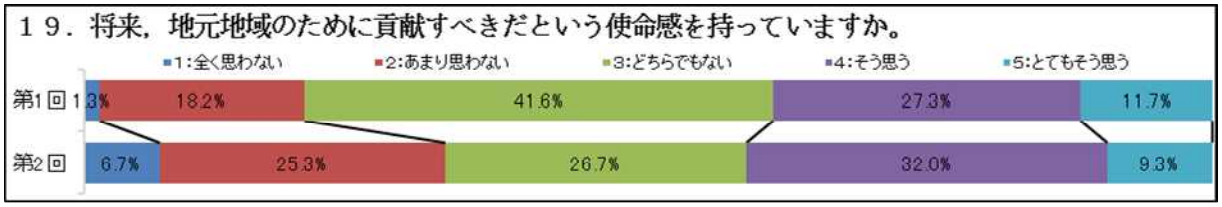
社会活動のテーマを実施した結果，生徒の精神的な成長が未成熟であり，中々新しいものを考える力まで到達していないと考えられる。



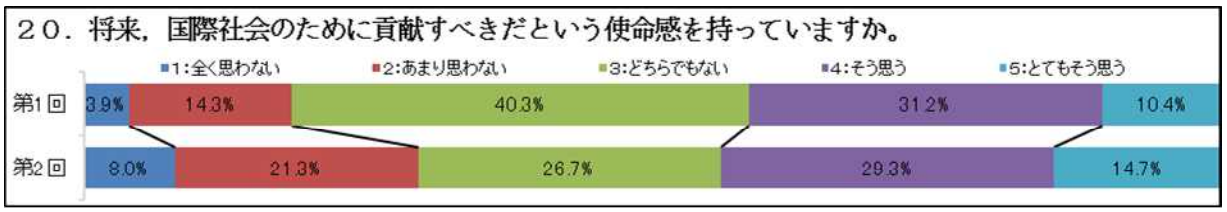
多様な活動を通じて，生徒の意識が高くなった結果であった。



高校入学後から指導される進路と当初生徒が想定していた進路の考え方の相違が減少の理由と考えられる。



当初は希望に満ちた回答であったが，「思わない」傾向が強くなってきた背景は，実態を理解する過程で，貢献への実行に悩みを持ち始めた結果と考えられる。



使命感を持ち，課題に取組んでいる結果と考えられる。

（２）能力・技能の変容

①論理的思考力，判断力，表現力，創造性

②英語のコミュニケーション能力

③英語検定資格取得の推移（ＳＧＨ該当生徒）

ＣＥＦＲ	英語検定	高校１年		高校２年	
		資格取得者数	取得率	資格取得者数	取得率
Ｂ２	準１級			１	１．５％
Ｂ１	２級	１３	１６．９％	１６	２３．５％
Ａ２	準２級	３２	４１．６％	２２	３２．４％
Ａ１	３級	１８	２３．４％	１１	１６．２％
	４級	２	２．６％	１	１．５％
	５級	３	３．９％		
	取得なし	９		１７	
	計	７７		６８	

２．教員および学校の変化

（１）グローバル人材育成に対する意識

〔探求基礎・探求発展　指導教員〕

①各教員ともにグローバル人材育成に対する意識は高い。しかし，教科指導の中に探求型学習を取り入れる教材の工夫が課題となる。探求型の授業スタイルは構築できるが，取り扱うテーマに課題が残る。出来るだけ，社会現象を取り込みながら，生徒に取組ませることが必要であることは検証できた。テーマによって生徒の探求意欲が異なることを教員が理解できるようになった。

②できるだけ多くの経験を積ませながらの授業展開を行うことの重要性を感じる。

③外国語のコミュニケーション能力は当然必要だが，日本の文化・歴史・生活習慣などに関して，創意工夫をした教育が必要であると痛感した。いわゆる一般教養の重要性を意識させられた。

④主体性・積極性・チャレンジ精神の前向きな姿勢は生徒が意識するようになった。

⑤大学・企業と協働して単元の授業を指導することにより，指導方法（課題の与え方，グループワークの仕方など）に新たな発見があった。

⑥探求型学習は，５０分連続１００分程度の長い時間を必要とする。

〔海外フィールドワーク研修引率教員・事前準備教員の育成〕

①出発前に，英語教員による会話指導を実施した。実際のコミュニケーションを想定した形式で行なったことが，現地で項を相した。

②コミョニケーションツールとして，現地に持参する「紙芝居形式」の会話を準備させた。英語が通じない場面などで，生徒が説明に使っていた。

③③フィールドワーク実施に関し，英語科の教員を中心として，コミュニケーション指導の工夫が積極的に行なわれるようになった。

（２）グローバル人材育成のための指導方法の改善

①教務課題検討会議にて，ＳＧＨ取り組みを支援

ＳＧＨの各事業を推進するため，学内で教科の指導を研究する機関の教務課題検討会議が研究を支援する。

②学年との連携

探求応用では，中高一貫コース２年生３クラス全員がＳＧＨ受講生となる関係で，２学年団の担任が全員研究に取り組む体制とした。

③外部機関の講師との調整及び研究

外部機関の講師が持たれているグローバル性を直接生徒に伝えることは直接効果が高い。しかし，本校教師の育成といった面では，そのノウハウを教員が学ぶことは難しい。生徒と一緒に活動に加わることで，研究を進めることとている。

（３）教員間の連携・協力，指導体制

「探求基礎」６８名を１講座，「探求応用」７８名１講座として授業を進めることから，副校長，教頭，担任３名，社会科教員２名，英語科教員１名で授業を進めた。

定めた組織表に従い，組織間の連携を行なっている。

（４）大学・企業・公的機関との連携・ネットワーク

①大学との連携

北海道大学観光高等研究センターから年５名の講師を向かえ「探求基礎」での連携授業を実施した。特に発展途上国での自然，歴史を資産とした観光業構築の流れや政府との係わりなど，５名の講師の実体験を伺いながら観光産業の基礎を学んだ。このような取り組みは，外部講師に委ねる割合が高く，教員の多様性を育てることが重要である。外部講師と教員の交流を深めることの重要性を痛感している。

②企業・官との連携

国土交通省運輸局，北海道庁経済部から１２名の講師を向かえ「探求基礎」（北海道の経済，北海道の産業，国が計画実施している観光施策などを伺い）での連携授業を実施した。ＪＴＢグループから４名の講師を向かえ，「探求基礎」におけるグローバルな時代での働くことへの指針を提示していただいた。外部講師から学ぶ専門的な指導は，教員の知識を超えている。しかし，生徒はその部分に探究心を覚えることが今回の検証として明確であった。

③在領事館との連携

オーストラリア領事館・米国領事館から領事を招き，「探求基礎」（各国と北海道の係わり・各国への留学制度など）の説明や課題についてお話を英語で伺った。両国領事からは，両国の文化と日本の文化を紐付け，生徒が理解しやすい英語で説明をされた。教員は，その指導の補助を行ったが，説明の仕方や比較の手法について教員が学べる内容が多かった。

（５）学校評価

以下の質問は学校評価の一部で，教職員対象として実施したもです。教職員の結果からは，学校全体で取組んでいると判断できる。

質問項目	年度	よくできている	できている	あまりできていない	できていない	回答者数
ＳＧＨの活動は積極的に行なわれているか	平成 29 年度（２年次）	39	42	2	0	83
		47.0%	50.6%	2.4%		
	平成 28 年度（１年次）	10	35	26	10	81
		12.3%	43.2%	32.1%	12.3%	
ＳＳＨの活動は積極的	平成 29 年度	37	41	3	0	81

に行なわれているか	（２年次）	45.7%	50.6%	3.7%		
	平成 28 年度	31	45	4	2	82
	（１年次）	37.8%	54.9%	4.9%	2.4%	
探求型授業の取り組みとして，アクティブラーニングなどの指導について対応できるようになっているか	平成 29 年度（２年次）	8	35	28	2	73
		11.0%	47.9%	38.4%	2.7%	
	平成 28 年度（１年次）	1	21	45	5	72
		1.4%	29.2%	62.5%	6.9%	
ホームページ，通信記事，学校案内などを通じて，ＳＳＨ・ＳＧＨの啓発活動が的確に発信されているか	平成 29 年度（２年次）	36	40	2	0	78
		46.2%	51.3%	2.6%		
	平成 28 年度（１年次）	18	36	16	5	75
		24.0%	48.0%	21.3%	6.7%	

３．外部評価

（１）運営指導委員会

第１回　ＳＧＨ運営指導委員会

日　時：平成２８年６月１６日　１５時００分～１６時００分

会　場：札幌日本大学中学校校舎　会議室・体育館・分科会

出席者：株式会社　北海道新聞社　論説委員室　論説委員　坂本　和之
公益社団法人　北海道観光振興機構人材育成・サービス向上グループ
斉藤伸子担当部長
学校法人　札幌大学　地域創生学群　小山茂教授
国立大学法人　小樽商科大学　商学部　船津秀樹教授
札幌商工会議所　国際・観光部　鈴木伸明部長

議　題：①指定経緯説明（学校長）②事業取り組み説明（副校長）
学校長よりスーパーグローバルハイスクール指定に関する本校の方針，取り組み，現状に関する説明を行なう。開会挨拶続いて，事業責任者の副校長より，配布資料の説明を行なう。全体会では，運営指導委員の先生方に，本校の構想と具体的取組の計画について理解を求めた。
③授業視察
アクティブラーニング後の探究報告として，２グループが説明を行なう。
・北方領土問題研究（指導教員　辻・宮間）
・北海道の観光研究（指導教員　多津美・諸橋）

【出席者からの意見・指導】

（生徒の研究発表について）

- 各教科で探求型の授業に取組まれていることは評価できる。地歴公民・国語・英語では具体的な内容で行なわれていた。理科は実験を持ちいた取り組みを題材としたアクティブラーニングは評価できる。（小山　茂先生）
- 非常に難しいテーマに取り組まれており，今後の展開に期待したい。北方領土問題は，北方領土単体で解決策などを検討するよりも，世界で様々な対立がおきていることを広く捉らえることが大切である。是非，海外フィールドワークなどを通じて，他の国々の方の考え方を調査されると良い。（船津　秀樹先生）
- 北海道観光振興会として，高校生がこのような取り組みをされていることに感銘

を受けている。北海道は自然豊かであり，自然と食に，冬季シーズンが主な財となっているが，まだまだ，海外の認知は低く，是非高校生の斬新な検討を期待している。（斉藤　伸子先生）

- 商工会議所として，札幌の経済活動活性化に向け，企業を通じた課題研究への取り組みに積極的に協力していきたい。（鈴木　伸明先生）
- 積極的な取り組みである。英語で調査しようと努力していることも評価できる。特に，文化の違いを英語表現で認識することは難しいが，身振り手振りでのコミュニケーションも必要であったと感じられた。是非，英語表現力のレベルを高めて欲しい。（坂本　和之先生）
- 英語表現が非常に優れていた。読み上げるだけではなく，伝えようとするコミュニケーションが良かった。（小山　茂先生）
- 英語でのクリティカルシンキングを体験されたことは非常に興味深い。また，グローバル大学との連携により，生徒もより身近に感じ，グローバル大学への進学を意識できたのではないか。今後，学校の教科指導にどのように取り組んでいくのかが学校の取り組みとして重要である。（船津　秀樹先生）

（指導体制について）

- 全体的に生徒が積極的に取り組んでいる。また，英語表現が高いレベルにあるように感じる。（斉藤　伸子先生）
- 社会記事を新聞やニュースを通じて，積極的に考える時間をとることが重要。記事の内容そのものよりも，今，世界でどのようなことが起きているのかを知ることが重要で，興味深く取り組んで欲しい。（坂本　和之先生）
- 探求型の学習は，大学でのアクティブラーニングであるが，生徒の中で中心的にリーダーとなるべく環境を策定することが必要。積極的にグループ討議に参加できる環境は，リーダーの進行手法にかかっている。そのようなリーダー教育を行うことも必要。（小山　茂先生）

第２回　ＳＧＨ運営指導委員会

日　時：平成２８年１１月２４日　１１時００分～１６時００分
会　場：札幌日本大学中学校校舎　会議室・体育館
出席者：株式会社　北海道新聞社　論説委員室　論説委員　坂本和之社員
公益社団法人　北海道観光振興機構人材育成・サービス向上グループ
斉藤伸子担当部長
学校法人　札幌大学　地域創生学群　小山茂教授
国立大学法人　小樽商科大学　商学部　船津秀樹教授
札幌商工会議所　国際・観光部　鈴木伸明部長
北広島市教育委員会　教育部　鹿野　秀一次長
議　題：

①平成２８年度事業報告（学校長）
学校長より平成２８年度事業実施の状況報告を行った。

②平成２８年度事業報告（副校長）
副校長より，本報告書に基づき平成２８年度研究課題の取り組みと検証報告を行った。また，当初計画の目標進捗状況の報告も行い，概ね目標到達である旨報告を行った。課題として，生徒間の意識格差が広がる傾向にあり，対策が必要であることを報告した。
船津委員より,大学でも同様の格差問題を抱えていることが意見され,対策として,

取り組みに消極的な生徒への教材作成の工夫を提案された。

③平成２９年度事業計画（副校長）

平成２９年度研究計画の説明を行った。

④平成２８年度研究報告（生徒による研究発表）

各テーマとも，指導教員による指導報告を実施後，生徒の発表を行った。

ア）課題発見，解決グループ学習（課題：北海道の３０年後の産業を提案）

・１１グループに分かれて，課題を策定した経過を説明し，優秀グループ２チームの発表を評価した。

イ）北方領土問題プレゼンテーションテーション

・北方領土の日の発表に向けての，プロセス説明と当日の署名活動，元島民の方のインタビュー，各団体の方へのインタビュー結果を踏まえ，現状の課題と高校生で実施可能な施策を発表した。

ウ）高校生模擬国連参加者による交渉力プレゼンテーションテーション

・高校生模擬国連に参加して，交渉力，英語表現力，知識力などに於いて，未成熟であった体験から，今後の研究に向けての取り組みを報告した。

・膨大な資料を読み込み，各方面へのインタビューなどを通じた，実経験の主さを振り返り，アプローチの重要さを感じた報告であった。

【出席者からの意見・指導】

（平成２８年度研究報告について）

ア）研究報告全体について

・「統計資料に関して生徒が理解を示さなかった課題について」

各方面から示された統計データについて,高校生が理解しやすい示し方の工夫により,探求型の取り組みが成立するのではないか。（小山茂先生）

・「教材の策定について」

授業研究，教材策定のため授業研究のビデオ撮りを行ってはどうか。それらの資料をマニュアル化すべきではないか。と意見が出され，新年度に向けて改善することとした。（鹿野秀一先生）

・「高大連携について」

高大連携については，大学生と高校生が同じテーマで一緒になり活動することが望ましいのではないか。また，その活動を単位の互換性を持たせることで，より精度の高い連携ができるのではないか。（船津秀樹先生）

イ）課題発見，解決グループ学習（課題：北海道の３０年後の産業を提案）について

・プレゼンテーションの技術は大変優れていた。

・提案内容には興味を持てた。事業として提案していたのであるから，将来の売り上げなどの会計手法が取り込まれていると良い。

・夕張市をテーマとしたグループは，統計資料もあり課題の明確な表現と解決に向けての計画が明示されており，完成度が高かった。

ウ）北方領土問題プレゼンテーションテーションについて

・多様な経験を積まれており,発表内容においても双方の意見,主張を理解しながら,まとめた内容はすばらしいものであった。４島返還，２島返還の意見も元島民によっても意見が異なることがあり，答えのない問題に取り組んだことを評価したい。（坂本和之先生）

・昨年の１年生に比べ，主張内容や分析力が進歩していた。特に，元島民の方や多方面にインタビューを行っていたことにより,真実をおびた発表となっていた。（船津秀樹先生）

エ）高校生模擬国連参加者による交渉力プレゼンテーションテーションについて

・大変すばらしい発表であった。まさに答えのない課題に取り組み，また，客観的に分析を行い，自らの課題を改善しようとしている姿は，グローバル人として評価できるものであった。(坂本和之先生)

・多くの機関に協力していただき，膨大な資料を探し分析した活動は，是非，次の学年の生徒にも伝えられるよう指導書づくりをお願いしたい。(小山茂先生)

（２）探求型学習研究会

日　時：平成２８年６月１６日　１１時００分～１３時００分

会　場：札幌日本大学中学校校舎　分科会

教　科

教科	科目	対象
国語	現代文	高校１年
数学	数学Ｂ	高校２年
地歴公民	現代社会	高校１年
理科	科学と人間生活	高校１年
英語	コミュニケーション英語Ⅱ	高校２年

研究会：５０分研究授業　５０分合評会

参加者アンケート（抜粋）

第２部　生徒研究発表会について

＜本校の取り組みについて＞

先進的な取り組み，学校教育目標との整合性など大変勉強になりました。

＜生徒の発表について＞

質疑応答や英語を含めたプレゼンテーションすばらしかったと思います。テーマを研究グループだけでなく，全体のものとするために重要なプロセスだったと思います。

第３部

＜探求型学習について＞

クラス内の雰囲気が良く，意見が出やすい環境作りをされていたと思います。

＜本日の授業で興味を持たれた点＞

・生徒主体で活動するtaskを設定されていた点
・様々な意見がなされていた点

ありがとうございました。

その他

第２部　生徒研究発表会について

＜本校の取り組みについて＞

具体的でわかりやすかったです。
（Powerpointの資料が手元にあればよいと思いました。）

＜生徒の発表について＞

発表内容もよかったですが，質問の方もなかなかよかったです。

第３部

＜探求型学習について＞（英語）

すばらしかったです。

＜本日の授業で興味を持たれた点＞

五校同士の話・ほとんど英語で行っていたこと。

第２部　生徒研究発表会について

＜本校の取り組みについて＞

生徒はもちろん、先生方も試行錯誤しながら取り組んできた１年間だったかと思います。生徒たちに探究心を持って主体的な活動を促すために、企業や大学と協力し、講演していただいたり、協働することの重要性を感じました。参考にさせていただきたいと思います。

＜生徒の発表について＞

司会進行の生徒も、研究発表していた生徒も、とても落ち着いて堂々と話していて、これまでの練習の成果を感じました。質問に対しても、調べてわかったことだけでなく、そこから自分たちで考えたことをふまえて~~解答~~回答できていた点が、良かったと思います。パワーポイントも見やすく、わかりやすく、有効的に活用されていました。

第３部

＜探求型学習について＞　英語

ただ教科書の英文を読んだり、訳したりするだけでなく、教科書で学習した内容をもとに英語で議論したり、発表したり、とても能動的に生徒が授業にのぞんでいる姿が素晴らしいと思いました。普段の授業からこれだけ積極的に英語を話しているからこそ、研究発表でも英語で堂々と話せるようになるのか、と感心しました。

＜本日の授業で興味を持たれた点＞

生徒たちが主体的に考え、話し合っている様子、伝えたいことをうまく英語にできなくても辞書等使って一生懸命伝えようと努力している様子が印象的でした。テーマに対して"Shogi"という高校生らしい独創的な意見が出ていて、聞いていて、見ていて面白かったです。

その他

第２部　生徒研究発表会について

ヒントをいただきました。

＜本校の取り組みについて＞

これまでの取り組みの経緯やご苦労、課題がとても簡潔にわかりやすく説明していただけました。

＜生徒の発表について＞

英語と日本語を組み合わせた形態はよかったと思います。英語はみな上手な発音でしたが、わかり易さと聞きとり易さからは改善の余地があると思います。大事なところはもっと強く、意味に応じて間をとって、また何よりも 6W2H の "Whom" を考えて、聞く人を考えたもっと易しい表現での delivery を目指してもらいたいと思います。

第３部

＜探求型学習について＞

午前の部で伺ったサイクル通りに組み立てられた授業で、なるほどと納得できました。また active learning の授業法が取り入れられていて、学生はとても積極的に学びに参加していました。それはとても良かったと思います。ただ、英語の授業としては、到達目標が不明確だったように思います。

＜本日の授業で興味を持たれた点＞

第２部　生徒研究発表会について（※見学された方だけでかまいません）

＜本校の取り組みについて＞

貴校の教育方針を学校長より説明され明確な目的のもと教育活動が実践されており、特に社会貢献、人材教育に力を入れている点に感銘を受けました。見習わなければいけない点が多かったです。

＜生徒の発表について＞

SGH校だけにあって語学に対する能力、プレゼンカは非常に高いと思われます。生徒の情報・収集能力は高いと思います。~~レベルの高い~~分析能力も高かったと思います。質疑でもう少し受け答えがハッキリできていれば良かったと思います。

第３部

＜探求型学習について＞

とても良い授業だったと思いますし、生徒が積極的に参加していたので理想的な授業だったと思います。いたるところに生徒のやる気、動機づけなどおもしろかった。最後の部分がマイノリティーの意見があったとしても、ある程度の方向性があればもっと良かったと思います。

＜本日の授業で興味を持たれた点＞

カードを用いての授業

第２部　生徒研究発表会について

＜本校の取り組みについて＞

育てたい人材の人物像がしっかり示されたよで教育方針、SGH校への取り組みへと系統だっている点が大変参考になりました。

＜生徒の発表について＞

どのチームもすばらしかったです。発表だけでなく、聞いている生徒から大変活発に意見が出されており、それに臨機応変に答える姿にも感銘をうけました。

第３部

＜探求型学習について＞

グループ学習の形式に生徒が慣れている、という印象を持てました。全員が前向きに話し合いに参加しており、意欲の高さを感じました。また時間の区切りと生徒の切りかえの早さも印象に残りました。

＜本日の授業で興味を持たれた点＞

次回予定の討論（ディベート）が実際にどのような雰囲気で行われるのか、見てみたいと思いました。

第2部　生徒研究発表会について

＜本校の取り組みについて＞

生徒さんの質が高く、その質に対応したSGH、(おそらくSSH)の活用が上手くされていると思いました。通常の職務に付加した先生方の大変さを、業務処理能力があってのことだろうと想像しました。色々な意味で、大変刺激を受けました。

＜生徒の発表について＞

事実の調べ学習から、一歩踏み込んだ感想や体験を感じられた発表がいくつかあって、さすがだな！と思いました。又、その発表の「質疑の時間」が特におもしろく、その切り取り能力こそ一番大切で、学ぶものも多いのではないでしょうか？とても良かったと思います。

第3部

＜探求型学習について＞

先生の問いに対して、答えを出そうとする姿勢や構えが生徒にできている。もう少し、教科書を使用させた方が現実としての探求型学習に近づけたように思いました

＜本日の授業で興味を持たれた点＞

動きがある、私は……反省しました。
通常の授業は（どんな風なのか）？と思いました。

その他

このたびは資料提供もいただき、厚くお礼申し上げます
今後とも、よろしくお願い申し上げます

第2部　生徒研究発表会について

＜本校の取り組みについて＞

SSHとSGH両方の指定を受け、様々な教育に力を入れているということがわかりました。

＜生徒の発表について＞

生徒の英語がとても流暢だということに驚きました。発表生徒のシンガポールでの経験が良いものであったと思いますが、今後の日本の教育に足りないものについても生徒が話をしていて、非常に感銘を受けました。

第3部

＜探求型学習について＞

生徒がつくった問題（確率）について考えるという授業でしたが、生徒がグループで積極的に取り組み、発表している姿が印象的でした。問題も工夫されており、生徒が自ら新しい発見をできたと思う。

＜本日の授業で興味を持たれた点＞

生徒の積極性とプレゼン力。
数学でのアクティブラーニングの難しさ、有用性を改めて感じ考えさせられた。

Ⅳ．今後の課題及び改善の方向性

１．課題研究の取り組み

（１）課題研究の手法についての見直しをする

今般，社会課題に関する探究的学びに求められる，課題発見→課題分析→課題解決の手順は「知る，考える，行動する」とするのが適切である。したがって，次年度以降の課題研究においては，設定した課題の仮説検証や事実分析などのプロセスを見直し，この課題研究の手法について，関係者の共通理解を十分に深めて臨みたい。社会課題に関する探究的学びは，「知る，考える，行動する」ということだが，その場合は，課題解決の必要性について主体的なインセンティブを与えることや，具体的なプログラムのアイディアについて想像力を発揮する，創造的（クリエィティブ）な学び，発想力を鍛える学びとなることも事実である。しかし，それだけでは，本校のＳＧＨのＰＢＬ「課題解決型学習」におけるフィールドワークへの取り組み，収集する情報の質を高める，専門的知識の理解不足があったので，これを改善することが課題である。

（２）教育活動の統合的な研究開発に発展させる

①　ＳＧＨ事業を通じて「探求型学習」の取り組みを，他教科に浸透させる計画で進めているが，教科学習における双方向授業・アクティブラーニング研究は教科内で研究されており，ＳＧＨ研究との密接な検討に課題が残っている。また，教科共通のパフォーマンス評価の事例研究が遅れていることが課題である。

新年度に向けては，教務内に連携チームを発足し２つの課題の改善を図る。

②　日本特有の言わずもがな，阿吽の呼吸，暗黙の了解はあくまでもローカルルールであり，このことこそがグローバル課題であると考えている。不言実行ではなく有言実行がグローバル基準であることを理解させるために，論理的にわかりやすく表現することが必要条件であることを理解させる学習を行なう必要が高い。その手法としては，論理とは言葉と数字から成り立つものであるから，あいまい性を排除し，きちんと定量的に表現する習慣を身に付けることに主眼を置く指導を行なう。

「論理的」の定義として，「数値データ」・「統計データ」・「資料」・「調査結果」などを用いて，説得力ある内容とすることにしている。各教科においても，その考え方の元生徒への指導を共有化することにしている。

２．パフォーマンス評価

パフォーマンス評価は，策定した評価内容と生徒の成長過程を引き続き調査を行なう。探求基礎では，論文形式の評価テストを試行的に実施した。策定しているパフォーマンス評価に合わせて評価を試みたが，多数の生徒を評価することに課題がある。次年度へ向けての課題である。

３．海外研修フィールドワーク

３月終盤に６泊７日の日程でフィールドワークを実施した。今年は２か国訪問し，陸路で国境を超える体験をすることができた。特に，マレーシアから非常に多くの労働者が国境を越えてシンガポールに働きにいく光景は，島国日本では考えられないことであり，また，貧富の差を感じることもできた。生徒にとって，大変良い経験であった。

宗教上の理由から，トイレの仕様が異なっている点にはショックを受けていた。今回のルートは，生徒に異文化を体験させる良いものであった。次年度も継続したいと考えている。

①　前年度の反省から日程を５日間から７日間に変更し，訪問国にマレーシアを追加し，

シンガポールとの２カ国訪問を行い生徒１３名が参加した。両国ともに，多文化国家，多宗教国家であることから，フィールドワークでは両国の生活文化，食文化を調査する目的でチャイナタウン・アラブストリートなど民族が集まる地域を現地大学生と一緒に調査した。 このＢアンドＢ方式は,現地大学生と英語や言語コミュニケーションを使いながら、公共交通機関で移動するなど，その国の生活を再現する良い手法であり実施後は生徒に自信がついた様子であった。次年度も継続したいと考えている。

②　マレーシアのベルジャヤ大学綱領では，観光学を学ぶ学生によるグループワークから始まり，大学の先生によるマレーシアの衣装について，歴史やしきたりなどを学び，実際に試着を行った事で，宗教の考え方を学ぶことができ大変良い交流であった。

③　企業との研究，交流活動

ア)シンガポール企業を訪問し，水の問題について学んだ。日本のように水で困ることのない国と，水を他国から購入している国の課題を学ぶことができた。

イ)北海道 ASEAN 事務所に訪問し，現在の活動状況の聞き取りを行った。本校の生徒６名からは，現在の北海道事務所の課題について，活発な意見交換の場となった。

④　海外フィールドワーク指導モデルの確立（海外フィールドワーク報告に掲載）

昨年度の反省を踏まえ，本年度は次のモデルで海外フィールドワークを実施した。予算の関係から，海外フィールドワーク参加者を限定するため，参加者以外の生徒の指導が課題であった。また，調査に関して生徒の語学力が未成熟なため，準備の仕方を変更した。

４．校外での交流・研修会への参加

校外での交流，研修会への参加は，大会が少なく交流機会の開拓が難しい。

□　北海道ＳＧＨ中間成果報告会

平成２９年１月２３日（月）に,「北海道ＳＧＨ中間成果報告会」が開催されました。北海道内のＳＧＨ指定校，アソシエイト校と道内の高校生，教員が参加し，今までの取り組みをポスターセッション形式で報告・質疑を行いました。生徒は，発表後グループに別れ，日頃の活動について意見交換を行なった。

本校は４名の高２年生が出席し，現在研究を進めている課題テーマを紹介し，研究の一部を報告しました。他校に比べ優れていた点は，発表する内容を棒読みすることなく，生徒本人の言葉で説明をしていたことでした。また，発表内容は，主張する点，課題，解決手法を的確に表現していたことや，海外フィールドワークの経験を活かした，異文化意識をしっかりと説明して点も評価できる内容であった。

本校のＳＧＨ研究過程を説明する生徒

研究課題の北方領土問題を発表する生徒

◆ＳＧＨ高校　参加校

北海道登別明日中等教育学校・北海道札幌開成高等学校・札幌聖心女子学院高等学校
立命館慶祥中学校・高等学校・札幌日本大学高等学校

◆参加高校教員（参加高校外）

岩見沢農業高等学校・滝川西高等学校・札幌西高等学校・札幌啓成高等学校・有明高等学校
小樽桜陽高等学校・小樽商業高等学校・小樽工業高等学校・室蘭栄高等学校・滝川西高等学校

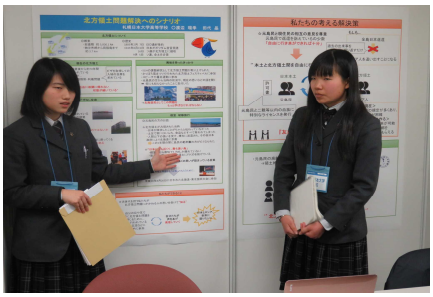
②ＳＧＨ甲子園大会

関西学院大学主催の「ＳＧＨ甲子園」（平成２９年３月１９日（日））に生徒５名（２グループ）が参加した。全国のＳＧＨ指定校・ＳＧＨアソシエイト校の生徒が参加し，日頃の研究成果を口頭やポスターで発表し，課題研究の深化および学習や進路選択に関する意欲を高め，問題解決能力やプレゼンテーションテーション能力の向上を図るものであった。本校は，ポスターセッション部門に２グループ５名（ＳＧＨ対象生の高校２年生）が参加した。１グループは北海道の経済と観光課題，もう１グループは北方領土問題を取り上げ発表した。

今年度におけるスーパーグローバルハイスクールの研究開発の実施状況を総括するとともに，生徒の研究発表を通して指導内容を検証し，研究開発のまとめとするとともに，次年度の研究開発に向けた評価の場としても有意義な大会参加であった。

（生徒発表風景）

本校のＳＧＨの取り組みを英語で発表



北方領土問題の課題研究を発表

Ⅴ．課題研究外報告

１．高校生模擬国連

（１）参加推進

ＳＧＨ受講者１４５名に対し，高校生模擬国連開催，応募について説明を行った。説明会実施後，８名（４チーム）の参加申し出があり，１学校２チームエントリー制限があることから学内予選を実施することとなった。

（２）指導

①本年度のテーマが「サイバー空間」に関する内容となった。先ず，示された書物を読み解くことが条件となされており，また，英文によるレポートが課されていることから，国語科・地歴公民科・英語科の教員プロジェクト体制を敷いた。

②参加希望者８名に対し，前年度全国大会出場の高校２年生より，全国大会での様子や予選提出の書類に関する助言を行った

③１学校２チーム４名の参加しか出来ない為，４チームによるプレゼンテーションを行い，２チームを予選に登録した。

④２チームの内，１チームが予選を通過し全国大会に出場することとなった。全国大会用の提出物策定にあたっては，社会科・英語科が中心となり，また，北海道新聞社論説室に指導に加わっていただいた。

課題テーマを発表する本校生徒	参加者による議決風景

２．飛びたて留学ジャパンへ（第Ⅱ期）の参加について

（１）参加推進

ＳＧＨ受講者６９名に対し，飛びたて留学ジャパン事業の説明を実施した。詳細説明会には，４５名の生徒が参加し，学内予選を実施することとした。最終エントリー希望者は１８名となり，学内選考を実施し１０名に絞った。

ネパール医療体験に参加した本校生徒。左は体験レポート。

In Nepal, the number of hospitals is not many and transportation is not enough. So it is not rare that people die before they reach the medical institution. And also, there are many people begging money on the road.

Of course, medical progress is important. But first, it is necessary to get living environment and infrastructure in good condition.

（２）指導

提出書類は生徒が中心となり策定したが，留学先計画については，「異文化交流推進ネットワーク」に相談の窓口をお願いし，生徒が個々にアドバイスを受けた。

３．民間企業との連携

イオン株式会社が高校生の海外活動を支援する事業（イオン１％クラブ）が主催する，高校生交流活動に申請し，中国交流の高校代表として採択された。相互交流にあたっては，２０名の生徒が参加（平成２８年７月に本校訪問と１０月に北京・青海訪問）した。政府間の交流活動の体験により国交の重要さを学び，また，ホームスティ先では大変歓迎を受け，中国の珍しい料理を提供された。しかし，この料理が虫の幼虫や地中で生活しいる昆虫を料理したもので，本当の食文化と歓迎の生活習慣の相違を体験した。環境に慣れることの重要性を理解した様子であった。

（交流活動風景）

東京で来校生を出迎え	在中国大使館にて歓迎セレモニー	北京にてウェルカムパティー

平成２９年度も継続申請を行い採択されている。

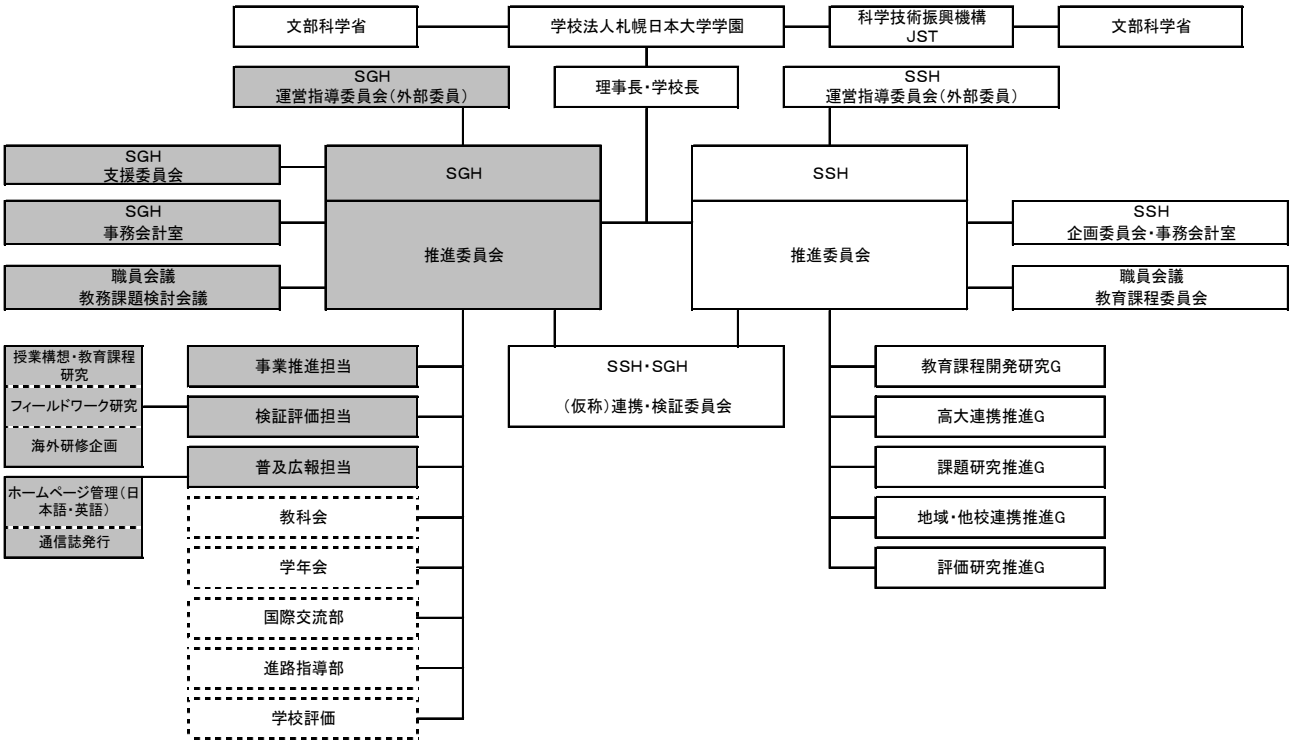
Ⅵ. 平成２８年度教育課程表

教　科	科　目	単位数	高1		高2(文)		高2(理)		高3(文)		高3(理)	
国　語	国語総合	4	◎	3								
	現代文B	4			◎	3	◎	3				
	古典B	4	◎	2	◎	2	◎	2				
	国語演習								◎	5	◎	3
地　歴	世界史B	4			○							
	世界史A	2	◎	2								
	世界史演習								○			
	日本史B	4			○	4						
	日本史A	2	○	2								
	日本史演習								○	8		
	地理B	4			○							
	地理A	2	○									
	地理演習								○		○	4
公　民	倫理	2										
	政経	2										
	現代社会	2			◎	2	◎	2				
	公民演習								○		○	
数　学	数学Ⅰ	3	◎	3								
	数学Ⅱ	4			◎	3	◎	4				
	数学Ⅲ	5									◎	7
	数学A	2	◎	3								
	数学B	2			◎	2	◎	2				
	数学演習								◎	5		
理　科	物理基礎	2	○	2								
	物理	4					○	3				
	物理演習										○	4
	化学基礎	2					◎	3	◎	2		
	化学	4										
	化学演習										◎	4
	生物基礎	2	○									
	生物	4					○					
	生物演習										○	
	科学と人間生活	2	◎	2								
	理科特講A				○							
	理科特講B				○	3						
	理科演習A								○	2		
	理科演習B								○			
保　体	体育	7～8	◎	2	◎	2	◎	2	◎	3	◎	3
	保健	2	◎	1	◎	1	◎	1				
芸　術	音楽Ⅰ	2	○	1	○	1	○	1				
	美術Ⅰ	2	○		○		○					
英　語	コミュ英語Ⅰ	3	◎	4								
	コミュ英語Ⅱ	4			◎	4	◎	4				
	英語表現Ⅰ	2	◎	2								
	英語表現Ⅱ	4			◎	2	◎	2	◎	2	◎	2
	英語演習								◎	5	◎	5
家　庭	家庭基礎	2	◎	1	◎	1	◎	1				
情　報	社会と情報	2	◎	1	◎	1	◎	1				
SGH 課題探求型学習	探求基礎	1	○	2								
	探求応用	1			○	2	○	2				
	探求発展	1							○	1	○	1
SSH 探求科学学習	SS基礎	1	○	2								
	SS発展	1			○	2	○	2				
	SS応用	1							○	1	○	1
総合学習	総合的な学習の時間	3～6	◎	1	◎	1	◎	1	◎	1	◎	1
特　活	LHR		◎	1	◎	1	◎	1	◎	1	◎	1
			35		35		35		35		35	

・探求基礎・応用・発展はSGHの研究開発に係る学校設定教科・科目　　◎は必須　○は選択

・SS基礎・SS発展・SS応用はSSHの研究開発に係る学校設定教科・科目

Ⅶ．ＳＧＨ・ＳＳＨ研究開発組織図



本校は，ＳＳＨ・ＳＧＨの指定高校であり，学園組織全体で両事業の取り組みを行なっている。ＳＳＨは今年５年を経過し再申請中である。ＳＳＨ事業で培った運営手法をＳＧＨにも活用し，学園全体の取り組みとして運営している。

受講する生徒は，高校１年生でＳＳＨ・ＳＧＨのいずれかを本格的に取組むコース（特進コース・中高一貫コース）と教科指導や全校での取り組みに参加する総合進学コースである。

ＳＳＨ・ＳＧＨ事業ともに，運営を主幹する組織の役割は同仕様としており，学内の混乱を防いでいる。

学園の理事会に於いても両事業の活動を報告し，貴重な意見を頂いている。

Ⅷ．フィールドワーク研修・海外研修・留学実績

１．国内フィールドワーク

（１）実施目的

探求基礎の課題研究である３研究課題を，フィールドワークを通じて調査する。

○世界規模の経済活動を，日本と北海道の対比を行いながら，北海道の現状の課題を探究。クリティカルシンキングの手法を体験する。

○国際観光都市北海道の価値を高めるため，調査研究（対外国人）を実施し，北海道観光へのニーズ調査からその課題を取り上げた課題探究（インタビュー）を行う。

○北方領土問題に関する歴史的背景，政治活動，現在の国交交渉についての課題を探究とする。

（２）研修先及び研修内容

①研修先

・公立大学法人　国際教養大学
・国立大学法人　長崎大学
・長崎市内観光地
・根室市

②研修内容

◆国際教養大学・長崎大学

・スーパーグローバル指定大学と連携し，海外大学進学や海外留学を目指すスキルの向上を図る。
・３泊４日の研究時間を，留学生・大学院生・学部生と共に研究活動や生活を通じて，異文化研究を行う。
・３泊４日の研修言語は英語を用いて，英語コミュニケーションの習得を図る。
・留学生に対して準備したインタビューを積極的に行い，諸外国の学生が持つ北海道に対する意識を調べる。
・英語によるクリティカルシンキングについて学ぶ。

◆長崎大学

・長崎大学多文化学部を訪問し，留学生と学部生に異文化理解について交流を図る。
・長崎大学多文化学部教授による，「移民と難民」が発生する基本たる要因（宗教・民族・経済など）を学ぶ。また，クリティカルシンキングについて説明を受ける。
・長崎へ観光に来ている観光客に観光目的のフィールドワークを実施。実施は，平和公園グラバー邸を予定。
・フィールドワーク調査用紙を策定した。

（長崎観光地フィールドワーク調査用紙）

2016年　SGH国内フィールドワーク旅行調査

質問内容	回答内容
1. どちらから長崎に見えたか	国内(　　)・海外(　　)
2. 長崎に来られた目的は	観光 ・ ビジネス ・ 視察 ・ その他(　　)
3. 性別	女子 ・ 男子
4. 年代	高校生 ・ 大学生 ・ 社会人(　　歳)
5. 同行形態	一人旅 ・ 恋人との旅行 ・ 家族旅行 ・ 友人との旅行 ・職場での団体旅行 ・ その他(　　)
6. どのような観光施設に行かれるのか	(聞き取り)
7. 今回の旅行の費用総額	(聞き取り)
8. 今回の旅行日数	(聞き取り)
9. 長崎で魅力的であった観光施設を教えてください	(聞き取り)
10. 長崎のお土産・特産品を教えてください	(聞き取り)
11. 若者が楽しめるスポットや施設・体験を教えてください	(聞き取り)

12. 大人が楽しめるスポットや施設・体験を教えてください	(聞き取り)
13. 小人が楽しめるスポットや施設・体験を教えてください	(聞き取り)
14. 今回の旅行で消費額について教えてください(飲食費・お土産・施設での費用)	(聞き取り)
15. どのような広告媒体を見て長崎を選ばれましたか(テレビ・ネット・新聞・DM・(　　)	(聞き取り)
16. 今回の旅行はどこで申し込みをされましたか	旅行代理店 ・ 個人で各機関に申し込んだ
17. 申し込み方法について伺います(インターネット・旅行代理店の窓口・その他)	インターネット・旅行代理店の窓口・その他
18. 北海道について伺います	
(1)北海道のイメージを教えてください	(聞き取り)
(2)北海道の観光地を知っていますか	(聞き取り)
(3)北海道の特産品を知っていますか	(聞き取り)
(4)北海道に行かれた経験はありますか	なし ・ あり 行かれた方に,リピートしたいですか はい ・ いいえ
(5)北海道に行ってみたいですか	はい ・ いいえ
(6)北海道に行く場合の季節は	春 ・ 夏 ・ 秋 ・ 冬
(7)北海道の広さがわかりますか	わかる・だいたいわかる・わからない
(8)北海道へ行かれる場合の交通機関は(飛行機・鉄道・船舶・車)	飛行機 ・ 鉄道 ・ 船舶 ・ 車

・軍艦島を調査。元々は炭鉱であった島が，どのような経緯で観光スポットによみがえったのかを，北海道の夕張炭鉱と比較して調査する。

◆根室市

・北方領土から追われて移住している元島民に対する，返還問題の課題調査

（３）研修団

①公立大学法人　国際教養大学　３９名

②国立大学法人　長崎大学　２２名

③根室市　１５名

（４）研修行程

①国際教養大学

月日		行程表	活動
第１日	８月１日	飛行機：新千歳空港→秋田空港	留学生・大学院生・学部生
		バス：秋田空港→国際教養大学	
		バス：国際教養大学→市内ホテル	
		着後　大学見学・留学生との交流	
第２日	８月２日	バス：市内ホテル→国際教養大学	留学生・大学院生・学部生
		バス：国際教養大学→市内ホテル	
		終日　グループワーク	

第３日	８月３日	バス：市内ホテル→国際教養大学	留学生・大学院生・学部生
		バス：国際教養大学→市内ホテル	
		終日　グループワーク	
第４日	８月４日	バス：市内ホテル→国際教養大学	留学生・大学院生・学部生
		バス：国際教養大学→秋田空港	
		飛行機：秋田空港→新千歳空港	

②長崎大学・長崎観光地

月日		行程表	活動
第１日	８月６日	飛行機：新千歳空港→長崎空港	観光客へのインタビュー
		バス：長崎空港→長崎市内	
		バス：公共交通機関	
		着後　平和記念公園にてインタビュー	
第２日	８月７日	バス：公共交通機関	グラバー園での観光客インタビュー
第３日	８月８日	バス：公共交通機関	留学生・大学院生・学部生へのインタビュー。大学教授による異文化（移民・難民問題）提議
第４日	８月９日	バス：長崎市内→長崎空港	
		飛行機：長崎空港→新千歳空港	

③根室市

月日		行程表	食事
第１日	８月１３日	飛行機：新千歳空港→中標津空港	根室市
		バス：中標津空港→根室市内	
第２日	８月１４日	バス：バスチャーター	北方領土復帰期成同盟と合同活動・元島民インタビュー
第３日	８月１５日	バス：バスチャーター	北方領土復帰期成同盟と合同活動・地元住民インタビュー
第４日	８月１６日	バス：市内ホテル→中標津空港	
		飛行機：中標津空港→新千歳空港	

（５）研修報告

①国際教養大学

・留学生に積極的にインタビュー（北海道・日本文化・国の文化）を行うことを課題に掲げフィールドワークを実施した。予め準備していったインタビュー内容を英語でチャレンジした。最初の会話はやりとりが出来ていたが，話が進むに連れて会話が続かなくなる状況であった。

・食事などの日常会話は，積極的に行っていた。
・プレゼンテーションテーションは，グループ毎の留学生の国に関する文化の発表を行った。留学生に手助けをしていただき，何とか英語で発表ができる状況となった。生徒は，当初はかなり苦戦を強いられていたが，だんだんと慣れてくるに従って，プレゼンテーション資料の作りも工夫されるようになった。
・クリティカルシンキングを学ぶ目的で訪問した。グループ構成は，留学生・大学院生・学部生であった。プログラムは大学が用意したものを研究した。

（活動風景）

グループ毎に活動
留学生，大学院生との交流

１グループに留学生・大学院生・学部生の構成。

②長崎大学・長崎観光地

・長崎大学には，異文化理解，クリティカルシンキングなどを学ぶ目的で訪問した。グループ構成は，留学生・大学院生・学部生であった。プログラムは大学が用意したもので，本校の生徒が準備した研究発表を使用し，意見交換を行なった。
・クリティカルシンキングの説明では，初歩的な意味を理解するところからスタートし，批判的思考の持ち方を，多様なレッスンを通じて体験した。
・長崎大学の先生による，移民，難民問題について提言がなされ，生徒は日本の取り組みの問題点と課題を検討した。
・長崎観光地にて，観光客に長崎を訪問した理由，北海道の観光地について調査を行なった。外国人は中国の方が多く，英語が通じないこともあり，生徒はかなり苦労した調査となった。

（活動風景）

長崎大学多文化社会学部

移民・難民について講義を受ける

③根室市

・根室市における北方領土返還への問題点，課題の調査

・元島民へのインタビューを通じて，当時の歴史認識の確認及び問題点を確認した。

・根室市には，元島民の方が多く住まれていることで，返還運動に関する意識の違いを感じていた。

（活動風景）

元島民の方から，当時の状況を聞き入る生徒

北方四島の現在の写真を見る生徒。数少ない現地状況

２．海外フィールドワーク

（１）実施目的

本研修はマレーシア・シンガポールでのフィールドワークを通して，多文化社会において，「自我の確立・多様性の受容・普遍性への気づき」の IB 精神のもと，世界規模の視点にたって，グローバル化社会の課題を自らの問題意識から発見し，多角的に検証を行い，責任ある地球市民として多様性ある行動と発信を行える人材育成のためのフィールドワークを実施するものである。

（２）研修先及び研修内容

日本との文化の違いを理解する目的で，現地企業・大学・高校や住民に対するフィールドワークを実施し，宗教観，民族観，文化や暮らしの相違を体験する。

（３）現地高校・大学・企業訪問

①マレーシア

ア）クアラルンプール市内フィールドワーク

市内の宗教施設を訪問し文化の相違を調査。日本との物価を比較する調査を実施する。

イ）ベルジャヤ大学交流

観光学を学ぶ学生と交流し，マレーシアの観光事業と北海道の観光事業を調べる。

ウ）マラッカ観光地フィールドワーク

マラッカの歴史から建造物を利用した観光地への発展を調査する。

②シンガポール

ア）シンガポール市内（アラブストリート，チャイナタウン他）

宗教・民族によるミニタウンを訪問し，他国籍国家の形成を調査する。また，食文化を調査することで，日本との暮らしを調べる。

イ）シンガポール博物館

ウ）NEWater Visitor Centre　ニューウォータービジターセンター

シンガポールのリサイクルウォーター（ニューウォーター）について学ぶ施設を見学。国土も狭く，資源もない国で，水も隣国マレーシアから購入している実態を調査する。

エ）ＡＳＥＡＮシンガポール事務所

今回は，その事務所を訪問し，商流，物流の構築に向けた事業展開支援機能，北海道ブランドの発信，浸透機能，輸出拡大や誘客の促進等を支える道内法人向けデスク機能，情報収集及び発信機能などの役割と実績を調査する。

オ）ダンマン　ハイスクール高校

高校生との交流。本校生徒が準備していた北海道紹介を行なう。

・「日本から見たシンガポールの観光について」アクティブティ・ディベート

・生徒同志によるキャンパスツアー

・交流ランチ

カ）日本法人企業訪問

・キッコーマン　シンガポール支店を訪問し，外国への進出を学ぶ。

（４）研修団

引率　副校長・教員１名　参加者生徒　男子４名・女子９名

（５）研修行程

平成２９年　３月２２日（水）～３月２８日（火）　６泊７日

月日(曜)	地　名	現地時刻	実施内容
３／２２(水)	新千歳空港集合 新千歳空港発 成田空港着 成田空港発 クアラルンプール着 ホテル着	１２：３０ １４：０５ １５：５５ １７：１５ ２３：５５ （専用バス） １：３０頃	移動日 クアラルンプール到着後宿泊ホテルへ
３／２３（木）	クアラルンプール	０９：３０ ↓ １２：３０ １４：３０ ↓ １７：１５	・午前 現地大学生とクアラルンプールフィールドワーク（グループ活動） ・午後 ベルジャヤ大学訪問。日本の文化，北海道観光地ニーズ調査
３／２４（金）	クアラルンプール ↓ マラッカ ↓ ↓ シンガポール入国 ↓ ホテル	０８：００ ↓ １０：００ １４：３０ ↓ １７：３０ ↓ ２１：００	・午前 マラッカ観光地調査 ・午後 マラッカ観光地調査 ・夜間 ガーデンズバイザベイ観光地調査

３／２５（土）	シンガポール市内	０８：００ ↓ １８：００	・国立博物館 ・ニューウォーター ・ＡＳＥＡＮシンガポール
３／２６（日）	シンガポール市内	０８：００ ↓ １８：００	・現地大学生とシンガポール市内フィールドワーク（グループ活動）
３／２７（月）	シンガポール市内	０８：００ ↓ １８：００	・ダンマン　ハイスクール訪問 ・キッコーマン　シンガポール支店
３／２８（火）	シンガポール発 成田空港着 成田空港発 新千歳空港着 解散	００：３５ ０８：４５ １０：００ １１：４５ １２：１５	

（６）研修報告

ア）他民族家に於ける宗教と生活の関わり，計画的な観光開発，自然が創り出す観光事業など，北海道との違いを学んだ。

イ）大学・高校交流を通じて，同世代の考え方を学んだ。

ウ）企業訪問を通じて国際化社会での企業の位置付け，雇用者の実態など企業活動を学んだ。

このような活動を通じて，他国との文化の相違点や生活文化の異なりを理解させ，環境適応力を育成することができたと考えている。

①異文化研究　フィールドワーク

・クアラルンプール市内，シンガポール市内を現地大学生１名と本校生徒４名で１グループを構成し，フィールドワークを実施した。事前研究で，フィールドワーク内容（ホーカーズに代表される食文化・宗教がもたらす街づくり・交通機関・教育施設など）がもたらす国の生活を調査した。

●クアラルンプール市内　フィールドワーク　午後２時出発　午後５時帰着

・３グループに別れ，次の経路でフィールドワークを実施。

【Ａグループ】

マスジット・ジャメ　⇒　チャイナタウン　⇒　セントラルマーケット

【Ｂグループ】

スルタン・アブドゥルサマド・ビル　⇒セントラルマーケット　⇒　チャイナタウン

【Ｃグループ】

チャイナタウン　⇒　スリ・マハ・マリアマン寺院　⇒　セントラルマーケット

・各グループともに，事前学習の計画に基づきコミュニケーション良く調査を進めることが出来た。

●シンガポール市内　フィールドワーク　午前１０時出発　午後５時帰着

・３グループに別れ，次の経路でフィールドワークを実施。

【Ａグループ】

アラブ人街　⇒　チャイナタウン　⇒　リトルインディア

【Ｂグループ】

チャイナタウン　⇒　リトルインディア　⇒　アラブ人街

【Ｃグループ】

リトルインディア　⇒　アラブ人街　⇒　チャイナタウン

・各グループともに，事前学習の計画に基づきコミュニケーション良く調査を進めることが出来た。

・生徒の調査方法は，三つの地域で同じ質問を行い，民族ごとにどのように回答が異なるかを調査したものである。

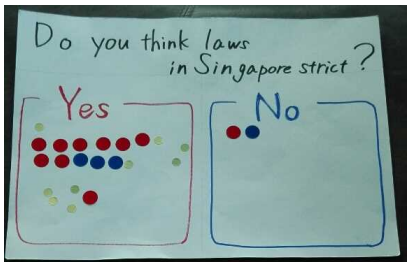
・質問は,「北海道を知っているか」「北海道で有名な食べ物」「北海道に行きたいか」等、北海道への観光誘致ついての質問であった。

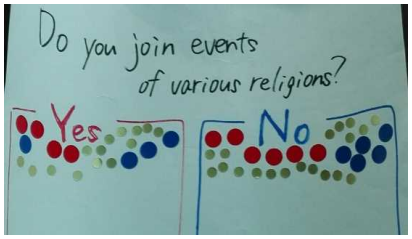
【今回のテーマ：他民族国家・宗教に暮らす国での生活文化調査】

<table>
<tr><th></th><th>フィールドワーク参加者</th><th>フィールドワーク否参加者</th></tr>
<tr><td>事前
（共通）</td><td colspan="2">1）探求基礎（高校１年７７名）受講者を１０のグループに分ける
2）１０のグループに対して，次の４テーマについて調査項目を検討させる。
「マレーシア文化について調査する具体的質問」
「シンガポール文化について調査する具体的質問」
「両国共通で，北海道の関する意識調査」
「高校交流で調査する具体的質問」
の４テーマについて，５０分×４コマを与え，振り分けたグループ毎に調査内容を取り上げる。
3) 各グループで策定されたものを，フィールドワーク参加者が取りまとめる，調査内容を確定する。
4）実施にあたり，策定した調査の書式と結果
・出発前

・調査後</td><td>紙芝居形式に調査項目を策定し，
・チャイナタウン
・アラブストリート
・リトルインディア
・中心地
の４箇所で同一質問を行った。

色付シールを用いて，どこの地域での回答かを分けることで，地域特性を調べた。</td></tr>
</table>

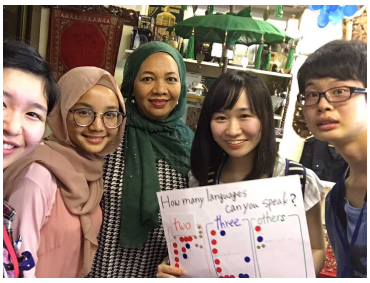
<table>
<tr><td></td><td>
<table>
<tr><td>


・調査後


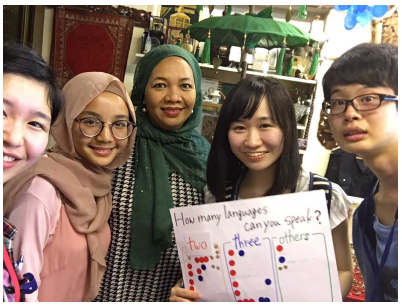
</td><td></td></tr>
</table>
</td></tr>
<tr><td>実施
３月２６日</td><td>・実施風景
（シンガポール　オーチャード通り）

・現地大学生の協力
（出発前打ち合わせ）

・アラブストリートにて</td><td>・調査時間　午前１０時～午後５時。宿泊ホテル出発帰着。
・連絡用に携帯電話を持たせる。
・４名，４名，５名の３グループを構成し，各グループに現地大学生１名の協力を仰ぐ
・４つの地域へは，地下鉄・バスを使い移動する。
・調査地域では，大学生の力を借りず，生徒がアプローチを行なう。
・昼食はグループ毎に行なう。</td></tr>
</table>

		
事後 （共有）	1）参加者による調査の資料づくり 2）参加者による調査の分析 3）参加者による結果報告	

（フィールドワーク風景）

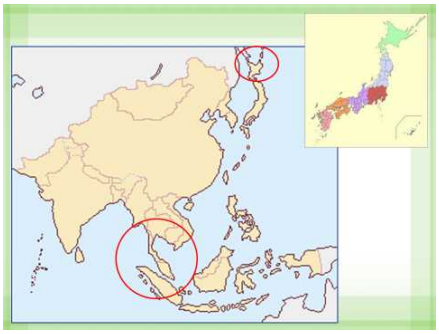
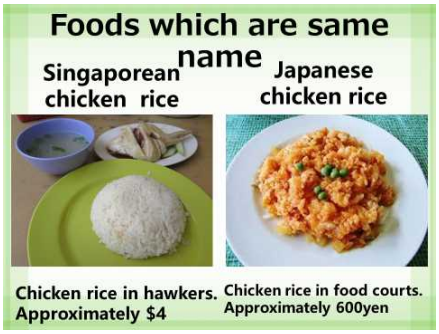
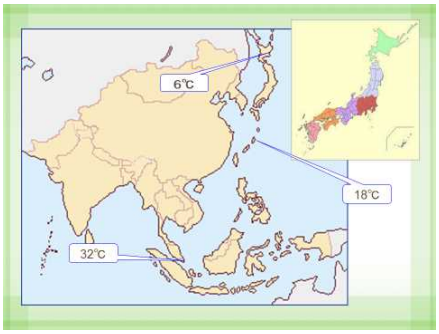
②高校訪問

・ダンマン　ハイスクールの生徒が準備した歓迎セレモニーから交流が始まり，活発な活動となった。本校生徒が準備した「日本文化の紹介」「シンガポールの高校生を北海道へ誘致」する企画書２点をプレゼンテーション。雪に対する意見交換，自然大地，国土の大きさなどが話題となり，交流を行った。

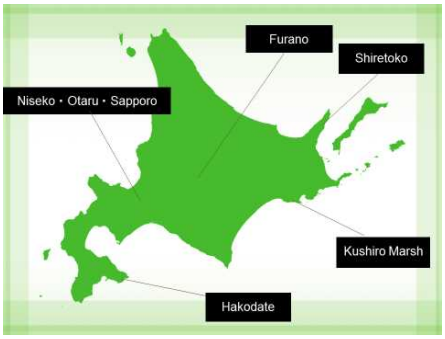
・昼食は，現地の屋台へ両校生徒が訪問し，東南アジアの食文化である屋台を体験した。多様な民族が暮らす国であり，食文化の多様性を一様に驚いていた。

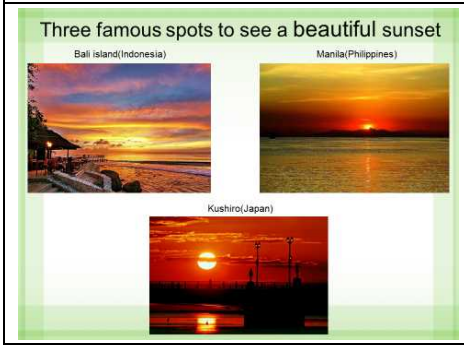
【以下は生徒のダンマン　ハイスクールでのプレゼンテーション　資料】

パワーポイント資料	説明の主旨

	The size of Malaysia is approximately 330000km^2, which is about 90% the size of Japan. The size of Singapore is about 719 km^2, which is as almost big as Tokyo. It is the map that shows Japan,Malaysia and around area. We come from that circle area. The size of Japan is 500 times that of Singapore. The size of Japan is little larger than that of Malaysia. The population of Japan is about 120 million.
	Both of the plates are called chicken rice, however they look totally different. As you know,Singapore's chicken rice is "Chicken and rice". But Japanese chicken rice is mixed small cut chicken and tomato ketchap. Wow,it is interesting.
	Food Courts in Singapore and Japan. You often go to the Hawkers. There are places similar to Hawkers in Japan. It is not usual for most Japanese people to go out to eat. We sometimes go there.
	Look at this picture. This is temperature of Singapore in this morning, And this is it of Okinawa where is the southernmost area in Japan. And this is it of Sapporo where is the northernmost area in Japan.
	We would like to compare the temperatures of Sapporo to those of Singapore. Japanese climates are each different where there are. because of changes of temperatures, there are four season in Japan.

	Beautiful cherry blossoms called Sakura are beautiful in spring. We enjoy eating and drinking under the tree. It is called “Hanami”
	Incredible fireworks called hanabi are popular in summer. You can see more than 10,000 fireworks. Summer festival called “Natsumatsuri” held all over Japan.
	Colorful leaves are beautiful in autumn. It was green in summer, it turn to red and yellow.
	We have a lot of snow in winter. We usually have a lot of snow only in the northern parts of Japan. Winter is the longest of the four seasons. Small snow houses called kamakura can be made in winter. There are a lot of famous ski resorts in Hokkaido. one of the most famous winter festival is Sapporo snow festival. We can see large statues made of snow.
	This is our school. In winter we have a meter of snow in the field right next to our school.

	The capital of Japan is Tokyo. Mt. Fuji can be seen from Tokyo when the weather is fine. There is a beautiful suspended bridge in Tokyo. Its name is Rainbow Bridge. Tokyo Disney Resort is located in Chiba prefecture, right next to Tokyo.
	On New Year's day, people go for "hatsumode". This means visiting a temple or a shrine so that you will be able to spend the entire New Year healthily. The Meiji Shrine is one of the most popular shrines in Japan There is in Tokyo
	Kimono, a type of traditional Japanese clothing. Both men and women wear it especially for ceremonies. We wear yukata when we go to the summer festival
	Japanese uses three types of character : Kanji, Hiragana and Katakana. Kanji means chinese characters, but we can't speak chinese.
	I would like to introduce Hokkaido. Many people visit Hokkaido for sightseeing, in order to see the national parks and other beautiful scenery.

	We live in Hokkaido. Winter in Hokkaido usually lasts for six months. Sapporo Snow Festival is one of the biggest events there in winter. Summer is the best season. We can see the beautiful flowers. We have a lot of dairy cattle in large fields. We can drink fresh milk. This is Sapporo Snow Festival. This is Ice Word in Susukino at same time. This is sun flower’s field in Hokuryu. This is Sapporo Clock tower.
	By the way, do you know Otaru? Otaru is the oldest city in Hokkaido. It is famous for its canal built about 90 years ago, which helped a lot to develop Hokkaido and carry many kinds of thing.
	These pictures are lavender fields in Furano. (so beautiful place!) Next, these pictures are Shiretoko. Shiretoko is natural heritage. There are many wild animals. We can see beautiful stars in the clear sky.
	There are three famous spots to see a beautiful sunset. One of them is Kushiro in Hokkaido. The other two spots are Indonesia and Philippines.

	There are many hot springs in Hokkaido. Wherever you go, you will be able to find good hot springs. I have a question. What is this sign? It is the sign of a hot spring.
	But Japanese goverment will rivise the new sign. These pictures are outdoor bath. Japanese called roten buro.
	Japan and Hokkaido is good place. You must came and see. Thank you for listning to our presentation.

（高校交流の風景）

 学校到着後両校生徒による記念写真	 両校生徒による記念品交換。両国の文化色を伝える
 本校生徒による，両国の食事についてプレゼンテーションを実施	 グループ毎になり，学校の紹介，食事や生活の違いを話し合う

③企業訪問

ア）キッコーマン　シンガポール支店

日本企業がシンガポールでどのような位置づけで活動しているのかを考えた。

イ）北海道 ASEAN シンガポール支店

北海道 ASEAN シンガポール支店の役割と現状の課題について説明を受けた。質疑の時間をいただき，６名の生徒が課題について意見を述べた。

ウ）JTB マレーシア支店

アセアン地域から日本観光として訪問する顧客の獲得を目指している。北海道は日本の中でもトップクラスの人気であることの説明を受ける。

エ）ニューウォーター

シンガポールの下水道処理法人。水資源が少ないシンガポールでは，水の再利用の研究が進んでいる。水資源の豊富な日本と比較することで，国の資源問題を考えた。

<table>
<tr>
<td>
JTB マレーシア支店でアセアン地域からの観光客の説明を受ける</td>
<td>
北海道 ASEAN シンガホール支店の役割について説明を受ける</td>
</tr>
<tr>
<td>
キッコーマン　シンガポール支店で支店長より説明を受ける</td>
<td>
ニューウォーターで担当者より英語で説明を受ける</td>
</tr>
</table>

④総括

ア）英語の発音が聞き取りにくい生徒が多数いた。中国語なまりの発音やスピードに不慣れであったことが特徴的であった。日ごろの発音に慣れていたことが影響していると考えられる。地域によって英語の発音が異なることを理解したようだ。

イ）食文化の違いに戸惑う生徒も多かった。また，北海道と異なり気候の影響も戸惑いがあった。(氷点下の気候から３０度近い気候と湿度の国での対応できない生徒が多く発生した)

ウ）高校交流ではダンマン　ハイスクールの生徒と両国の歴史，観光，教育について積極的に交流を交わすことができた。また，ダンマン　ハイスクールの生徒に，北海道の観光についてプレゼンテーションを実施。

エ）フィールドワークでは，現地大学生と一緒に「北海道に観光客を集める」ための市場調査として，それぞれの地域におけるニーズの調査を実施した。
オ）国境をバスで通過する際，マレーシアからシンガポールの工場に働きに通勤する多くの社会人に出会ったことが，生徒にとり新鮮であり，グローバル化を実態として痛感することができた点であった。

３．海外研修・留学（平成２８年度）

（１）課題研究に関する国外の研修参加者数

研究開発単位名	渡航期間	渡航日数	国（地域）	滞在都市	連携（受入）機関等	生徒（人）
北海道の産業課題を世界視点で捉え，解決に導くグローバル人材を育成する。	２０１７年 ３月２２日～ ３月２８日	７	マレーシア シンガポール	クアラルンプール シンガポール	・ベルジャヤ大学 ・マレーシア大学生 ・ASEAN シンガポール事務所 ・シンガポール大学生 ・ダンマン　ハイスクール ・キッコーマンシンガポール支店 ・ニューウォーター ・ヤクルトシンガポール支店 ・JTB シンガポール支店	１３
	２０１７年 ２月７日～ ２月１６日	１０	オーストラリア	シドニー・メルボルン	・ヘルブリィカレッジ（姉妹校）	７６

（２）自主的に留学又は海外研修に行く生徒数

目的	渡航期間	渡航日数	国	滞在都市	連携機関等	対象生徒（人）	対象外生徒（人）
海外研修	２０１６年１０月９日～１０月１７日	１２	中国	北京・青島	・中国外交部 ・青島大学 ・ＡＰＥＣ会議センター ・青島市第２高校 ・在中国日本大使館	１６	4
海外研修	２０１６年７月１８日～８月１５日	２９	フィリピン	マニラ	・ＴＩＭＥＳ－ＳＬＣ	1	
海外研修	２０１７年１月２１日～１月２９日	9	フィリピン	マニラ	Makati Science Highschool	1	
海外研修	２０１６年７月３１日～８月２８日	２９	カンボジア	プノンペン	プロジェクトアブロード	1	
海外研修	２０１６年７月２４日～８月２１日	２９	ネパール	・カトマンズ ・チトワン	プロジェクトアブロード	1	
海外研修	２０１６年７月２９日～８月１８日	２１	ニュージーランド	ウェリントン	NZLC ウェリントンキャンパス	1	
海外研修	２０１６年７月２３日～８月１４日	２３	アイルランド	ダブリン	National Museum of Ireland		1
海外研修	２０１６年３月１７日～３月２６日	１０	オーストラリア	・メルボルン ・ウロンゴン ・シドニー	・イラワラグラマースクール ・ヘイルブリィグラマースクール		１９
海外研修	２０１６年３月１８日～３月３０日	１３	英国	ケンブリッジ大学	・ケンブリッジ		2
海外研修	２０１６年７月１８日～	１７	英国	ケンブリッジ大学	・ケンブリッジ		2

	８月４日						
留学	２０１６年 ８月１４日～ ２０１７年 ７月１０日 予定		カナダ	スコーミッシュ	HoweSound Secondary school	1	
留学	２０１６年 ８月２０日～ ２０１７年 ８月１日 予定		米国	テキサス州 モンテズマ	UWC-USA Armand Hammer United College of the American West	1	
留学	２０１６年 ８月１６日～ ２０１７年 ７月２０日 予定		米国	テキサス州 ギルベストン	Ball high school	1	

Ⅸ．生徒論文集（フィールドワーク論文）

「北方領土問題の歴史的事実と，解決に向けての根室市付近での取り組みについて」

１年１０組　尾先由崇

第１章　北方領土問題の歴史的事実認識[条約別にまとめる]

日魯通好条約（１８５５年）

日本は，ロシアよりも先に北方領土を発見・調査し，遅くとも１９世紀初めには四島の実効的支配を確立していた。１９世紀前半には，ロシア側も自国領土の南限をウルップ島（択捉島のすぐ北にある島）と認識。日露両国は，１８５５年，日魯通好条約において，当時自然に成立していた択捉島とウルップ島の間の両国国境の合意。

樺太千島交換条約（１８７５年）

日本は，樺太千島交換条約により，千島列島（＝この条約で列挙されたシュムシュ島（千島列島最北の島）からウルップ島までの１８島）をロシアから譲り受けるかわりに，ロシアに対して樺太全島を放棄した。

ポーツマス条約（１９０５年）

日露戦争後のポーツマス条約において，日本はロシアから樺太（サハリン）の北緯５０度以南の部分を譲り受ける。

大西洋憲章（１９４１年）及びカイロ宣言（１９４３年)における領土不拡大

１９４１年８月，米英両首脳は，第二次世界大戦における連合国側の指導原則ともいうべき大西洋憲章に署名し，戦争によって領土の拡張は求めない方針を明らかにする（ソ連は同年９月にこの憲章へ参加を表明)。　また，１９４３年のカイロ宣言は，この憲章の方針を確認しつつ,「暴力及び貪欲により日本国が略取した」地域等から日本は追い出されなければならないと宣言しました。ただし，北方四島がここで言う「日本国が略取した」地域に当たらないことは，歴史的経緯に基づいても明白であると我が国は主張している。

ポツダム宣言（１９４５年８月受諾）

ポツダム宣言は,「暴力及び貪欲により日本国が略取した地域」から日本は追い出されなければならないとした１９４３年のカイロ宣言の条項は履行されなければならない旨，また，日本の主権が本州，北海道，九州及び四国並びに連合国の決定する諸島に限定される旨規定している。しかし，当時まだ有効であった日ソ中立条約（注）を無視して１９４５年８月９日に対日参戦したソ連は，日本のポツダム宣言受諾後も攻撃を続け，同８月２８日から９月５日までの間に，北方四島を不法占領。これら四島の占領の際，日本軍は抵抗せず，占領は完全に無血で行われた。

サンフランシスコ平和条約（１９５１年９月）

日本は，サンフランシスコ平和条約により，ポーツマス条約で獲得した樺太の一部と千島列島に対するすべての権利，権原及び請求権を放棄した。しかし，そもそも北方四島は千島列島の中に含まれていない。また，ソ連は，サンフランシスコ平和条約には署名していないことから，同条約上の権利を主張することはできない。

２章　根室周辺での北方領土問題への取り組み調査

北方領土問題を解決するに当たって，多くの取り組みが近年行われており，今回の根室研修でも，それらに関する多くの資料を目にした。その取り組みの１つが，「ビザなし交流」である。

このビザなし交流とは，平成４年から始まった，日本国民と北方領土に住むロシア人住民との訪問交流のことである。この交流は，パスポートとビザなしでの渡航が認められていることから，「ビザなし交流」と呼ばれている。日本とロシアの間で，未だ解決されていない領土問題が解決するまでの間，日本国民が，北方四島を訪れ，北方四島のロシア住民が日本を訪問することにより，双方理解と友好を深めることを目的に行われてきた。この「ビザなし交流」をすることによって，実際の領土問題解決に繋がるのかといったら，それは違うが，交流を持続することによって，両国民どうしが，理解を深めることに繋がっているというのは，事実であろう。より多くの人が，この「ビザなし交流」に参加することで，より多くの人の理解を深めることができるであろうが，残念ながら「ビザなし交流」に参加できる人は，下記の者に限られている。

①北方四島に移住していた者
②北方領土返還要求運動関係者
③報道関係者
④訪問の目的に資する活動を行う各分野の専門家

これらの人は，北方領土問題に大きく関係しているのだから，「ビザなし交流」に参加する資格があることは確かである。しかし，これらの人には，すでに領土問題に関するたくさんの知識があり，それぞれが，はっきりとした北方領土への思いを持っているはずである。この領土問題への新たな関心を深めていくのなら，北方領土問題をこれまであまり考えていなかった一般国民を対象にすることも，これまでよりも多くの人に，北方領土問題について考えてもらい，関心を持ってもらうという狙いに繋がるのではないだろうか。多くの人に，北方領土問題への関心を深めてもらうためにも，「ビザなし交流」の対象を広げていくべきだと私は考える。

～ビザなし交流の成果～

ビザなし交流が始まるまで，北方四島に住むロシア人が，日本や日本人に対して間違った印象を持ったり，日本が主張している内容を知らなかったという事例も多くあったようである。しかし，ビザなし交流が始まったことで，日本人とロシア人との直接対話が実現し，日本の文化や家庭に直で接したことで，両者の誤解がなくなり，北方領土問題についての日本の主張も，多く伝わってきているようである。

３章　北方領土問題啓発施設の趣旨の違い（課題）

今回の研修では，根室市内周辺の多くの，北方領土問題に関する施設を訪れたが，その施設の中でも印象が強かった「ニ・ホ・ロ　北方四島交流センター」について取り上げる。名称の二・ホ・ロは日本とロシアをつなぐ北海道の交流拠点を意味している。この施設は，北方領土問題についての世論を盛り上げるために北方四島に移住するロシア人たちと日本人との交流拠点になっており，展望室からは，国後島や，知床半島を望むことができ展望室では北方領土の歴史や現状を映像などで学ぶことができる施設となっている。この施設には，ほ

かの施設とは，大きく異なった点がある。それは，展示物の半分が，ロシア関連のものであるということに加え，「北方領土を返せ」などといった，ほかの施設や，根室市内のいたるところで見かけた，このような表記の啓発物がないということだ。これは，あくまでも，ニホロがロシアとの交流拠点となっているからであろう。北方館や別海北方展望塔などの施設は，北方領土返還というのが，建設の意図となっているため，あくまでも，日本視点での，北方領土問題の発生時の状況や，歴史的経緯をテーマとした展示となっているのだ。領土問題を解決に導こうと考えている，返還運動者たちは，これらのような展示や，街の中で当たり前のように目にする「返せ，北方領土」といった啓発物をつくっているのだろうが，これを初めて目にしたとき，私は，良い気持ちにはなれなかった。

これらのような啓発物によって，より多くの人に，北方領土問題への関心を持ってもらうというねらいであろうが，これをもしロシア人が見たら，どのような思いになるのだろうか，と考えると恥ずかしくなる。確かに，元島民の方にしたら自分たちの生まれ育った地から追い出されて今に至るのだから，「返せ」という思考をすることは仕方ないことだと思う。しかし，北方四島の実効支配は始まってから，すでに７０年以上がたっている。ということは当然，北方四島で生まれ育った，ロシア人も存在するのだ。つまり，元島民にとって北方四島が故郷であるように，そこで生まれたロシア人にとっても，北方四島が故郷なのだ。そんな「現実」の中で，この領土問題を解決していくにあたって，「返せ」というような考え方の啓発物や，施設は時代遅れではないかと感じた。これから，領土問題を解決していくに当たって，一番大切なことはロシアと日本が互いの主張を理解し，お互いの利害関係を考えた上で，今までとは違った，新たな解決策に導くことであると私は考えている。その一歩として，「ニホロ」のような，ロシアとの交流を深めることで，領土問題への理解を深めようという考え方が必要なのである。実際，自分もニホロを訪れて，ロシアへの考え方が少し変わった。より多くの日本人とロシア人が，ニホロを訪れて，両国への理解が深まってほしいと思う。

４章　元島民インタビューを通して

今回の研修では，元島民の話を直接聞く機会があった。講話そのものは，北方四島の歴史や，どのような経緯で領土問題に発展したのか，その時の島の様子などであった。いままで，自分が認識していた内容とは事実が異なっていたというものもたくさんあった。おそらく，自分が認識している内容は，返還運動の資料や，メディアなどから得たものであると考えられる。メディアや資料は，全て正しいと考えがちだが，それは間違っていることもある。特に返還運動のために作られた資料は，ほとんどが日本の有利なようにつくられているに決まっている。今ある資料や，メディアからの情報をなんでも正しいと思うのではなく，ほんとうの事実をしっている元島民の話をきくことで，正しい知識をつけ，多くの人に領土問題への関心を深めていってほしいと思った。だが，元島民の方の平均寿命はすでに８０代を超えている。多くの人に，伝えるのにも無理がるのだ。そこで私たちのような，元島民から直接お話しを聞いた人たちが，ほかの人たちに正しい情報を広めていくことが重要なのだと改めて思った。

５章　研修を通しての課題解決施策

私は，通常の SGH の時間に学んだ内容で北方領土問題について十分理解した気でいたが，

そうではなかった。今回の根室研修をとおして，さらに多くのことを学び，多くのことを考えることができたのだ。それは単なる歴史的事実なのではなく，北方領土問題解決にむけての取り組みのあり方という面である。いままでの学習では，「より多くの人に，この領土問題に関心を持ってもらうためにも，PR をしていかなければいけない」というような考えに納得していたが，今回の研修を終えて，はたしてその考え方が，本当に領土問題を解決していくに当たってふさわしいのかという疑問に変わった。元島民を中心とした返還運動をされている方たちのしていることは，大変素晴らしいことであり，誰かがしなくてはいけないことであるが，その返還運動が，現実に見合っているのか，というとそれは別の問題である。返還運動をしているひとたちの，根には
あくまでも，自分たちがもともと住んでいた島なのだから，返されて当たり前だという大きな思いがある。それは事実なのだから，仕方がないことであるが，これから領土問題を解決していくのなら，「現実」に見合っていなければいけない。あくまでも，「返せ」という考えではなく，「自分たちもまた北方四島に住みたい」「同じ島を大切にするものどうし」の理解を十分に深めることが重要なのだ。そんな考えが根となった，返還ではなく，解決運動がこれから行われていってほしいと思った。

最後に，今回のような，様々な施設を訪問し，北方領土問題に対して理解を深めることができたのも，元島民や，返還運動をされている方たちのおかげです。改めて感謝しております。今回の研修や，いままでの学習が無駄にならないように，これからは，私たち高校生としてできることをそれぞれ考え，実行していきたいと思いますし，より多くの人が，他人事ではなく，自分たちの領土問題という認識を持ち，関心を高めていくことに貢献したいと考えています。」
ありがとうございました。

「北方領土周辺地域における北方領土問題の取り組みについて」

１年１３組　杉原葵衣

１．根室市における北方領土問題の取り組みについての調査

今回のフィールドワーク中，様々な施設を見学することで，北方領土問題に対する根室市の人々の考えを知ることができた。

根室市には，北方領土と近いこともあり元島民の方が多く暮らし，市自体も北方領土問題解決に向けて様々な活動をしている。北方領土に関する資料などが見学できる施設が多くあり，私たちもいくつかの施設を見学してきた。道の駅御岱沼，北方館，北方四島交流センター，標津サーモン科学館，そして北方領土館と，根室市の施設を回って気付いたのは，どの施設にも展望室やそれに準ずる場所があり，望遠鏡で北方領土を望めることが出来るという共通点があることだ。これは，私たちにとって北方領土はこんなにも近い場所にあるのだということを知ることで，問題に対する意識を強めてほしいという訴えではないだろうかと思う。北方領土は，私たちの日本にいながら直視することが出来るほど近くにあるというのに，自分たちにも関係のある問題としてとらえている人は多くはない。SGH の授業中の講演や，元島民の方のお話を聞いても，やはりこの北方領土問題を根室市民，元島民の方々だけの問題と考えずに，自分たちの問題として意識してほしいという声が多かった。日本国民全体でこの問題を意識することは，ロシアに対して日本としての強い意志を伝えることにも繋がるだろう。

このような施設には，領土返還への強い意志が反映された石碑やモニュメントが多くあった。特に印象に残ったのは，納沙布岬にある「北方館」。そこに建てられた「四島（しま）の架け橋」というモニュメントは，国後島，択捉島，色丹島，歯舞群島の北方四島を表した形のゲートとなっており，領土返還に向けた大きな架け橋となっている。その下には，「北方領土返還要求運動の火を絶やすな」という意味が込められた「祈りの火」があり，領土返還が叶うその日まで灯し続けられている。第二次世界大戦の際にアメリカ軍に占領された沖縄・波照間島で灯され，沖縄と同じように北方領土もいつか日本に返されることを願って，自然採火された。また，北方領土が返された際にそこに向かって歩む大きな道が作られており，その道の最後には「希望の道」という日本全国の各都道府県から贈られた石が敷き詰められた道がある。「四島の架け橋」と同じように，全国民の強い願いが込められており，北方館の周りには，同じように多くの人々の願いが込められた石碑やモニュメントがいくつも建てられていた。

こうして北方領土返還を日本国民の意志として強く発信する施設に対し，ロシア人との交流を目的とした施設もあった。それが「北海道立北方四島交流センター」である。この施設は，「(ニ）日本と（ロ）ロシアをつなぐ（ホ）北海道」という意味を込めて「ニ・ホ・ロ」と呼ばれている。その名の通り，施設内の資料は英語とロシア語と日本語の三か国語で書かれており，ロシア人にも伝わりやすく北方四島の歴史が説明されている。北方四島についての資料のほかにも，日本文化ルーム，ロシア文化ルームと，お互いの国の文化を知ることの出来る部屋がある。日本文化ルームは和室になっており，ビザなし交流で来館したロシア人たちに茶道や華道を披露する際などにも使われる。ロシア文化ルームでは，ロシアの工芸品や音楽などを実際に触ったり聞いたりすることができ，日本人も楽しみながらロシアの文化

を知ることが出来る。お互いの国の文化を知ることで，より理解が深まるだろうと思った。
こうして様々な施設を見学することで，北方領土問題をより身近に感じることができ，またこの問題に対する様々な人々の意志を知ることができた。今まで北方領土を身近に考えることが出来なかったのは，元島民の方の声をきちんと知らなかったこともそうだが，現在北方領土で暮らしているロシア人の方々の気持ちを知らなかったからだと思った。今回，直接的にロシア人の方々の気持ちを聞いたわけではないが，ビザなし交流の記録などを見ると，北方領土を訪れた日本人を歓迎し，そして問題について真剣に話し合う姿勢がうかがえた。その様子を見て，ロシア人は決してこの問題をごまかすのではなく，きちんと話し合い問題解決に向けて進むことを望んでいるように感じた。そして元島民の方の話によると，現在北方領土に住むロシア人にとっても日本人は決して邪見な存在ではなく，むしろ可能であれば共住しても良いと言っているのだ。日本人とロシア人がともに北方領土に住むことになれば，二国間の距離を縮めることにも繋がるだろう。もちろん，違う国の人々が同じ地域に住むというのは，国家的にはとても難しいことだろうが，ロシア国民自体は日本を受け入れたいと感じていると知ると，北方領土問題のみならず，ロシア人までもが身近に感じられた。国家間の取引などの問題の背景を学ぶよりも，実際の住民たちの声を聞くことこそが，北方領土問題を身近に感じ自分たちの問題として考えるにあたって，とても有効な方法だと思う。

２．座学とフィールドワークを通じて，高校生をしてこの問題をどのようにとらえるか　また，どのように受け継ぎ，発信することができるのか。仮説設定。
元島民の方のお話によると，私たちに出来ることは，多くの人にこのような問題があると知ってもらい，身近な問題として感じてもらうということだった。
私たちが誰かにこの問題を伝えるとすれば，同年代の高校生たちだが，高校生が北方領土問題を身近に感じるのに，条約の移り変わりや国家間の取引を学ぶ，というのはあまりにも遠回りであるように思う。もちろん，より深く掘り下げて理解するためには，歴史的背景を学ぶことは大切だが，実際北方領土問題を何も知らない人に，「北方領土問題を身近に感じてほしいのでまず歴史を知ってください」と説明することは出来るだろうか。また，説明したところで同じ年代の高校生は興味を持つだろうか。興味を持つ人がいないとは言い切れないが，軽い気持ちで話したところでこの問題を真剣に考えてもらうことは出来ないと私は思う。では，何を伝えればいいのか。それが重要である。
私は，このフィールドワークで一番興味を持つことが出来たのが，元島民の方の声，そして現在の北方領土の住民であるロシア人の方々の声である。政府の主張なども，より現実的にこの問題の解決を目指す上では大切なことだが，政府が戦後何十年もの間解決出来なかった問題を私たちが考えたところで，そう簡単に解決策は生み出せない。まず興味を持ち，問題の現状を知る，その為に，一番この問題に近い存在である今昔の住民の方の声は，問題を近くに感じることの出来ない人々を動かす大きな材料になるだろうと思った。私がそうであったように，日本人は北方領土を占領したロシアを恨み，ロシア人は日本人を簡単には受け入れない，と思い込んでいる人は多いと思う。しかし実際は違い，ビザなし交流でお互いの地域を行き来することでお互いの文化や考えを理解し，受け入れ合っているのだ。
私には，具体的により多くの人々にこの問題を知らしめる方法は思いつかなかったが，実際そのチャンスを掴んだ時に"身近に感じてもらう”ということを一番に目指すのであれば，

今までの偏見を覆すような意外性が，問題を他人事として見ている高校生たちを引き付けると思う。

３．今後の課題

今回，根室市での北方領土問題に対する取り組みを学ぶことで，私自身が北方領土問題を身近に感じることができ，またこの経験を多くの人に伝えたいと思った。SGH の授業で北方領土問題を学び始めたときには，難しい問題で近づきがたい印象だったが，現在元住民の方々が高齢になっていることなどを実際会ってみて改めて感じ，問題に対する意志を知った今，私たち高校生など，若い世代が問題への意識を強め，解決を目指していくことが極めて大切であると感じている。私たちの根室での経験や，根室の方々のお話を誰かに伝えることで，直接的にではなくても，北方領土問題の前進に繋がることを目指したい。

「北方領土地域根室など視察研修報告書」

１年１０組　金澤　由喬

１．　今回の研修に対しての自分の目標

これまでの座学を通して身につけた知識や認識が実際に現場に近い場所で誤っていないかどうか確認します。

北方領土問題に関係する方々の活動に目を向け自分たちにできる活動を考えます。

２．　これまでの北方領土問題

これまでの座学のなかで争点となっていると感じたのが第二次世界対戦終結の時期です。日本側の主張は，北方四島は古来から日本の領土であり，日本がポツダム宣言をした１９４５年７月２６日以降の８月１８日から開始されたソ連の不当な攻撃で占拠されてしまった領土であるというもの。

ロシア側の主張は１９５１年に日本が結んだサンフランシスコ平和条約の中での「千島列島は放棄する」という記述の千島列島の中に北方四島も含まれるというものでした。

３．　根室研修で伺ったお話

北方館の方の祈りの火の前でのお話

「この祈りの火は北方四島が帰ってくるようにという願いを込めてあるんですけど，ロシアの方，現在実際に北方四島に住んでいる方はこの火をもったいないって言うんです。なぜかと言うとむこうの島での生活って言うのはそんなに豊かじゃないんです，すべての物が足りないんです，ほんとに薬も食べ物も医療も何から何まで，なので，こんなものにお金をかけるんじゃなくて早くこの火を消して島が返還されるようにしてほしいっていうんです」

この話は，僕の中の現島民の方達へのイメージをがらりと変えました。

それまではロシア政府からの支援で割と本土の平均的な生活よりもいい生活をしていると思っていたのにそこまで苦労して生活しているのだなと思いました。そしてそこで生まれ育ったロシア人の子供は苦労して育った自分の故郷をとても大事に思うのかなと感じました。それと同時に向こうの方たちが日本に来る理由の一つがわかって良かったです。

元島民の方

私「もし北方領土が，先生の亡くなっているかも知れない３０年後４０年後に返ってきたとしたら第二第三世代の人たちに何をしてほしいですか」

先生「できれば生きているうちに帰りたいけれどやっぱり骨を先祖と同じ墓に入れてほしいそして島をどんどん発展させてほしいね」

このお話を聞いたとき一つ疑問点が浮かびました。

それは第二第三世代の北方領土問題の関係者の方々が，北方四島日本に返ってきたときに島に移住しないのではないのかということです。

私はそれならば日本に北方四島が返還されなかったとしても漁業権の調整だけで大丈夫なのではないかと考えました。

根室の漁師の方

私「もし北方四島が返還されたら根室の漁業っていうのは変わりますか。」

漁師の方「変わります変わります大きく変わります，今の何倍もとれると思いますよ」

正直私の中では漁業を軽く見ていたので，こんなにも島が返ってきた大きく変わるというのが衝撃でした。ここにも島の返還を切にのぞんでいる人たちがいると思いました。

４．　根室市の北方領土問題に関する取り組み

・北方四島交流(ビザなし交流)

「北方四島に現在住んでいるロシア人と相互理解の増進を行うことを目的として，毎年ビザなし交流の受け入れを行っています。受け入れでは，ホームステイ・ホームビジットや文化・スポーツ交流など多種多様な交流を通して，日本の生活習慣や文化を体験してもらっています。」(北方館にあるパネルより)

と書いてありましたが調べてみると少し陰りが見えていました。

四島交流の実績

年度	日本人訪問団	現島民　ロシア人	人数
１９９２年	２６８人	２３２人	５００人
２０００年	６５８人	４７４人	１１３２人
２００１年	６８６人	５２７人	１２１３人
２００２年	６６２人	３４９人	１０１１人
２００３年	５４６人	４５４人	１０００人
２００４年	６３９人	４３７人	１０７６人
２００５年	６９１人	３６０人	１０５１人
２００６年	５３４人	３５２人	８８６人
２００７年	５４２人	２８４人	８２６人
２００８年	５１５人	３３７人	８５２人
２００９年	５２５人	３２４人	８４９人
２０１０年	５８４人	３２１人	９０５人
２０１１年	４６０人	３１７人	７７７人
２０１２年	５４８人	３３０人	８７８人
２０１３年	５０３人	２９９人	８０２人
２０１４年	５５０人	３１０人	８６０人
２０１５年	４１６人	２６７人	６８３人

赤字　人数増加（前年比）

青字　人数減少（前年比）

最も交流人数の多い２０００年から少しずつ参加人数が減り始め２０１５年に四島交流の中では二番目に少ない６８３人となっています理由としては次のことがあげられます。
・メドヴェージェフ首相をはじめするロシア要人による相次いだ北方領土訪問
・日本の漁船　「第１０邦晃丸」が国後島沖で４６日間（7月１７日～８月３１日）拿捕されたこと
・「我々は日本政府との間で「クリル問題」に関していかなる対話も行っていない。この問題は７０年前に解決されている。」というモルグロフ露外務次官の発言
これらによる関係の悪化が四島交流の減少につながったと考えます。

・北方領土関係施設の運営

根室市では北方展望塔・展示室，北方館，北方四島交流センターなど様々な施設がありそれぞれの施設で北方領土に関する様々な資料が展示されています。そして「叫びの像」などをはじめとするモニュメントが元島民の方たちの島への思いを表わしています
叫びの像…北方展望塔・展示室の前に展示されている像。何代かかったとしても北方四島を取り戻すという気持ちが込められているそうですそしてその先には四島と野付半島から国後島までの距離１．６㎞を表わす１６ｍの四本のポールが経っています

・署名活動

根室市で行われるお祭りなどのイベント会場では千島歯舞諸島居住者連盟による北方領土返還要求の署名活動が行われています。
そのほかにも北方領土問題に対する国民の理解や関心を高めるために「北方領土の日（２月７日)」と「北方領土返還要求強化月間（８月)」が設定されています。
北方領土の日は。この２ 月７ 日は，１８５５ 年日露両国の国境を択捉島とウルップ島との間と定めた｢日露通好条約｣が伊豆の下田で署名された日です。
北方領土返還要求強化月間は終戦が８月であるからだそうです。１
そして全国で北方領土の返還を求める署名を国民の意志を表明する直接手段として行われています。集められた署名は，国会に毎年提出されているそうです。（２０１６年3月末８７０２８２１６名）

・北方領土隣接地域振興対策根室管内市町連絡協議会（根室管内１市４町）の活動

「北方領土の日」に行われる根室管内住民大会
毎年北方領土の日（２月７日）に，北方領土の早期返還を叫び続けている根室管内住民が集結し，北方領土問題の解決と平和条約締結に向けて「原点の声」を全国に発信しています。（展望台のパネルより）
また，次代を担う北方領土返還運動後継者の育成のため，根室管内中学生による弁論発表も行っている。

・北方領土まで歩こう会

「北方領土まで歩こう会」は，納沙布岬に向けて，北方領土までの距離である３つのコースを実際に歩き，ウォーキングを通して，北方領土返還の世論喚起を図ることを目的として開

催されています。

これらの活動を見て
根室市の取り組みの良さは北方領土に一番近いことだと思います。実際に近い場所で話を聞いて学ぶことは普通に学んでいるだけでは体験できない事なのでそれを活かせていてとても良いと思いました。

５．　高校生としての北方領土問題の認識
今回の研修中に何度か色々な人達ディスカッションをする機会が持てました
その中で私が思ったのがどういう結果がベストなんだろうということです。
今までは北方四島が返ってくればそれが一番いいと思っていたのですが研修中にディスカッションから見えてきたことがいくつかありました

・実際に島が返ってきて何人の人が北方領土に移住したいと思うのか
たとえば私は父親の故郷である宮崎県が北方領土と同じ状況になっていたとしても特に行きたいと思わないだろうということと同じように二世，三世の人達が住もうと思うのかということ

・実際に北方四島に日本人に住んだ時にロシア人との間に対立は起きないのか
前にも記載した通り実際に北方四島が日本に返還されたときに移住しようとする人は少ないと思われる。そうなると日本人とロシア人との割合に大きな差が出ます，そうなると言葉の壁，文化の違いが出てきます。そこで生活することは差別を生んでしまうのではないのかと思います。

・元島民の方たちがすべて亡くなったらどうなるのか
現在元島民の方たちの平均年齢は８０．２歳となっています。これはいつ亡くなってもおかしくない年齢であると思います。そしてすべての元島民の方たちが亡くなることは島に帰りたい人達がいなくなり残るのは島に行きたい人達だということです。

これらの事から一概に北方四島すべて日本に返ってくるのが一番望ましいというのが言えなくなったのではないかと思いました。
しかし歴史的な面からみたら北方領土が日本の領土であることは明白であると思います。
なので私達高校生はこの問題に対してお互いが譲歩しあわなければいけないと認識するべきだと思います。そしてその上で知ろうとするべきなのだと思います。大人になってから知ろうとして解決しようとしたのでは，今までの大人と同様どこか殻を抜け出せないおような交渉をせざるをえなくなると思います。そうやって人と人レベルでの理解度を上げていき最終的に政治的な条件が整ったときに解決できるようにすることが良い解決への道だと思います。
私が今回の研修を踏まえたうえで考えた北方領土問題解決の最善の形
- 北方四島の帰属は日本とする
- 現在北方四島に住んでいる方たちにはできるだけそのまま住んでもらう

・漁業権の半分を日本のものとする（品目ごとに両国合わせてとれる量を決める）
・もちろん元島民が自由に行くことができるようにする。

これをどう発信していくか
・この研修で感じたことをすぐ周りにすべて伝えたとしても理解されないと予想されるので今後北方領土問題で進展があってニュースになった時に周りとそれに関した話を深くすることで徐々に周りとの理解を深めることができます。
・集団で SNS を使った発信
社会で起きている様々な問題に対して５分程度の番組を作って発表していく集団を作ります。そしてその中で北方領土問題を扱います。番組のコンセプトはその問題を知ってもらうのではなくその問題を知りたくなるように疑問点を視聴者が気付く番組にします。高校生でもできることであるし高校生だからこそ投げかけられる疑問があると考えます。
最後に
この研修を通して少し悲しい気がしました，自分は勉強していると思っていたのに実際にいってみると全然私の知っていることは少なかったからです。
このことは私にだけ起こることではないと思うので少しでも伝えていけるようこの問題に向き合っていきたいと思います。

「北方領土周辺根室地域フィールドワークについての報告書」

１年１３組２番　小川　湧暉

１．　今回の研修に臨むにあたって

私は，今回研修に挑むにあたって北方領土に関する問題について SGH（スーパーグローバルハイスクール）の授業などでいろいろ調べました。北方領土のことについて調べるにうちに，今おきている我が国の北方領土問題について大変興味を持ち，現地での視察をとても大変にたのしみにしていました。とくに現地の雰囲気や地元の人たちの生の声を聞いてさらに北方領土問題についてのたくさんの知識や理解を深め今後の学習に生かしていこうと思い，今回の SGH 根室の研修に挑みました。

２．　北方領土問題について

北方領土は，北海道本島の北東洋上に位置する，歯舞群島，色丹島，国後島及び択捉島の四島です。北方領土は，日本がロシアより早くその存在を知り，多くの日本人がこの地域に渡航し，生活をし，父祖伝来の地として受け継いできたものです。今から１６０ 年以上前の１８５５ 年２ 月７ 日，日本とロシアは日魯通好条約を結び，当時自然に成立していた択捉島とウルップ島の間の国境をそのまま確認しました。それ以降も北方四島が外国の領土となったことはありません。しかし，１９４５ 年８ 月９ 日，ソ連は，当時まだ有効であった日ソ中立条約に違反して対日参戦し，日本がポツダム宣言を受諾した後の同年８ 月２８ 日から９ 月５ 日までの間に北方四島のすべてを占領しました。そして，ソ連は１９４６ 年に四島を一方的に自国領に「編入」し，当時四島全体に約１ 万７ 千人住んでいたすべての日本人を強制退去させました。それ以降，今日に至るまでソ連，ロシアによる法的根拠のない占拠が続いており，北方領土問題が存在するため，日露間では，いまだ平和条約が締結されていません。

３．　北方領土返還要求運動について

北方領土返還実現のための外交交渉を強力に後押しするためには，世代を超えて国民一人ひとりがこの問題を正しく理解し関心を高め，国民世論の結集を図ることが大切です。そうした認識のもと，全国に都道府県民会議が結成され，２ 月と８ 月を「北方領土返還運動全国強調月間」と定め，大会やパネル展，街頭啓発，署名活動など活発な国民運動が行われています。また，１９８１年（昭和５６ 年）政府は閣議了解により，２ 月７日を「北方領土の日」に定めました。この２ 月７ 日は，１８５５ 年（安政元年）日露両国の国境を択捉島とウルップ島との間と定めた「日魯通好条約」が伊豆の下田で平和裏に署名された日です。

・北方四島交流事業

１９９１ 年（平成３ 年），ソ連側から日本国民と四島住民との交流を行うことが提案され，翌１９９２年（平成４ 年）から旅券（パスポート）・査証（ビザ）なしの北方四島交流事業が始まりました。北方四島交流事業は，北方領土問題の解決を含む日露間の平和条約締結問題解決のための環境整備を目的として，北方四島在住ロシア人との相互理解を促進するために実施をしています。

４．　根室市における北方領土問題の取り組みについて

根室には，北方領土問題に関する施設やポスターなどがたくさん見られた。北方領土に関する展示や北方領土の知識を深めることができるものがたくさん見られた。このような施設を見学することにより，北方領土問題に関する知識や理解を深めることができ，一般の方もこのような施設を見学することにより，北方領土に関する知識がより一層身近に感じられるはずだ。今回は，その根室フィールドワークの展示物や施設などについてまとめたいと思う。道の駅尾岱沼の北方展望塔や展望室には，深い霧がかかっていたため，今回は見ることができなかったが，天気がいい日なら展望室から野付半島の奥に国後島を見ることができる。展望塔の中には北方領土に関するパネルが設置されていて，北方領土問題に関しての知識をいろいろと学ぶことができるようになっている。その展望等の横には老女と息子と孫が北方領土返還を求める悲痛な叫びを四島に見立てた１６メートル先の四本のポールに向かって叫んでいる「叫びの像」を見ることができる。また四等の返還が実現するようにとの願いからポールと像の間には「四島への道」が続いている。山形の実業家の鈴木博六氏が国内外の世論を盛り上げ，四島返還を実現させようという強い意思のもとに建設，寄贈したこの像には，たとえ何代かかっても北方四島を取り戻すという国民総意の気持ちが表されている。

二日目にいった納沙布岬には，北方館と望郷の家，四島の架け橋を見学した。納沙布岬は，本土最東端に位置する岬で一般人が足を運ぶことのできる場所の中では日本最東端の地である。納沙布岬は日本一早い初日の出を見ることができる場所として有名なほか，この地を境に北がオホーツク海で南が太平洋というように，二つの海の境目にもなっている。そこに流氷によって栄養が運ばれ，とてもよい漁場であるが日本の漁船は３．７ｋｍ先には歯舞群島・貝殻島があるため，中間地点の１．８５ｋｍまでしか行くことができない。それを超えてしまうとロシアによって拿捕されたり銃で打たれたりするのである。７．０ｋｍ先には水晶島もある。ここは日本で一番北方四島に近い場所でもある。ここでも深い霧がかかっていたためよく見えなかったが本来は数キロメートル先の歯舞群島のほか，天気がよければ国後島の山並みを望むこともできる。北方領土返還要求運動の原点の地に位置する北方館は，返還運動への深い理解と参加を得て，より一層の国民世論の高揚を図り，一日も早い返還実現を目指すために開設している。この施設では，展望室から歯舞群島や国後島を望める。また，北方領土問題の発生の状況を展示資料によって学ぶこともできる。これに隣接する望郷の家は，第二次世界大戦後昭和４７年４月に北方領土の島々を追われた元島民の心のよりどころとして開設され，戦前の島民の生活関連資料や島々における街並みや住居表示が折り込まれた地図などが展示されており，当時の北方領土での暮らしや生活の様子などを学ぶことができる。両施設とも一階に北方領土返還要求署名コーナーが設けられていて，この施設を訪れた人は誰でも署名することによって北方領土返還要求運動に参加することができる。また，またこれらの施設のすぐ近くの望郷の岬公園には北方領土返還祈念モニュメント「四島のかけ橋」が立っている。北方領土を望む海岸に立つこのモニュメントには，領土返還を強く望む人々の思いがこめられていて，日本国民の領土返還に対する強い意思を表すシンボルにもなっている。その下には，「祈りの火」があり，これには「北方領土返還要求運動の火を絶やすな」という意味がこめられているが，この火を燃やし続けるには多額の費用がかかってしまうため現在は北方館の開館時間のみ灯されているというのが現実だ。本土最東端のため，観光を目的にこの場所を訪れる人も少なくないがこれらの施設はそういった人たちに北方領土問題

に対して関心を持ってもらうきっかけにもなるだろう。二日目にその後向かったのが北海道立北方四島交流センター「ニ・ホ・ロ」である。「ニ・ホ・ロ」の名前は「日本とロシアをつなぐ，北海道の交流拠点施設」の意味から来ていて，日本の「ニ」とロシアの「ロ」の間に，架け橋となる北海道の「ホ」を入れて「ニ・ホ・ロ」と名付けられた。この施設は北方領土問題に対する国内，特に青少年への啓発と，北方領土で暮らすロシア人との交流を目的として２０００年２月７日の「北方領土の日」にオープンした。展示室では日本とロシアの歴史，北方領土返還要求運動から，北方領土での暮らし，返還要求運動の経緯などが日本語だけではなく，ロシア語でも紹介されている。また，ロシア文化ルームでは，ロシア伝統の民族衣装やマトリョーシカなどが展示されていて，ロシアの民族衣装をきて，記念写真を取ることができる。また，ロシアに関するクイズや，ロシアの伝統の音楽を聴けるなど，ロシアの文化を体感することができるようになっている。日本文化ホールでは，ビザなし交流など外国の来館者が茶道や華道，書道といった日本の文化に触れることができるようになっているようになっている。交流ホールは，会議やシンポジウムに利用することができ，ビザなし交流などに活用されている。三日目に言った北方領土館は写真パネルやパノラマ模型，北方領土に生息する動物の剥製などが展示されていて，北方領土返還要求運動の歴史や当時の北方領土の様子を学ぶことができるようになっている。二階の展望台からは国後島を見ることができる。

フィールドワークで実施に見学した施設には北方領土返還を強く望み，作られた施設が多かったように思う。施設内には，「北方領土は日本固有の領土です」と書かれているのを数多く目にした。「ニ・ホ・ロ」は「日本とロシアをつなぐ，北海道の交流拠点施設」なだけあり，そのような表示はなかった。同じ北方領土のことを展示している施設でも，それぞれの立場があり，それぞれ伝えたいことがあって，さまざまな展示が生まれているということがわかった。一方で，ロシアを含めてそれぞれの立場と主張を客観的な視点でまとめた展示があるとより多くの人が多面的にこの問題を捉え，正しく理解することができるのではないかと感じた。

５．　最後に根室フィールドワークを受けて

私は今回の研修で北方領土問題にはそれぞれの立場，主張があって解決策を見つけ出すのはとても難しいことだと深く実感しました。そして私は，今回この根室フィールドワークを受けてとてもよかったです。なぜなら，私が知らない知識をたくさん吸収することができたからです。これからもたくさん北方領土のことについて勉強して知識を深めたいと思います。そして，北方領土問題に向き合っていきたいと思います。北方領土が１日でも早く返還されることを心から願っています。

「北方領土周辺地域視察について」

２年１０組２４番　長澤　麗奈

１．　はじめに

今回私たちは，８月１５日から８月１８日にかけての３泊４日で北方領土視察を行った。この北方領土視察を行ったことでの「根室市における北方領土問題の取り組みについて」そして「フィールドワークを通じて，高校生としてこの問題をどのようにとらえるか。また，どのように受け継ぎ，発信することができるのか。」について考えていきたいと思う。

２．　根室市における北方領土の取り組みについて

根室市には，数多くの北方領土関連施設があった。納沙布岬には，昭和５６年９月に建てられた高さ１２．６２メートル，長さ３５メートル，幅３．４メートルから５．０メートルの四島の架け橋がある。この四島の架け橋は，北方領土を４つのブロックに表現し，それが互いに連なりあって大きな架け橋となり，領土返還を祈るゲートとして表現したものである。四島の架け橋の奥には，祈りの火というものがある。これは過去にアメリカとの領土問題があった沖縄から火をリレーで運んできたもので沖縄がアメリカから還ってきたことで北方領土もロシアから還ってくるという思いがあるという。なぜ今でも灯がともっているかというとガスで炎が常に赤く見えるように調節しているからでそうするとガスの費用だけで膨大な費用が掛かってしまうので安全もかねて夜中の間は，火を消しているそうだ。ほかには，北海道立北方四島交流センターがありこの施設は，二・ホ・ロと呼ばれている。二・ホ・ロには日本(二)とロシア(ロ)をつなぐ北海道(ホ)の交流拠点施設という意味がある。二・ホ・ロの中には，ロシアと日本両国の文化ルームがあり，ロシアの文化ルームには，ビザなし交流事業で日本を訪れた方々のお土産なども展示してあった。

展示室には，北方四島の歴史，日本とロシア両国の生活の様子，北方領土返還活動の様子について展示してあり，シアタールームでは，実際に日本の方がビザなし交流で北方領土に行った際の映像を見ることができる。そして対話ルームは，ビザなし交流事業での対話交流会場としても利用されている。さらに根室にある様々な施設には展望台がついている。今回は台風接近の影響もあり霧がかかってしまって北方領土を実際に見ることができるという。根室の一番北方領土に近い場所から北方領土までは３．７キロメートルしかない。そのため標津サーモンパークは唯一ロシアのネット回線がつながるという。このように根室には，北方領土についての施設がたくさんあった。

根室に買い物に来る北方領土に住んでいるロシアの方のために道路標識にはロシア語も表示してあったりもする。祈りの火をともし続けてもいる。こうやって根室では北方領土に一番近い街としていろんなことに取り組んでいる。

３．　フィールドワークを通じて，高校生としてこの問題をどのようにとらえるか。またどのように受け継ぎ，発信することができるのか。

Ⅰ．元島民の方や北方領土の方に漁に出ている方のお話

今回は，以前，国後島に住んでいた元島民の方とお父さんが北方領土の方にコンブ漁に出ている方，歯舞漁港の方のお話を聞いた。コンブ漁の方は，ロシア側に年間３０万から４０

万支払っているという。それは，安全のためであって決して北方領土をロシアのものと認めているわけではないとおっしゃっていた。これだけ支払っていても日本とロシアの境とされているところでのロシア側からの船内確認は，欠かせないという。そしてお金を収めてない方が少しでもその境を越えてしまって銃殺されてしまうこともあるという。このような状態では毎日行かなくてはいけない漁も気が気ではないと思う。さらに，コンブをとってもいい量は決まっているという。歯舞漁港の方も同じようにロシア側にお金を収めており獲ってもいいものも決まっておりさんま，サバ，いかはいくらでもとってもいいのだという。島民の方は，自分が国後島に住んでいたときの様子や当時のロシアの方のお話もしてくれた。話を聞いていてロシアの方の印象も変わった。思っていたよりももともと北方領土に住んでいた方に対しても親切だったからだ。そのほかにも国後島内のどこではこういうことができてここには何があるというようなお話を聞くことができた。このように日本固有の領土であるはずなのにロシア側にお金を支払ったり，獲る量を制限されたりしている。このせいで今まではコンブ漁だけでも食べていけていたのが，今では冬は本州に出稼ぎに行かなくてはいけないなどマイナス面ばかりだ。

Ⅱ．北方領土について，そして北方領土の現状

北方領土は，歯舞群島・色丹島・国後島・択捉島からなっており面積は５００３平方キロメートルある。北方領土は戦前から漁業が盛んで世界二大漁業の１つに数えられていて，主な水産物は，コンブ，さけ，ます，たら，すけそう，たらばがに，なまこである。

今現在，北方領土には約１７０００人のロシア人が住んでいる。しかし北方領土は，整備がきちんと整っていない状況だ。だんだん整ってきていて高校まではできているがさすがに大学はなく子供たちは島を出ていき，そこに戻ってくることはほぼないという。しかも北方領土に住んでいる人たちは買い物をするために根室に出てくるのだという。そのため根室にある交通標識にはロシア語が表示してある。北方領土で暮らしている人の中には，早くこの領土問題が解決して日本人が北方領土に住んだ方がいいと考える人もいるそうだ。ではなぜそんなことを考えるか。それは北方領土に日本人が住むことによっていまよりもっと設備が整い暮らしやすくなると考えているからだそうだ。そう考えると北方領土に住んでいる人たちにとってはマイナス面もたくさんあると思う。

Ⅲ．フィールドワークを通じて，高校生としてこの問題をどのようにとらえるか。またどのように受け継ぎ，発信することができるのか。

Ⅰ，Ⅱでも書いたように北方領土に関わっている日本人にとっても北方領土に住んでいるロシア人にとってもこの領土問題が解決することはプラスにはなると私は思う。元島民の方々の平均年齢が８０歳を超えてきている中で元島民の方が生きている間にこの領土問題を解決させるのは今まで解決しなかった問題があと１０年ほどで解決させるのは実際のところ不可能に近いと私は，思っている。それでもこの領土問題をすぐには解決できないといっているうちに元島民の方がだんだんと減っていってしまうしこの問題が風化していってしまうとも思う。だからこそ風化させないためにはまず元島民の方たちが生きている間にどれだけこの問題に関する話を聞いて今後自分よりも若い世代に伝えていくことができるのかが大事だと思う。そのためにはまず北方領土について知ってもらわなければならない。しかし今ど

きの若者は，北方領土問題を知っている人すら少ないのかもしれない。そして今どきの若者たちが知らないということは今後北方領土問題について知っている者が今よりも減っていつかいなくなってしまうかもしれない。そうなってしまうのを防がなくてはいけない。そうするためにはツイッターなどの SNS を積極的に使って北方領土について発信していくのが一番だと思う。たとえばビザなし交流だ。今回行われたビザなし交流については同行した通訳の方が国後島から帰ってくることができなかったという内容のニュースばかりでビザなし交流の内容がどんなものなのかビザなし交流ではどんなことをするのかなどを知ることはできない。北方領土に関して，関係している人以外の人が北方領土について調べることはほぼない。なのでビザなし交流について知ることはない。だからこそもっとニュースでビザなし交流の様子を流したりすることで北方領土について目にする機会が増えると思う。さらに SNS で拡散していくことによってより人々に伝わることだろう。目にすれば少しは興味を持ってくれるひとが出てくると思う。こうした積み重ねで北方領土について知っている人を増やしていけると思う。ほかには，ビザなし交流で日本に来た方々との交流をもっと増やした方がいいと思う。交流を増やして現地の方々の声を聴くことで聞いた人たちの考え方が以前より変わるかもしれない。そして多くの方が交流の内容を交流に参加していない人に伝えていくことができると思う。そして自分よりも年上の方との交流も大事だと思う。自分よりも北方領土についてよく知っているし自分と意見が全然違うと思うので同世代じゃない方との意見交換も大事だと思う。

４．　最後に

今回は，３泊４日の中で北方領土に関する施設をたくさん訪問し，お話をたくさん聞くことができた。惜しくも天候の影響で北方領土をきちんと望むことはできなかったが雲海に反射した北方領土を見ることができで珍しい体験ができたと思う。お話を中には，元島民の方ならではのお話を聞くことができた。元島民の方が話された，当時北方領土にロシア軍が攻めてきたときの様子やもし自分が北方領土問題解決前に死んでしまったらどうするかという質問にもし自分が死んでしまった後に北方領土が帰ってきたら自分が以前住んでいた島が，自分が住んでいたころのようになってくれていたらそれでいいんだという話を聞いて意外だった。私だったら自分が生きているうちに絶対自分の住んでいた島に戻りたいと思っていたと思う。この北方領土視察に参加したことで，以前よりも北方領土について興味を持つことができた。普段の生活では，絶対聞くことができなかった話もたくさん聞くことができたので，これを機にもっと北方領土について知りたいと思った。そして今回北方領土視察を行って知ったことについて多くの人に伝えていきたいと思う。さらに北方領土問題を早期解決するために今，行われている安倍首相とプーチン大統領の話し合いで少しでも北方領土問題解決への道が開いていけばいいと思う。

長崎フィールドワーク
（開国地長崎の異文化受け入れ・被爆都市長崎の訴え・観光都市への発展調査）

２年１０組２６番　渡辺瑞季

◆観光地に於ける異文化の受け入れ

長崎大学で行われた異文化についての講義は，難民についてであった。難民と言う言葉は，この頃ニュースでもよく聞くようになったが，私たち日本人はあまり身近に捉えていないため，とても興味深い題材であった。初めに，難民についての自分の知識を聞かれたが，紛争から逃れた人たち，難民キャンプで生活をしている，国からお金を貰って生活をしているなど，一般的な知識しか知らなかった。ヨーロッパ内ではイギリスがEU離脱という理由の一つとなっているほど重要な問題なのにも関わらず，自分たちの知識はニュースで聞いているものだけなのだと分かると改めて知らなければならない問題だと改めて思った。

そもそも難民とは，と聞かれても即座に答えられなかった。紛争から逃れた人たちだと思ったが，世界的に規定が決まっており，人種や宗教，国籍などで迫害を受ける可能性がある人たちであった。

私が驚いたことは二つある。

一つは去年の難民数が，６５３０万人と日本の人口の２分の１に達していて，そのうちの半分は子供だということ。これは想像していた以上に大きい数字であった。ヨーロッパなどの国だけでは当然受け入れは出来ない人数であり，世界的に援助すべき問題だと思った。

二つ目は，最も難民を受け入れている国がシリア，アフガニスタン，シリアで，ヨーロッパの国々ではなかったといつこと。先進国で受け入れている難民はとても少ない事を初めて知った。ニュースばかり見ていると，ヨーロッパに逃れる難民のニュースばかり見るが，実際に知らない事があり,私はかなり驚いた。自分が知っている知識は本当に僅かだという事を思い知らされた。

今回，この講義を聞いて，日本はこの世界的な問題となっている難民に何ができるのかをじっくり考えるきっかけが出来たと思う。日本の難民受け入れ数が少ない事に規定を日本側が固く守っているということが１番大きな原因だと思うが，その原因を作っているのが，日本人が異文化に触れる機会が極めて少ないことにあると思う。日本は島国なので，昔は他国との交流は中国などの一つ海を越えた国としか交流はしなかったが，今は世界的にグローバル化が進み，どんどん外国の物や観光客などが日本に集まっている。しかし，日本人は性格上シャイなので，異文化の交流をあまりしたがらない。その結果，外国人の移住者が少なく，難民の受け入れが進まないのではないかと思う。

そんな日本の中でSGHという積極的に異文化に触れることのできるプログラムに私たちはいるので，私たち自身が難民を初めとする異文化についてもっとよく知り，少しでも日本人に伝えられるような活動をしていくべきだと思う。

◆原爆被災地日本からの発信

今回，長崎原爆資料館や，実際に原爆記念式典の会場へ行くことで，元々自分の中で思っていた日本人としてこの問題を後世に伝えていかなくてはならないと思う気持ちを一層高められた貴重な体験だった。

まず，１日目に向かったのは長崎原爆資料館だった。ここでは，原爆による被害の惨状を再現

してあり，原爆の破壊力や恐ろしさを知ることのできる場所であった。実際に爆風で飛ばされた建物などを見て，テレビなどでは知ることの出来ない原爆の恐ろしさを知った。熱線による被害も尋常ではなく，瓶が溶けていたり，弁当の中身が炭化したりと，逃げても助からない惨状を知った。被爆者の実際の話を聞いたりしていると，本当に悲惨だった当時の状況を知り，原爆というものの恐ろしさを改めて感じた。

３日目に訪問した“平和の灯”では，灯籠に火を灯し，被爆者を悼み，核兵器のない世界を願った。日本人の大人から子供まで沢山のひとが訪れていたが，その中に外国人の方々をよく目にした。私は地元の人たちや，全国からの日本人だけだと思っていたので正直驚いたが，世界的に伝えていかなければならない原爆について外国にも関心を集めていたことに私はとてもいい傾向だと感じた。今回のこの“平和の灯”へ来た外国人には，母国へ持ち帰り，原爆の恐ろしさを現地の人たちに伝えて欲しい。

ここでは実際に翌日の記念式典の会場に足を運んだ。テレビでしか見ることのなかった平和祈念像も実際に見ることができ，あのポーズにも意味がしっかりと意味があることもわかった。日本人ならば１回は来なくてはならない場所だと私は思った。

実際の原爆の恐ろしさはテレビや写真などではあまり分からない。その中でこのような資料館へ行くことで原爆の恐ろしさを知ることができた。私は一人一人が原爆について触れることが重要だと感じた。

私は，小さい頃に読んだ戦争の絵本をきっかけに沖縄へ実際に行き，戦争の恐ろしさを目の当たりにした。今思い出すだけでも涙が出てくるような惨状に，もう二度と戦争を起こしてはならないと子供ながら感じた。私は，日本人はもっと戦争について子供の頃から深く学ぶことが必要だと思う。私の学校では実際に戦争を体験した先生がいた為，よく話を聞いていて，関心を持つことができた。戦後７１年が経ち，戦争の体験者も年々減っている。このような活動を今からもっと活発にして欲しい。その為にはまず私たちが詳しく知り，後世に伝え続けていくことが１番私たちにできることだと感じた。

今回の研修や，沖縄での体験を無駄にしないように，私は戦争の恐ろしさを海外の人たちには勿論のこと，未来の子供などに広めていきたいとおもう。

長崎フィールドワーク
（開国地長崎の異文化受け入れ・被爆都市長崎の訴え・観光都市への発展調査）

１年１０組　岩本　匠平

◆観光地に於ける異文化の受け入れ

異文化理解というものは実際大変だと感じた。他国との食事，衣服，作法などの違いは理解することができるが，文化というものはそれだけにとどまらない。人の感性，意識の違いまでも含まれる。前者のみを理解するのは容易かもしれないが，後者を理解するのにあたっては，苦労するだろうと感じた。長崎大学の学生の研究発表を聴いた際，こんな場面に遭遇した。日本人の学生による外国語がプリントされたＴシャツについての研究発表の後，欧米人留学生がこう質問したのだ。「どうしてＴシャツに書いてあることの意味を気にかけるのか。」と。これはまさに意識や価値観の違いを表していると思った。

日本人は他人の目を気にして目立つようなことはしない。英字がプリントされている服を着て無難になじもうとするが，プリントされている言葉の意味が恥ずかしものだと知ったら敬遠するであろう。つまり，日本人は他人からの評価のほうを気にかけ，欧米人は自分の意思で自己決定する傾向がある，ということではなかろうか。このことは歴史を紐解いてみるとよくわかるかもしれない。日本では改革はどのようなものがあるか？いくつか例を挙げると，大化の改新，明治維新，戦後改革などがあるが，注目すべきは改革の方法だ。３つとも「上からの改革」なのである。民衆が中心となった改革は日本史上ない。一方欧米諸国に目を向けると，フランス革命，ロシア革命，キューバ革命など「革命」という強い言葉で表現された改革が例に上がる。革命の意味は，「従来の被支配階級が支配階級から国家権力を奪い，社会組織を急激に変革させること。」だそうだ。「革命」とはまさに「下からの改革」なのである。

日本人は昔から「和」とかいうものを重んじる民族だといわれている。つまり保守的なのである。全体が「和」に染まることが普通だと認識し始めると，「和」を乱すことは「恥」だと考える。ついには，皆に合わせないことは恥だと考えることにつながった。結局現代にいたるまでこの考えは変わらなかった。これはこの国が辿ってきた歴史である。

欧米では次々と国が勃興し，激しい変化を伴った歴史を辿った。変化や改革は自然なのである。変化は痛みとともにある。他人の目を気にしている暇はない。

文化というのは歴史である。自分がおかしいと思う文化に遭遇しても，まずはその国の歴史を知ろうとするのがいい。その後自分の考えに従うのがいい。理解と賛同は違うのだ。

◆原爆被災地日本からの発信

もしあなたが原爆で焼け焦げた少年を見たらどう思うだろうか。「やはり原子爆弾はいらない」と思うのだろうか。もしあなたが化学兵器によって虐殺されたクルド人の子供を見たらどう感じるのだろうか。「大量破壊兵器は恐ろしい」と感じるのだろうか。悲惨なシーンを見かけたとしたら，多くの人が心を動かされるだろう。

日本は世界で唯一の「戦争」で原爆が投下された国だ。市街地を狙って落とされたそれは，一瞬ですべてを焼き尽くした。このためヒロシマ，ナガサキには被爆した時の様子などが写真や焼け焦げた物質から感じ取ることができる。これらのようなものから影響を受け，原爆をなくそうと考える人も出てくる。しかしながら，核廃絶を完遂することは，現状不可能だといってもいい。

もし日本政府が方針を転換して核廃絶に動いたとしても，あるジレンマに直面する。日本の周辺には３つの核保有国が存在する。もちろんそのすべてが核を撃ってくる訳ではない。しかし，１国だけとんでもないのがいるので，何とかしなければならない。核を捨てろといっても聞くはずはないし，かといってこちらが核を持って脅そうとするのも非現実的だ。ではどうするか。選択肢は今のところ１つしか存在しない。アメリカの「核の傘」に守ってもらうしかない。しかしアメリカは世界で２番目に核を保有している国だ。「核を持って核を制す」という戦略に日本が加われば，核廃絶など目指すことはできない。

現実的に日本ができることは何か。日本は現在「核拡散防止条約」に加盟している。その名の通り，核兵器が各国に広がっていくのを防止する条約だ。この条約は核軍縮や原子力の平和利用を推進している。日本が世界の平和に貢献できるのはこのようなことではないだろうか。世界で唯一の被爆国として，日本にしかない資料を活用し核兵器の恐ろしさを全世界に理解させる。まずは「核兵器はむやみやたらに使ってはいけない，恐ろしいものだ」という世界共通の認識を作り出すのだ。共通認識が生まれたら，世界は自ずと核軍縮に傾いていく。世界が一体となっていけば，どんなことでもできる。

しかし問題がある。世界は今ひとつではない。平和ですらない。紛争や内戦は今も起こっているのである。核が今この世から消えても，喜ぶ人は僅かな国の人しかいないのではないか。やるべきことは核のほかにもまだまだある。この世界中には今すぐの助けを求めている人がたくさんいる。

長崎フィールドワーク

（開国地長崎の異文化受け入れ・被爆都市長崎の訴え・観光都市への発展調査）

１年１３組　長谷川安寿

◆観光地に於ける異文化の受け入れ

異文化を理解するとはどういうことなのかなんて考えたことなかったが，異文化を理解するというのはその文化の様々な歴史的，社会的背景を知るということなんだと思った。「え？それおかしくない？」というものもそれをやっている人たちにはそれが当たり前の日常で，逆に自分が当たり前だと思っていることが相手の人にとったらおかしいことが異文化なんだと思った。そう考えると異文化を理解するのって難しいことだと思ってしまった。私が異文化を理解するためにもまず言語を勉強するのも必要だと思った。なぜなら，私達が日常的に使う漢字がプリントされたＴシャツを着ている外国人についての発表をしている大学生の研究発表チームの話が面白かったからだ。発表のスライドに載っていた画像に脚にタトゥーをしている画像があったのだが，そのタトゥーとして刻まれていた文字が「水道」という文字だった。日本人は普通水道なんて書いている服を着る人も身体に書いたりする人なんてあまりいないはずだ。だが逆に日本人は外国語がプリントされたＴシャツを着る。ニュアンスで選んで着ているからそのプリントされている言葉の意味を理解しているわけではない。変な意味の言葉のプリントＴシャツなんて着たくないからまず言語を理解したい。

日本は東京の方だったらいろんな国の人が住んでいるしグローバル化が進んでいる。だから時間はかかると思うが何もしなくても自然と多文化共生ができると思う。模擬講義を聴いて日本人の視野は結構狭い気がした。難民の受け入れ数が少ないことから私はこう思ってしまった。もっと広い心で一歩引いて回りを見れば視点が変わって何かが変わり，もっと困っている人を救うことできると思う。日本人に限ったことではないが人は自分と違う人などを見た目などで判断して切り捨ててしまうから，どうしてこうなのか，どうしてこういうことをしているのか人に聞いて終わりにするのではなく自分で考えて答えをだすことが多文化共生に必要だと思う。

◆原爆被災地日本からの発信

長崎の原爆資料館に行って,原爆投下された後の長崎実際の写真のスライドや多くの資料は本当に心が痛む衝撃的なものばかりだった。私だけかもしれないが，日本で起きたことなのに日本人はあまり原爆や戦争のことを知らないのではないだろうか。もちろん学校の授業とかで戦争が起きた年代や終戦日とかはやるので知っているが実際に経験をしたことのない私達に当時の本当の辛さや心境を理解することはとても難しいと思ってしまう。私の場合，戦争に関してのニュースなどテレビでやっているのは見るが心の中では関心がないというかスルーしてしまう。この考えはよくないとは思うが，自分が実際に被害にあっていないからどうしても他人事に見えてしまうのだ。だからと言って戦争をしたいわけではないが，私と同じ考えの人はこの世の中にはたくさんいると思う。でも，何かのきっかけがあれば少しでも戦争のことを改めて考えることができると思う。実際に私は資料館に行って考えることができた。私は資料館で見た写真が頭から離れない。どんな人もあの悲惨な状況をみたら改めて考えざるをおえないはずだ。

私は，当時の日本には日本人だけじゃなくて，捕虜として日本に連れてこられて強制労働をさせられた多くの朝鮮人や中国人，そして各国の人々までが長崎や広島に落とされた原爆の被害に

あっていることはニュースを見て知っていたが資料館でみた被害にあった人の数を見てすごくびっくりした。私が想像していたのより遥かに多い人たちが被害にあっていたからだ。死者の多くが熱線と火災が原因とされている。熱線による被害は重傷になると表皮は焼ただれてはがれ落ち組織や骨が露出する。他にも放射線も身体に影響を及ぼす。原爆白内障，白血病，癌，胎児には小頭症などが生き延びてもこれらにかかり苦しまなきゃいけない。日本は核兵器を作るのも保持するのも禁止されているが他の国は核兵器を持っていてそれをいいことによく牽制をしている。長崎や広島で起きたようなことは二度と起きてはいけないと思う。日本はそれを海外の人やこれからずっと先の未来を生きる人に伝えていかなくてはいけないと思う。そのためにも私たちが戦争について話を聞いてもっと考えてこの先伝えていくのが必要だと思う。

長崎フィールドワーク
（開国地長崎の異文化受け入れ・被爆都市長崎の訴え・観光都市への発展調査）

２年９組　鈴川　世奈

◆観光地に於ける異文化の受け入れ

今回のSGH国内フィールドワークでは３泊４日で長崎に行った。長崎は鎖国時代には唯一，オランダ人が立ち入れる出島があったり貿易商のグラバーのグラバー園があったり，昔から外国とのつながりがあった。今回訪れた研修先でもグローバルについて触れることがあった。例えば，長崎大学に訪れた時に，多文化社会学部での先生の講義で難民について考えることがあった。難民は何処からきて，何処に受け入れてもらっているのか，教えてもらいました。初めて知った情報も，改めて知った情報も具体的な国の名前や数字で教えてもらったので，驚いたし，すごく深刻な問題ということが改めて思った。特に日本の難民受け入れ状態について印象が残った。現在，日本政府が難民として日本に住んでよいと認めた人数が２０１５年で２７人しかいない。また，第三国定住の受け入れ人数も２０１４年で２３人しかいない。一方，アメリカは４８９１１人など他の先進国でも多くの人数を受け入れていることから，日本はかなり少ないことが分かる。このことから，日本はもっと難民を受け入れた方が良いのかを考えた。私は，いずれはもっと受け入れた方が良いと思うけど，今すぐには難しいと思う。日本の会社は人件費を安くするために難民の方を雇い，日本人はますます就職するのが難しくなると思う。また，日本は多民族国家ではないから，日本人以外を受け入れるのに戸惑ったり，少し抵抗があったり，色々な面で問題がでてくると思う。これから，世界の国々が難民の受け入れ拒否をして難民の人々は大変になると思う。だからこそ日本はもっと難民の受け入れを増やして欲しい。しかし，日本人にたいしてメリットのない，デメリットしかない受け入れ状態にならないように，対応していくことが必要だと思う。

長崎大学で多文化社会学部の授業に少し参加させてもらったとき，グループでのプレゼンテーションテーションの発表会だった。何グループかの発表を聞かせてもらって，興味をもった話がある。ある国の女の人がほかの国へ行こうとしたときに，着ている服に書かれていることで止められた話で，その国とでは言葉のとらえ方が違うからである。日本でも，漢字が書かれている服を着ている外国人を見かける。それを見て私たちは少し変だと感じるデザインの服を着ていることもある。しかし，それは相手にとっても同じで，日本人が英語のデザインの服を着ているのを見て，不快に思う外国人の人がいるかもしれない。こういった点でも異文化を理解する必要がある。

◆原爆被災地日本からの発信

研修の行程でまず長崎原爆資料館に行った。ここには,原爆で壊れた建物の残骸や原爆の模型,当時の人たちが身に着けていたものなど，全てがあった。映像や写真の中には，原爆で焼けた遺体だったり，血の付いた服だったり，目を背けたくなるものまであった。展示物から，今まで通りの生活が一瞬にして変わったのが分かる。熱線で板塀に前にあったはしごと，立っていた兵士の体の影が写った写真が,その一瞬を物語っている。他にも女子学生の弁当箱が展示されていた。弁当箱の裏には，女子学生の名前が刻まれていた。９日は，朝から空襲警報が出ていたため自宅で待機中に，祖父母とともに被爆し，即死した。そのあと，父親が遺体を探しているうちに見つ

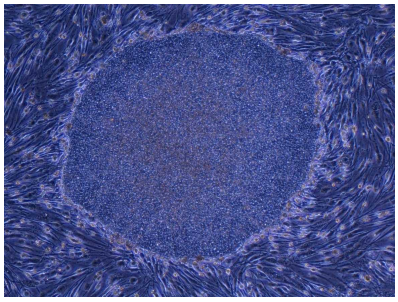
けたものだそうだ。このような，解説やエピソードを知るとさらに，生々しさが伝わってくる。また，この資料館は英語，中国語，韓国語の解説や点字，オーディオがあった。さらに，館内にQRコードがあり，携帯でも読み取って解説を読むことができ，その際にも何ヶ国もの言葉で設定ができる。このように，様々な人に伝わるように工夫がされていた。他にも初めて知ることがあった。米軍機が投下したビラがあった。文面には原爆の威力，広島に投下した事実，市民への退避の呼びかけや戦争の中止の勧告が書かれていた。しかし，実際にビラがまかれたのは投下後だったと，たくさんの証言や資料が残っている。このビラは長崎だけでなく，原爆投下は最初から長崎だったと決まっていなかったことが，このことからもわかる。このように戦争や原爆で良いことはない。しかし，今でも核実験は行われている。アメリカは最多で１０３０回，ソ連やロシアは７１５回など世界中で合計２０５４回も行われていた。興味をもったのは，北朝鮮で数は４回と他の国にくらべたら少なかった。しかし，元々展示されていたボードの上から修正されていた。きっと，今でも核実験が行われていて，これからも更新されていくのだと思った。核は誰の為にもならないことに，早く気付いて欲しいと思う。

平和記念公園へは当日に行けなかったので，前日に行くことにした。記念の像の前に行くことができた。その目の前に並んでいる遺族の方々の席の多さに驚いた。戦後７０年以上たった後でも被爆者の子孫がこんなにもいたことを初めて知ることができた。このように，実際来てみないと知らなかったがあったので良かったと思うし，貴重な体験だったと思う。しかし，当日に行きたい気持ちがあったので，いつかは参加できたらいいなぁとおもった。

Ⅸ．社会課題研究論文（社会課題を見出すことを目的として，英語の授業で実施）

【1年10組　Aグループ】

iPS cells are about to be available in the field of medical care



Credit: Kyoto University, Professor Shinya Yamanaka

iPS cells are called 人工多能性幹細胞 in Japanese. It is shortened form of “Induced Pluripotent Stem cells.” It is made from patient’s cells. So patient’s body doesn’t refuse it. And it can cure disease. When Shinya Yamanaka won the Nobel Prize in Physiology or Medicine, iPS cells were not being used in the field of medical care yet, but iPS cells are making great progress. For example, a health insurance was applied to iPS cells.

The fact is that a health insurance was applied and iPS cells are making great progress.

About one million people around the world are ill ischemic heart disease. This is one of the heart diseases. If you suffer from it, your blood is short. But the myocardium sheet which is used as this treatment was developed in January ２０１６. The myocardium sheet is made from cells of a thigh muscle. It makes broken cells grow again. The myocardium sheet is put and given off cytokine and makes damaged cells well. Cytokine pays telling information in immunity cells. And it is a type of protein. Also, health insurances are going to be applied to hair, skin, brain, eyes, tooth and liver after from ５ to １０ years.

But it is very difficult to pass through blood vessels to a heart. If it comes true, we won’t have to wait for heart transplant, and will be able to cure more and more patients. The blood vessel is the tube that blood flow.

However, even if we use iPS cells positively, there are ethical issues. Ova and sperm are used when they make iPS cells. So some people suspect that iPS cells make a cloned child. And some religionists say that it is bad to transplant everything. As they say, iPS cells, which can make easily and largely are dangerous, because sociological systems aren’t perfect.

So many people should know iPS cells in detail. And we hope many people have good impression to iPS cells and think iPS cells are wonderful technology.

RM

・http://症状と治療法

・NHK あさイチ

・www.cira.kyoto-u.ac.jp/j/pressrelease/media/１０１１２９-１３４１１７.html

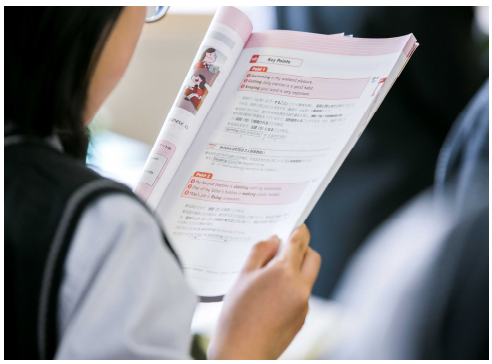
【1年10組　Bグループ】

There are problems that Japanese people lack the English ability.

According to the research which is called EF EPI, which is an survey on English ability of people whose native language is not English, Japan is ranked lower than developed countries. This result shows that Japanese people lack the English ability.

Japanese English Education brought the result. One of the reasons why it is thought that Japanese English education does not succeed is emphasizing of grammar and reading. Learners in Japanese school have been only practicing translating English into Japanese, and comprehending English. Reading and grammar-oriented education will bring the opposite effect to their English abilities.

Then, how can this problem be solved ?
For one thing, the children learn to speak their native language just listening to those around them; it is often called critical period hypotheses. In other words, they have the powerful ability to learn languages. So we may have to educate them in order not to waste their ability.
Based on this idea, it is important that English teachers teach English to children in the early childhood in order to grow them up to be a good English speaker.
But there are some demerits for the children. For example, perhaps, the children who was taught English in the early childhood will have problem of communicate in their native language, because it is said that Japanese differs from English in that it has complicated structure.
It seems that it is hard to change present English education in Japan, because the entrance exam of the university has lasted from old. But this is changing gradually.
In conclusion, present Japanese English education don't make good use of Critical Period Hypotheses, and exam of the university can only test examinee's grammar and reading skill. So to teach English to children in the early childhood and changing the entrance examination for the university are necessary.



【1年10組　Cグループ】

The global warming-the fact which you don't know.

The global warming is one of the biggest environmental issues.
It is phenomenon that greenhouse gas, especially CO２ or CH４ in the atmosphere increases and too much heat is absorbed by the ground. As a result, the temperature is going to rise. After the industrial revolution, the number of fossil fuel used is increasing. Because of that, the concentration of carbon dioxide(CO２) in the atmosphere is growing too.
International matters increase when the global warming getting worse. For example, food and water lack may cause large migration, wars over resources to break out and so on.
Some of the wars and the environmental issues such as drought and a rise in the average temperature are linked. For example, the number of robberies and killings is increasing in Africa, land robbery cases often happen in Brazil, and conflictions of citizens occur in the tropical zone. All of these have happen since the climate change started.
And it can be danger that climate change will promote terrorism according to an international report which was announced last July. This report title is "risk evaluation of climate change" and it was written by many experts. According to this report, a large climate change can damage safety in the domestic and international security.
Moreover, much water trouble and productive farmland can cause wars. Also, climate change promotes environmental troubles in many countries at the same time.
It is difficult to treat many problems.
Besides territory extension which is not controlled by government causes risk of terrorism.
And the number of people who become poor is increasing and they are attracted to a terrorism organization.
Everyone should do something such as grow plants, ride bicycle and use public transportation which give off less carbon dioxide than car, in order not to the global warming will get worse, because international problems happen more.

SAT(愛称:いぶき)は，主要な温室効果ガスである二酸化炭素とメタンの
濃度を宇宙から観測することを専用とした，世界初の人工衛星
環境省ホームページ引用

【1年10組　Dグループ】

Title: Food problem

First. What is TPP
TPP stands for Trans-Pacific Partnership.
It is Free Trade Agreement (FTA) ,which establish around America.
It is an appointment which intends to remove the customs duties.
The countries participating in the conference are Australia,Brunei,Canada,Chile,
Malaysia,Mexico,New Zealand,Peru,Singapore,USA and Vietnam.
TPP is started by Singapore,Chile,New Zealand and Brunei.

Next. The advantage of participating in TPP
To remove the customs duties makes imported food cheaper.
This assist consumers' household expenses.
While,Free trade increases many exports of Japanese products.
The profit of major companies will increase.

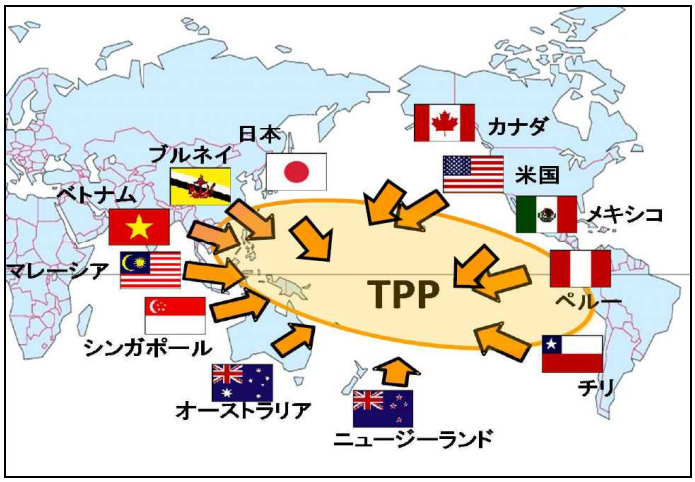
Third. The disadvantage of participating in TPP
A deflation is caused when foreign cheap products are imported.
Japanese agriculture can't beat the foreign inexpensive crops.
For example,meat products,fruits and vegetables.
Japanese agriculture will become weak.
Food may not be safe anymore because of deregulation.
Because,there is a high likelihood that foreign foods are not safety compared with Japanese.
By the way,Poor people may not have a medical treatment at a hospital.
Because the medical insurance may be abolished.
A gap may be happened in aspect of medical.
The number of the unemployed will increase.
Because,small and medium companies will crush.

In fact. Problems
To secede TPP is possible in the TPP rule,but overseas enterprises may charge compensation for damages.
Therefore,in practice,it is too difficult to leave TPP.

Finally. Summary and now
There are opinions opposite to agreement in TPP.
Japan decided to participate in TPP because there are demerits no less more than merits.
Japan can't keep up with globalization if it doesn't participate in TPP.
Frankly,it is questionable that participating in TPP will make something good of the

Japanese future.

We hope that Japanese government make a responsible decision.



【1年10組　Eグループ】

Poverty Problem

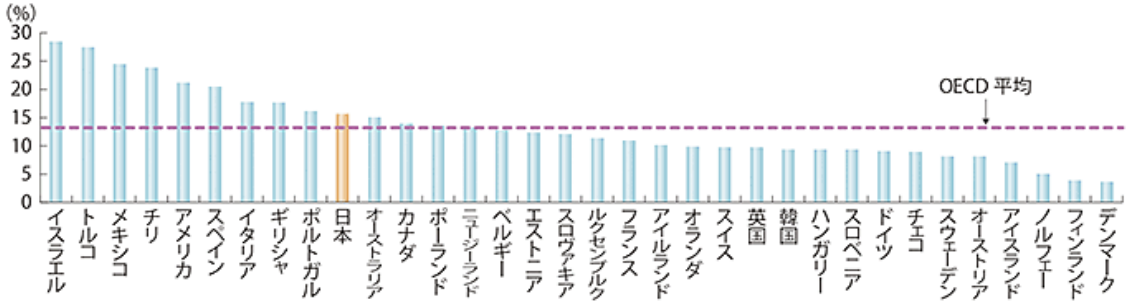
There are many poor people in the world, and it is a very serious problem. Do you know any poor countries? For example, most of the African countries are poor. But a few African countries such as South Africa are not poor. What is the difference between poor countries and the others? We have some reasons. Most of the rich countries have resources which poor countries don't have. Also, poor countries have serious political problems. How can poor countries get rich? One of the answers is to get technology. Rwanda which is an African country is the good example. In Rwanda, many people were killed by the civil wars and the slaughters around １９９０. The civil wars and slaughters ended and then Diasporas the civil wars and the slaughters made came back to Rwanda and they take Rwanda technology and knowledge. It didn't take Rwanda long to develop their economy and it is called "Rwandan Miracle". Japanese government contributes to "ODA". "ODA" is the support that rich countries give poor countries technology and money. Also, compared to rich countries, most of the poor countries' educations are behind. To receive education and get knowledge and morals can make it easier for children to get job and earn money in the modern global society. It is also important for rich countries to "trade fairly", it does not mean "free trade" like TPP or WTO but getting something from poor countries by right price in this case. For example, "Morinaga chocolate< 1　chocolate for　1　smile>"is made from cacao which is bought in right price from Ghana. This activity is expected the effect to help counties which is folded into the monoculture economy which is a countries' economy depending on the only one product. And what is more, fair trade makes poor people's income larger. And it can make children who are working get an opportunity to receive education but fair trade is not perfect. It can make products' price higher.　The key point of solving this problem will be depending on whether rich countries' people, including us, by anything in a higher price or not.

It is important to give them technology and formal educations and install infrastructures. Botswana, an African honor student is a god example of the education.　Botswana keeps stable GDP by steady economic policies, well-balanced politics, much resources and high-level education. GDP for each person is as much as Malaysia. We think it is the most important to encourage them to be independent. We, who live in a rich country, have to think about what we should do.

Written by Ryohei Yamada,　Kousuke Saitou　Haruki Abe

第1-3-39図　相対的貧困率の国際比較（2010年）

（1）子どもの貧困率



内閣府　子どもの貧困データ引用

（2）全体

相対的貧困率			子どもの貧困率			子どもがいる世帯の相対的貧困率								
						合計			大人が一人			大人が二人以上		
順位	国名	割合	順位	国名	割合	順位	国名	割合	順位	国名	割合	順位	国名	割合
1	チェコ	5.8	1	デンマーク	3.7	1	デンマーク	3.0	1	デンマーク	9.3	1	ドイツ	2.6
2	デンマーク	6.0	2	フィンランド	3.9	2	フィンランド	3.7	2	フィンランド	11.4	1	デンマーク	2.6
3	アイスランド	6.4	3	ノルウェー	5.1	3	ノルウェー	4.4	3	ノルウェー	14.7	3	ノルウェー	2.8
4	ハンガリー	6.8	4	アイスランド	7.1	4	アイスランド	6.3	4	スロヴァキア	15.9	4	フィンランド	3.0
5	ルクセンブルク	7.2	5	オーストリア	8.2	5	オーストリア	6.7	5	英国	16.9	5	アイスランド	3.4
6	フィンランド	7.3	5	スウェーデン	8.2	6	スウェーデン	6.9	6	スウェーデン	18.6	6	スウェーデン	4.3
7	ノルウェー	7.5	7	チェコ	9.0	7	ドイツ	7.1	7	アイルランド	19.5	7	オーストリア	5.4
7	オランダ	7.5	8	ドイツ	9.1	8	チェコ	7.6	8	フランス	25.3	7	オランダ	5.4
9	スロヴァキア	7.8	9	スロベニア	9.4	9	オランダ	7.9	8	ポーランド	25.3	9	フランス	5.6
10	フランス	7.9	9	ハンガリー	9.4	10	スロベニア	8.2	10	オーストリア	25.7	10	チェコ	6.0
11	オーストリア	8.1	9	韓国	9.4	11	フランス	8.7	11	アイスランド	27.1	11	スロベニア	6.7
12	ドイツ	8.8	12	英国	9.8	11	スイス	8.7	12	ギリシャ	27.3	12	スイス	7.2
13	アイルランド	9.0	12	スイス	9.8	13	ハンガリー	9.0	13	ニュージーランド	28.8	13	ハンガリー	7.5
14	スウェーデン	9.1	14	オランダ	9.9	14	英国	9.2	14	ポルトガル	30.9	13	ベルギー	7.5
15	スロベニア	9.2	15	アイルランド	10.2	15	アイルランド	9.7	15	メキシコ	31.3	15	ニュージーランド	7.9
16	スイス	9.5	16	フランス	11.0	16	ルクセンブルク	9.9	15	オランダ	31.3	15	ルクセンブルク	7.9
17	ベルギー	9.7	17	ルクセンブルク	11.4	17	ニュージーランド	10.4	17	スイス	31.6	15	英国	7.9
18	英国	9.9	18	スロヴァキア	12.1	18	ベルギー	10.5	18	エストニア	31.9	18	アイルランド	8.3
19	ニュージーランド	10.3	19	エストニア	12.4	19	スロヴァキア	10.9	19	ハンガリー	32.7	19	オーストラリア	8.6
20	ポーランド	11.0	20	ベルギー	12.8	20	エストニア	11.4	20	チェコ	33.2	20	カナダ	9.3
21	ポルトガル	11.4	21	ニュージーランド	13.3	21	カナダ	11.9	21	スロベニア	33.4	21	エストニア	9.7
22	エストニア	11.7	22	ポーランド	13.6	22	ポーランド	12.1	22	ドイツ	34.0	22	スロヴァキア	10.7
23	カナダ	11.9	23	カナダ	14.0	23	オーストラリア	12.5	23	ベルギー	34.3	23	ポーランド	11.8
24	イタリア	13.0	24	オーストラリア	15.1	24	ポルトガル	14.2	24	イタリア	35.2	24	日本	12.7
25	ギリシャ	14.3	25	日本	15.7	25	日本	14.6	25	トルコ	38.2	25	ポルトガル	13.1
26	オーストラリア	14.5	26	ポルトガル	16.2	26	ギリシャ	15.8	26	スペイン	38.8	26	アメリカ	15.2
27	韓国	14.9	27	ギリシャ	17.7	27	イタリア	16.6	27	カナダ	39.8	26	ギリシャ	15.2
28	スペイン	15.4	28	イタリア	17.8	28	アメリカ	18.6	28	ルクセンブルク	44.2	28	イタリア	15.4
29	日本	16.0	29	スペイン	20.5	29	スペイン	18.9	29	オーストラリア	44.9	29	チリ	17.9
30	アメリカ	17.4	30	アメリカ	21.2	30	チリ	20.5	30	アメリカ	45.0	30	スペイン	18.2
31	チリ	18.0	31	チリ	23.9	31	メキシコ	21.5	31	イスラエル	47.7	31	メキシコ	21.0
32	トルコ	19.3	32	メキシコ	24.5	32	トルコ	22.9	32	チリ	49.0	32	トルコ	22.6
33	メキシコ	20.4	33	トルコ	27.5	33	イスラエル	24.3	33	日本	50.8	33	イスラエル	23.3
34	イスラエル	20.9	34	イスラエル	28.5	–	韓国	–	–	韓国	–	–	韓国	–
	OECD平均	11.3		OECD平均	13.3		OECD平均	11.6		OECD平均	31.0		OECD平均	9.9

（出典）OECD（2014）Family database "Child poverty"
（注）ハンガリー、アイルランド、日本、ニュージーランド、スイス、トルコの数値は2009年、チリの数値は2011年。

内閣府　子どもの貧困データ引用

平成 27 年度指定　スーパーグローバルハイスクール
研究開発実施報告書・第２年次

発行日　平成２９年３月
発行者　学校法人札幌日本大学学園
札幌日本大学高等学校
校長　浅利　剛之
住　所　〒０６１-１１０３
北海道北広島市虹ヶ丘 5 丁目 7 番地１
ＴＥＬ　０１１-３７５-２６１１
ＦＡＸ　０１１-３７５-３３０５
印刷所　中西印刷株式会社